

ヲ裁判セシ所ノ民事裁判所ニ代レル者ナリ而シテ千八百二十八年ノ
 王勅ヲ見ルニ未ダ曾テ収没陪審官ニ對シ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得ス
 ト定ムルノ條アラズ此レ前編ヲ許認ス可カラサル理由ノ一ナリ又陪
 審官ノ行政權侵佔ノ危難ハ他ノ民事裁判所ノ侵佔ノ恐ル可キニ異ナ
 ルナシ此レ前論ヲ許認ス可カラサル理由ノ二ナリ又ダレスト氏ハ破
 毀法院ニ訴出スルノ手段アリト言ヒタレトモ實ハ以テ行政官ノ保障
 トスルニ足ラス何トナレハ破毀法院モ亦司法官ノ一部ナルヲ以テ其
 地位ノ爲メニ或ハ偏頗ノ處斷ナキヲ保シ難ケレハナリ若シ却テ之ヲ
 破毀法院ニ上告ス可キ者トスルキハ何レノ場合ヲ論セス凡テノ裁判
 所ノ裁判ニ對シテ弄權ノ訴ヲ該法院ニ起ス可シトスルノ論ニ歸着ス
 ルカ故ニ權限抵觸訴訟ナル者ハ畢竟何レノ裁判所ニ對スルモ起ス
 ナ得サルニ至ル可シ請フ猶ホ一言ヲ附セン曰ク収没ノ件ハ參事院ノ

第五百七十五

行政權限ニ關係スルノ最モ切ナリ加之ナラス未ダ曾テ司法官ノ行政
 權侵佔ヨリ最モ恐ル可ク最モ危キ者ハアラサルナリ
 權限抵觸訴訟ヲ起シ得ルノ期限ニ關シテハ一定ノ規程ナキヲ以テ昔
 時爲メニ大ニ弊害ヲ生シタリ殊ニ督理政ツレクツリ、岡士政オンシヤ及ヒ第一帝政ノ時ヲ
 甚シトス當時法律ニ於テ權限抵觸訴訟執行ノ期限ヲ定メサルヲ名ト
 シテ終審裁判宣告ノ後ニ至リテモ猶ホ之ヲ起スヲ許セシマアリ而シ
 テ此ノ如キノ弊害ヲ辯解スル論者ノ言ニ曰ク司法官ニ於テ行政官ノ
 權ヲ侵奪スルハ兩權區別ノ國憲大法ニ違フ若シ此侵奪ヲシテ豫審ノ
 時ニ始マラサルモ其終審裁判宣告ノ日ニ成ラシメハ是レ終審裁判宣
 告ヲ以テ行政權ノ侵奪ヲ確認増長スル者ニシテ其侵奪タルノハ常ニ
 侵奪タリ決シテ不問ニ措ク可カラス諸レテ人民相互ノ關係ニ譬ヘン
 ニ人アリ他ノ私有財産ヲ奪有スルアテシ此奪有ヲ以テ直チニ正當ト

認め可カラサルハ固ヨリ論ヲ俟タス然ラハ則チ官衙相互ノ間ニ於テモ亦侵奪即チ弄權ヲ爲シ了リタルヲ以テ直チニ正當トス可キノ理ナシ加之ナラス更ニ侵奪ヲ處罰ス可キノ一理由アリ何ソヤ曰ク司法行政兩權ノ區別ハ公ケノ秩序ニ關スル大事ナリ故ニ決シテ期滿免除ス可キ者ニアラスト以上ノ論說ハ確的ト謂フヨリモ寧ロ浮薄ト評ス可シ果シテ此論說ノ如クナルキハ社會保安ノ重器ト着目スル所ノ主意即チ控訴ス可カラサル力ヲ有スル裁判ヲ尊重シテ敢テ傷ケサルノ大法ハ遂ニ顛覆スルニ至ラン現ニ原被告ノ一方既ニ終審裁判宣告ニ依リ勝訟者トナリタルノ後ニ至リ猶ホ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得ルトスルキハ敗訟者自カラ終審裁判ノ覆審ヲ求ムルヲ得スト雖モ行政官ヲ鼓動シテ權限抵觸訴訟ヲ起スノ手段ヲ構造セントス若シ又權限抵觸訴訟ハ獨リ行政官ノミノ爲メニシ既ニ終審裁判ヲ受ケタル兩造ノ利

益ニハ曾テ變更ヲ生セサル可シトスレハ畢ニ權限抵觸訴訟ノ目的ヲ達スルヲ能ハス何トナレハ權限抵觸訴訟ナル者ハ行政官ノ自カラ裁判ス可キ訴件ヲ己レニ取テ之ヲ判決スルノ權ヲ要ムルノ謂ナレハナリ故ニ行政官ハ所謂是レ我カ管轄ナリト言ヘル格言ヲ援クヲ得ルノ場合ニ非サレハ之ヲ要ムルヲ得ス然ルニ裁判所ニ於テ訴件ヲ終審確定シ了リタルキハ此レ既ニ裁判官ナク隨テ相争フ所ノ兩造ナク又裁判ス可キノ訴件ナキナリ餘ス所ノ者ハ只管テ眞理ト見做ス所ノ一裁判宣告アルノミ故ニ又裁判權ヲ要ム可キ者ナシ

千八百十四年一月六日ノ詔書ニ依リ控訴ス可カラサル裁判宣告ヲ得タル訴件ニ關シ權限抵觸訴訟ヲ起ス可カラサルノ制規ヲ定テ前段ニ述ヘタル弊害ノ一分ヲ改削セリ爾來權限抵觸訴訟ハ破毀上告ノ期限滿盡ニ至ルマテ之ヲ起スヲ得タリ今日ニ在テハ千八百二十八年六月

一日ノ王勅第四條アルヲ以テ亦昔時ノ弊害ヲ生スルヲナシ本條ニ云ク此王勅第八條ノ末節ニ掲ケタル場合ノ外終審裁判宣告ノ後若クハ本案裁判承諾ノ後兩造猶ホ控訴スルノ權アレハ之ヲ行ハ若クハ確定裁判宣告ノ後ニ至リ決シテ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得ス但シ權限抵觸訴訟ハ始審ニ於テ之ヲ起サス若クハ此王勅第八條ニ定メタル期限後ニ於テ規制ニ違ヒ既ニ之ヲ起シタリト雖モ更ニ控訴ノ時ニ於テ之ヲ起スヲ得ヘシト

是ニ由テ之ヲ觀レハ凡ソ兩造ニ於テ尋常ノ手續ヲ以テ其受ケタル裁判ヲ申訴スル能ハサルニ至レハ行政官モ亦權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得ス此レ即チ王勅第四條中終審裁判宣告ノ後若クハ本案裁判承諾ノ後若クハ確定裁判宣告ノ後ト云ヘル句アルニ由ル故ニ兩造ノ爲メニハ猶ホ破毀上告若クハ敬慎ノ訴等ノ如キ非常ノ手續ヲ以テ申訴スルノ

第六十七百第

路ヲ開クアリト雖モ此時ニ至リ權限抵觸訴訟ハ亦起スヲ得サル可シ何トナレハ原裁判宣告ニ於テ兩造ノ爲メニ既得不變ノ權ヲ附シタルハナリ

千八百二十八年ノ王勅第四第六及ヒ第八ノ三條ヲ比照スレハ本案訴訟ノ確定裁判アルニ至ルマテ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得故ニ州長ヨリスル裁判轉移ノ訴ハ本案出訴中何時ニテモ之ヲ起スヲ得ヘシ然ラハ則チ裁判所ニ於テ本案ニ關スル豫審裁判ヲ爲シタルノ故ヲ以テ裁判轉移ノ訴ヲ起ス可カラストス可カラス千八百四十年五月二十日ホレノ判決

兩造ニ於テ猶ホ控訴シ得ルノ權ヲ拋棄シテ本案ニ關スル豫審裁判ヲ承諾シタル時モ亦裁判轉移ノ訴ヲ起スヲ得サル可カラス夫ノ千八百二十八年ノ王勅第四條ニ掲ケタル承諾トハ本案訴訟ノ確定裁判ニ控訴ス可カラサル力ヲ與ヘタル所ノ承諾ノ義ニ外ナラサル可シ千八百四十五年

年八月三十日、イルト作判決。若シ未ダ本案ヲ裁判セシメス或ハ未ダ其控訴權ヲ抛棄セサル間ハ司法官ニ訴ヘタル争訟常ニ存シテ滅スルナシ隨テ該争訟ニ就キ行政官ヨリ其裁判權ヲ要ムル訴訟即チ裁判轉移ノ訴ヲ起スヲ得ルナリ故ニ此時ニ際シ既ニ本案ニ關スル豫審裁判ヲ兩造ノ間ニ行フタリト稱シテ行政官ノ出訴權ヲ拒ミ難シ千八百五十一年七月二日。千八百五十三年十二月二日、シアンバール件ニ關スル權限抵觸裁判所判決。十四日、バルイ一件及ヒ

第七百七十七第

敗訟者ヨリ破毀上告ヲ行ヒ若クハ敬慎ノ訴ヲ爲シテ原裁判ヲ拒否セシメタル時ハ一タヒ落着シタル訴訟再燃スルニ至ル可シ隨テ行政官ノ爲メニ權限抵觸訴訟ヲ起スノ利益及ヒ權利モ亦再生スレヒ爲メニ決シテ兩造既得ノ權利ヲ害スルヲナシ破毀法院ニ於テ公利上收没ノ件ニ關シ其訴訟及ヒ兩造ヲ或ル裁判所若クハ特別陪審官ニ廻致シタル時モ亦前ニ同シカル可シ千八百四十七年三月十九日、アンドレ一件判決。

第七百八十八第

控訴シ得ル所ノ裁判宣告ニ關シ千八百二十八年ノ王勅ハ明カニ控訴期限内ニシテ敗訟者ヨリ控訴スル前ニ於テ行政官ハ權限抵觸訴訟ヲ起シ得ルヤ否ヤノ點ヲ説カスト雖モ該王勅ノ末節ニ於テ「始審ノ時ニ當リ權限抵觸訴訟ヲ起サス若クハ制規ニ違フテ該訴訟ヲ起シタル時ハ控訴ノ時ニ於テ之ヲ起スヲ得ル」ト記スルヲ見レハ控訴期限内ニシテ敗訟者ヨリ未ダ控訴セサル場合ニ於テ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得サルニ似タリ夫レ控訴アルカ爲メニハ先ツ敗訟者自カラ其控訴權ヲ享用シテ上等裁判所ニ申告スルヲアルヲ要ス加之ナラヌ一タヒ確定裁判ヲ宣告スレハ之ヲ控訴セサル間ハ本訴ハ既ニ廢滅シ勝訟者ニ全ク其權利ヲ與ヘタルナリ故ニ此時ニ當リ敗訟者該確定裁判ヲ至當ト思考シ敢テ控訴スルヲ欲セサレハ惡ノ行政官ハ獨リ己ノ爲メニ既滅ノ訴件ヲ再生セシメ以テ自カラ之ヲ裁判スルヲ得ヘケンヤ。

九十七百第

前項ニ論スル所ト同一ノ疑問ヲ以テ故障申述期限内ニシテ闕席者ニ於テ未タ該故障申述ノ權ヲ享用スル前ニ係ル闕席裁判ニ擬スルヲ得蓋シ前項ノ問題ニ關シ定メタル主義ヲ推セハ勢ヒ之ト同一ノ見解ヲ生出ス可シ故ニ闕席者其闕席裁判ヲ至當トシ敢テ故障申述ノ權ヲ享用スルヲ欲セサレハ惡ンソ行政官獨リ己ノ爲メニ既滅ノ訴件ヲ再生セシム可ンヤ或ハ云ハソ闕席裁判ハ其故障申述ヲ爲シ得ル間ニ於テ控訴ス可カラサル力ヲ有スル裁判ト見做ス可カラスト曰ク闕席者若クハ其代權者ノ闕席裁判ヲ故障シ得ルハ實ニ然リ例ヘハ猶ホ控訴シ得ル裁判ハ之ヲ控訴シ得ル間ニ於テ決シテ控訴ス可カラサル力ヲ有スル裁判ト見做ス可カラサルカ如シ然レモ此等闕席裁判及ヒ控訴シ得レモ未タ敗訟者ヨリ之ヲ控訴セサル始審確定裁判ハ各其勝訟者ニ應分ノ權利ヲ與ヘ他日法律ニ依リ定メタル方法ヲ用ヒ之ヲ故障シ

十八百第

之ヲ控訴スル者アルニ非サレハ其權利決シテ消解セス故ニ闕席裁判及ヒ始審確定裁判ハ其故障申述若クハ控訴スル者アルニ至ルマテハ本訴ヲ廢滅シ之ヲシテ再燃セシムルヲナキナリ是ヲ以テ兩造ニ於テ闕席裁判ヲ以テ其意ニ滿テリトスレハ該裁判ハ則チ司法上ノ一契約トナレリ既ニ契約トナリタレハ行政官タル者惡ンソ兩造ヲ強ヒ之ヲシテ再ヒ行政官ノ前ニ出訴セシムルヲ得ンヤ敗訟者一タヒ控訴シ或ハ故障申訴ヲ爲シタル後ハ再ヒ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得ルヲ固ヨリ論ヲ俟タス何ントナレハ此時ニ當リテヤ既滅ノ訴件既ニ再燃スレハナリ千八百二十八年王勅第四條但シ本案訴訟ニ關シ原問裁判官ハ終審裁判ヲ行フ可クシテ始審裁判ヲ行フ可カラサル者ナルヲ以テ訴訟法第四百五十四條ニ依準シ闕席者若クハ始審敗訟者ヨリ原問裁判官ノ裁判ス可カラサル者トシテ之ヲ控訴シタル場合ニ於テモ亦

第一百八十一

以上ノ見解ヲ下サ、ル可カラスト雖モ或ハ爲メニ疑ヲ惹起ス可キ當然ノ理由アリ何ソヤ曰ク此時ニ當リ控訴ハ專ラ原問裁判官ニ於テ果シテ權限外ノ裁判ヲ爲セシヤ否ヤノ點ノミニ係ル故ニ若シ該裁判官ヲ以テ權限外ノ裁判ヲ行ヒタリトスル控訴ヲ拒否シタルキハ原裁判ハ即チ確定裁判ナリトスル是ナリ此疑問ハ頗ル切實ナレトモ既ニ權限外ノ裁判ナリトスル控訴ヲ起スノ實アレハ以テ本案訴訟ノ猶ホ未タ局ヲ結ハサルト敗訟者ニ原裁判ヲ廢棄セシメテ更ニ自カラ勝訟者トナル可キ未來ノ權ヲ有スルヲ證スルニ足レリ加之ナラス前ニ援キタル千八百二十八年ノ王勅第四條ノ本文中ニハ決シテ彼此ノ別ヲ立テスシテ共ニ之ヲ許シタリ千八百三十八年十月十日レクレルク件判決訴訟法ニ定メタル控訴滿盡ノ後ニ至リ控訴ヲ爲シタル時ハ控訴院ニ對シ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得ルヤノ問題ニ關シ參議院ハ之ヲ爲シ得

スト判決シタリ千八百五十七年七月三十日サンローラン、デビー、グエ、邑件及ヒ千八百二十二年二月二十日グロ、ルノ、一件判決決若シ却テ之ヲ爲シ得ルトスレハ權限抵觸訴訟ハ遂ニ滿盡ノ期限ナキニ至リ假令十年若シハ二十年ノ後ニ控訴スルアルニ當リテモ尙ホ司法官ニ對シ權限論ヲ發シテ起訴ノ權ヲ行フヲ得ヘシ豈ニ夫レ理ヲラノヤ故ニ凡ソ權限抵觸訴訟ヲ起シ得ルカ爲メニハ獨リ控訴アルヲミチ以テ足レリトセス并ヒテ定法ノ期限内ニ控訴シテ既ニ司法上ノ爭論ヲ開キタル實アルヲ要ス但シ疑團ヲ生スルノ理由ハ已上ノ見解ニ因リ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ拒メル者ハ控訴期限既ニ滿盡セリト主張シ之ヲ起サントスル者ハ未タ滿盡セスト辯論スルノ時ニ際シ參議院ハ暗ニ自カラ控訴ス可キヤ否ヤノ點ヲ判決スル者ノ地位ニ立ツニ在リ故ニ參議院ニ於テ權限抵觸訴訟ヲ起ス可カラスト宣告スル時ハ其期限滿盡ノ後ニ控訴シタルナリト豫定スル所アルナリ

然レモ余ノ考案スル所ニ据レハ假令參議院ニ於テ右ノ如キ判決ヲ爲
 スモ決シテ爲メニ控訴院ヲ檢束セサル可シ故ニ控訴院ハ權限抵觸訴
 訟ノ爲メニ生シタル延期滿盡ノ後ト雖モ參議院ノ意見ニ反對シ其受
 理ス可カラスト見做シタル控訴ヲ反テ受理ス可シト宣告スルヲ得可
 シ此ノ如クシテ參議院ハ控訴ヲ受理ス可カラスト判決シ控訴院ハ反
 テ之ヲ受理ス可シト宣告シタルト雖モ彼此ノ斷決全ク相牴牾セリト
 ス可カラス何トナレハ參議院ノ判決ハ獨リ權限抵觸訴訟ヲ起ス可カ
 ラサルノ一點ニ在ルノミ而シテ期限滿盡ノ後ニ控訴セリト觀察シタ
 ルハ該判決ヲ爲スノ一理由タルニ過キス然レモ若シ參議院ノ判決ア
 ルヨリシテ遂ニ控訴シ得サルノ結果アリト許認スル時ハ該判決ニ對
 シ頗ル強盛ナル駁論ヲ來ス可シ蓋シ此ノ如キノコハ參議院モ恐クハ
 未ダ曾テ慮ラサル所ナラシ故ニ若シ此等ノ弊害ヲ避ケント欲スレハ

第二百八十八

權限抵觸訴訟ヲ起スノ件ヲ暫ク未定ニ附シ豫メ控訴シ得ルヤ否ヤノ
 點ヲ判定スルノ權ヲ控訴院ニ委スルヲ要ス
 兩造ニ對スル裁判所ノ權限ニ係ル始審裁判ニ控訴ス可カラサル力ヲ
 既ニ與ヘタル後ト雖モ州長ヨリ權限抵觸訴訟ヲ起サントシテ裁判轉
 移ヲ訴フノ障礙ヲ爲スナカル可シ夫ノ千八百二十八年ノ王勅第四條
 ニハ成規ニ違ヒ始審ニ於テ既ニ權限抵觸訴訟ヲ起シタル時ト雖モ尙
 ホ控訴ニ於テ更ニ之ヲ起スヲ許シ唯確定裁判ノ後之ヲ起ス可カラス
 トスルノ一約款ヲ置キタリ此確定裁判トハ宜ク訴訟ノ本案ニ關スル
 確定裁判ト義解ス可シ

十日	モカケ	一件	同年	六月	二十九日	テフ	ルニ	エ	一件	千八百四十七年
二月	二十七日	ト	ラ	一月	十八日	ラ	テ	ロ	一件	千八百四十七年
千八百五十年	五月	十五	抑	裁判所	ノ權限	ニ關シ	兩造	ニ對スル	裁判ハ	以テ之ニ關係ナキ行政官ニ對シ故障ヲ述フルノ證據トス可カラス蓋シ

該裁判ハ決シテ爲メニ訴訟ノ本案ヲ消滅スル者ニ非ス是故ニ某ノ控
 訴院ニ於テ兩造ノ一方ヨリ申告シタル裁判所權限外訴訟ヲ拒否シテ
 某ノ始審裁判所ニ訴件ヲ廻致シタル所ノ判決ハ以テ權限抵觸訴訟ヲ
 起スノ障礙ヲ爲スナシ千八百六十三年四月六日カアン府件判決然ラハ則チ凡ソ裁判ス可
 キノ訴件アリテ未ダ之ヲ裁判セサル間ハ行政官ヨリシテ常ニ其裁判
 權ヲ要ムルノ訴ヲ起スヲ得ルト謂フテ可ナルヘシ

裁判所ノ權限ニ關スル始審裁判ニシテ既ニ控訴ス可カラサル力ヲ有
 シタル者ト雖モ州長ヨリ裁判轉移ノ訴ヲ起シテ之ヲ故障スルカ爲メ
 ニ間接ニ廢棄セラル、ノコアル可シ而シテ此ノ如キノ場合ニ於テ裁
 判所ハ此裁判轉移ノ訴アルニ因リ先キニ裁判スルノ權アリトシタル
 者ヲ更ニ自カラ其權ナシト宣告スレハ隨テ同一ノ權限論同一ノ訴件
 ニ關シ前後相反對スル兩箇ノ裁判ヲ見ルニ至ル可シ此兩箇ノ裁判ニ

就キ何レヲ是トシテ採ル可キヤトナレハ宜ク第二回ノ裁判ヲ採ル可
 キコ固ヨリ論ヲ俟タス若シ或ハ然ラヌシテ反テ第一回ノ裁判ヲ採ル
 トスレハ假令權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得ルト許認スルモ全ク無益ニ屬
 ス可シ此レ我邦法律ニ於テ控訴ス可カラサル力ヲ有スル裁判ノ廢棄
 ヲ許シタル場合ノ特異ノ例ナリ

千八百二十八年ノ王勅第四條ニ於テ終審裁判若クハ確定裁判ノ後ニ
 權限抵觸訴訟ヲ起スヲ禁シタリト雖モ行政官ニ權限抵觸訴訟ヲ起ス
 コトヲ許シタル期限中ニ裁判所ニ於テ終審若クハ確定裁判ヲ爲シタル
 場合ハ之ヲ其例外ニ置キタルハ頗ル理アリト謂フ可シ若シ之ヲ例外
 ニ置カサレハ裁判所ハ敢テ罰セラル、コトナクシテ其權限ヲ踰越スル
 ヲ得テ遂ニ行政官ニ許與シタル裁判要求ノ權ヲシテ其實チキ者ニ屬
 セシムルニ至ル可シ

千八百二十八年六月一日ノ王勅ハ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得サル場合
ヲ説明シタル後ニ行政官ニ許與シタル裁判權要求訴訟ノ程式手續ヲ
示シタリ

該王勅第五條ニ於テ右ノ程式手續ノ裁制力トス可キ主義ヲ定メテ曰
ク爾後權限抵觸訴訟ハ次ノ數條ニ定メタル程式及ヒ方法ニ從フニ非
サレハ之ヲ起スヲ得可カラズ是ニ由テ之ヲ推セハ假令次ノ數條中
ニハ其無効ニ屬スルヲ明記セサレモ所定ノ程式及ヒ期限ヲ履踐セ
サルキハ權限抵觸訴訟ヲ以テ無効トス可キヲ固ヨリ論ナカル可シ蓋
シ裁判要求ノ權ハ王勅ニ定ムル約款ニ屬スル者ナルカ故ニ此約款ヲ
守ラサレハ遂ニ其訴訟權ヲ執行シ得サルニ至ル然レモ或ハ爲メニ誤
解スル所アル可カラス夫レ行政官ニシテ其命セラレタル約款ヲ守ラ
サレハ其訴訟權ヲ失フト雖モ亦司法官ニシテ其命セラレタル義務ヲ

行フヲ怠タリタルカ爲メニ行政官ニ其裁判要求ノ權ヲ失ハシムル
ヲ得ス故ニ司法官ノ錯誤ハ却テ行政官ノ損害トナル等ノ事アル可カ
ラス
千八百二十八年ノ王勅第六條ハ未タ權限抵觸訴訟ヲ起サ、ルニ及ヒ
行政官ニ裁判權ヲ與フル法律ノ條款ヲ擧ケタル覺書ヲ檢事ニ致ス可
キヲ州長ニ命シ以テ檢事ノ請牒ニ因リ裁判所ヲシテ自カラ其裁判權
ヲ辭シテ訴件ヲ行政官ニ廻致セシメタリ此法制ノ目的ハ官吏ヲシテ
互ニ相尊敬シテ親睦ヲ保チ且ツ裁判所ニ於テ自カラ裁判權ヲシト發言
スル時ハ敢テ權限抵觸訴訟ヲ起スノ煩勞ヲ省フクニ在リ而シテ檢事
ハ州長ノ覺書ヲ裁判所ニ遞致スルノ義務アリト雖モ若シ自カラ州長
ト其意見ヲ異ニスルトキハ必シモ之ヲ主張スルヲ要セス故ニ王勅
第六條中之ヲ明記シテ曰ク若シ檢事ニ於テ行政官ノ裁判權要求ヲ當

然トスルキハ之ニ訴件ヲ廻致スルヲ請求ス可シト

州長若シ裁判轉移ノ訴ヲ爲スニ豫メ要スル所ノ者ヲ踐守セスシテ直
チニ權限抵觸訴訟ヲ起スキハ參議院ニ於テ之ヲ廢棄ス可シ此レ千八百
二十八年ノ王勅第五條ノ主義ヨリ生シ來レルナリ加之ナラス其宜シ
ク此ノ如クス可シトスル諸理由ヲ考フレハ之ヲ必需緊要トナシ違ヘ
ハ則チ無効ニ屬ス可シト觀察セサル可カラズ 千八百三十一年三月九
日同州長件千八百三十九年一月十四日モリセ一判決等
某ノ訴件ヲ以テ裁判所權限外ノ者ニ屬スト宣告スト雖モ其訴訟入費
ヲ命スルノ權ハ裁判所ニ屬ス故ニ裁判所ニ於テ州長ヨリ申告スル裁
判轉移ヲ許認シタル時ニ當リ裁判權限ノ法ニ違ヒ裁判所ニ招喚セラ
レタル被告ニ對シテ該裁判所ヨリ其訴訟入費ヲ命シタルカ爲メニ州
長ヨリ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得ス 千八百六十一年四月十
八日クイルマン判決

第五百八十五

兩造ノ一方ヨリ申告スル所アルニ因リ裁判所權限外ノ裁判宣告ヲ爲
シタリト雖モ州長ハ爲メニ王勅第六條ヲ以テ之ニ命シタル覺書送致
ノ程式ヲ欠ク可カラズ其故如何トナレハ兩造中ノ申告ニ因テ其權限
ノ有無如何ヲ自カラ判定スル裁判所ハ州長ヨリ裁判轉移ヲ申告シタ
ル時ト稍、其情況ヲ異ニス第一ノ場合即チ兩造中ヨリ申告スル場合ニ
於テハ行政官ハ曾テ其訴事ニ關係セス又裁判所ハ其裁判宣告ニ由テ
行政官ニ對シテ爭訟ヲ生セシメサルナリ 千八百三十一年六月八日モ
千八百五十四年三月七日權限抵觸裁判所ノ判決同一年四月三日決
コレ一併同年十一月七日テウルト件千八百五十一年十一月二十二日
ローベル子一併千八百五十四年十二月七日チーセナ一併千八百五十
九年七月二日アル
行政官タラサル檢事自カラ其公務ヲ以テ裁判轉移ヲ申告シタルモ
亦前段ニ同シカル可シ蓋シ檢事ヨリ之ヲ申告シタルカ爲メニ權限抵

權限抵觸裁判所モ亦參議院ト同一ノ判決ヲ下シタリ千八百五十年六月十二日リカリジ
件同年十一月五日
アルルル件判決

前段ニ掲ケタル第一ノ効果ニ由テ生スルノ第二効果ハ左ノコトシ曰
州長ハ公領ノ名代人トシテ申告シタル裁判轉移ヲ拒否スル裁判宣
告ヲ承諾スルニ因リ又ハ此裁判宣告ノ控訴期限滿盡スルノ後ニ至リ
權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得サルトス可カラス千八百四十四年二月一日ゾーシユ件判決
裁判所ニ於テ其裁判スルノ權アルヤ否ヤヲ判定スルノ期限ヲ命セシ
トアラス蓋シ千八百二十八年ノ王勅編者ハ未タ曾テ訴訟手續ヲ短
縮セントスルノ志アラス其目的トスル所ハ專ラ行政官ノ施爲ヲ沮撓
スル勿ラシムルニ在リ故ニ裁判所ノ執行ス可キ裁判宣告ニ就キテハ
一ニ普通法ニ準依シ荷モ改ムル所アラス是ヲ以テ兩造或ハ司法上訴
訟手續ノ遲緩ナルニ苦ムアルモ決シテ其答ヲ行政官ニ歸ス可カラス

七十八百第

州長ヨリ裁判轉移ヲ申告セラレタル裁判所ハ其事實ヲ審明スル爲メ
ニ本案ニ關スル豫審裁判ヲ命スルヲ得就中土地臨檢ヲ命スルヲ得而
シテ此ノ如キ場合ニ於テ裁判所ハ其豫審裁判ノ理由書中ニ裁判權限
ノ件ヲ豫定スト雖モ其本文中ニ該件ヲ裁決スルコトナキモ州長ニ於
テ未タ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得ス千八百四十二年三月三十一日テプリイヌ件判決是レ裁判官
ハ其豫審裁判ニ因テ檢束セラレスト云ヘル大則ヨリ生スル所ノ効果
ナリ

兩造ハ州長ヨリ申告スル裁判轉移ニ關シ自カラ訴求スル所アラサル
可カラス其故ハ兩造ハ誰ニ因テ裁判ヲ受ク可キヤヲ知ルニ在ルヲ以テ
此裁判轉移訴訟ノ兩造ニ關係アル頗ル大ナレハナリトロレ一著書第八卷第二千八百八
條十九
裁判所ニ於テ裁判轉移ノ件ヲ判決スルノ後檢事ハ之ヨリ五日內ニ其

八十八百第

請牒及ヒ該判決書ノ副本ヲ州長ニ廻送セサル可カラズ但シ之ヲ廻送シタル日子ハ爲メニ設ケタル簿冊ニ登記ス一千八百二十八年六月

檢事ノ所藏スル右ノ簿冊ニ登記スル所ハ確的ニシテ易ク可カラズ故ニ此簿冊ニ掲クル所ト州長ニ廻送シタル副本ニ載スル所トノ間ニ差異アルキハ宜ク簿冊ニ掲クル者ヲ以テ確實トス可シ千八百五十年四月ニ係ル權限抵觸 此見解ハ頗ル正ヲ得タリ若シ或ハ然ラスシテ州長及ヒ檢事等後ニ發スル意味反對ノ書ヲ以テ先キニ廻送シタル書ニ代フル極メテ容易ナルカ爲メニ遂ニ檢事局所藏ノ簿冊ニ登記スル所ニ由テ得タル保障ヲ兩造ニ奪フニ至ル可シ此ノ如クナルヲ以テ檢事ヨリ副本ヲ州長ニ廻送シタル日ヲ以テ州長ヨリ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得ル期限ノ始メトス

右ノ副本廻送ノ日ハ起訴期限ヲ定ムル爲メニ算計セス千八百四十一年七月二十三日

日ドレール件千八百四十六年九月三日 森林局件千八百五十七年一月二日 ミッシー運河會社件及ヒ千八百五十八年三月十日 レクレル件判決

檢事若シ五日內ニ裁判宣告書ヲ州長ニ廻送スルコトヲ怠タルモ上ノ第百八十三項ニ述ヘタル理由ニ循ヒ行政官ノ起訴權ヲ傷害スルヲ得ス故ニ行政官ノ起訴權ハ州長ニ裁判宣告書ヲ廻送シタル日ヨリ始マル可シ千八百三十七年十一月十九日ルバソール件千八百四十四年十二月七日レシエ件判決千八百五十年七月三日ペール件ニ係ル權限抵觸裁若シ裁判宣告書ノミヲ廻送シテ檢事ノ請牒ヲ遺却シタル等判所判決 不充分ナル廻送ヲ爲シタル時ハ當日ヨリ行政官ノ起訴期限ヲ算計ス可カラズ 卷第五百五十一項ヲ看ヨ 裁判所ニ於テ裁判轉移ノ申告ヲ拒否シタル時州長ハ其裁判宣告書廻送ノ日ヨリ十五日內ニ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得 但シ此十五日ノ期限ハ州廳ニ書類到着ノ日ヨリ數ヘスシテ檢事ノ之ヲ廻送シタル

日ヨリ計算ス故ニ云ク廻送ノ日ヨリ十五日内云々ト又州長ハ州廳ニ
書類到着ノ日子ヲ記認スルヲ要セズ
王勅ニハ裁判所設置ノ地ト州廳所在ノ地トノ距離ニ準シ起訴期限ヲ
舒長スルノ制ヲ定メサルヲ以テ本件ニ關係ナキ訴訟法第千三十三條
ヲ據トシ此缺所ヲ補フヲ得ス

裁判所ニ於テ唯無効ニ屬スル件ノミヲ判決シ未タ權限ニ關スル件ニ
就キ裁判宣告ヲナサ、レハ權限抵觸訴訟ヲ起ス可カラズ
八年十二月
八日エスバ
一ケニ件判決

裁判轉移ヲ申告シタル後裁判所ニ於テ其事實ヲ審明スル爲メニ特ニ
鑑定ヲ命ジテ未タ本案ノ裁判ヲ宣告セサル時モ亦前段ノ場合ニ同シ
千八百六十年一月五日
エキスベルチス
日アバーレーニ件判決
裁判所ニ於テ裁判轉移ノ件ヲ判決スルナク其既ニ遲延シタルカ故ニ

九十八百第

受理ス可カラストスルモ州長直チニ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得可シ
百五十年四月三日
日マレーニ件判決
州長ノ申告セル裁判轉移ノ件ヲ判決スル裁判所ハ假令之ヲ拒否シタ
ル時ト雖モ州長ニ對シ其訴訟入費辨償ヲ命ス可カラズ何トナレハ此
時州長ハ兩造ノ一方トシテ從事セズ其行政官タルノ分限ニ據リ行政
權ヲ執行シ以テ社會ノ公益ノ爲メニ裁判權ヲ維持セントシタレハナ
リ千八百三十五年八月
リ千八百三十五年八月
始審ニ於ル權限抵觸訴訟ハ本案訴訟ヲ受理シタル裁判所々在地ヲ管

十九百第

轄スル州長ニ非サル外之ヲ起スヲ得ス此レ王勅第八條ニ本州ノ州
長ト云ヘル語アルニ據ル千八百三十九年四月十四日シユル州長件千八百
四十年八月十七日テアフルニエニ件判決
前段ノ如クナレモ州長ニ於テ裁判轉移ヲ申告シテ之ヲ受理セラレタ
ルモ本州外ノ控訴院ニ控訴ニ於ル權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得スト推

定ス可カラス故ニ王勅第八條中更ニ一節ヲ増加シテ云ク裁判轉移ヲ受理セラレタル時州長ハ控訴狀送達ノ後十五日内ニ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得可シト此州長ト云ヘル語ハ前段ニ述ヘタル州長即チ始審ノ時ニ裁判轉移ヲ申告シタル州長ニ係レリ人或ハ言ハン本件ハ裁判管轄權ノ訴訟ニ屬ス故ニ州長ニ於テ其管轄州外ノ控訴院ニ對シ之ヲ行フヲ得スト余ハ當ニ之ニ答フルニ本件ハ裁判權ヲ要ムル訴訟ヲ行フノ事ニ係ル故ニ之ヲ始メタル者ヲシテ之ヲ繼ガシムルヲ當然トスルノ數語ヲ以テス可シ蓋シ本件ノ始末ニ通熟スル者ハ州長ナリ控訴狀ノ送達ヲ得タル者モ亦同一州長ナリ千八百四十年八月二十日シヨブ是故ニ控訴院所在地ノ州長ニシテ訴件ノ始審裁判ヲ宣告シタル裁判所々在ノ地ヲ管轄セサル者ハ裁判轉移ヲ申告シ及ヒ控訴ニ於ル權限抵觸訴訟ヲ起スノ權ナシ千八百四十八年五月二十七日テサンガル邑件判決此判決ハ始審ノ時

其裁判所々在地ノ州長ヨリ裁判轉移ヲ申告セシコナキ場合ナルヲ以テ余ノ意見ニ因レハ頗ル此見解ニ疑ヒナキ能ハス然レモ當時ルヘルシナン氏ノ報告ニ依リ控訴院所在地ノ州長ハ裁判轉移ヲ申告シ及ヒ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得スト判決シタリ該件ニ關シトローレ氏ノ駁說氏著書第五卷第百八十項トダローズ氏ノ區別論トハ互ニ當然ノ理アルニ似タリ蓋シダローズ氏ノ說ノ所ニ從ヘハ凡ソ州長ニ於テ始審ノ時裁判轉移ヲ申告シタルキハ控訴ノ時權限抵觸訴訟ヲ起スノ權アル者モ亦同一州長ナル可シ若シ又始審ノ時行政官ニ於テ一モ起議スル所ナク控訴ノ時ニ至リ始メテ言フ所アレハ裁判轉移ヲ申告スルモ權限抵觸訴訟ヲ起スモ共ニ控訴院所在地ノ州長ナル可キナリ參議院ハ上段ノ區別ヲ立ルヲ許サスシテ縱令始審裁判所々在地ノ州長ニ於テ該裁判所ニ裁判轉移ヲ訴ヘサル時ト雖モ控訴院所在地ノ

州長ニ此訴ヲ起スノ權ヲ拒ミタリ千八百五十八年五月十五日東部鐵道會社判決五竊ニ案スルニ上段ノ區別ハ未タ曾テ參議院ニ起議セシ者アラサルヲ以テ本院モ亦之ニ注意セサルナル可シ夫ノ千八百二十八年ノ王勅第八條ハ獨リ始審ノ時ニ於テ州長ヨリ裁判轉移ヲ訴フル場合ヲ豫定セシノミ某ノ法院ニ於テ始審裁判ヲ控訴スル者アルニ當リ始メニ訴ヲ起シタル州ノ外ニ在ル裁判所ニ其兩造ヲ送遣シ之ヲ裁判セシメタル時始メニ始審裁判ヲ宣告シタル裁判所々在地ノ州長ハ更ニ兩造ヲ送遣スル地ノ裁判所ニ對シ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得ス千八百五十四年八月十日クモ千八百五十八年五月十五日シュモン判決但シ千八百六十一年五月十三日サン、シュルマン、ナンレー府件ニ就テハ却テ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得ルト判決シタリ

右ニ註記スル如ク參議院ノ判決中前段ノ場合ニ於テ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得ルトスル見解アルヲ見レハ以テ本件ニ關シ參議院ニ定説ヲ

キノ一證トス可シ余案スルニ眞ノ主義ハ州長ヨリ裁判轉移ヲ訴ヘタル場合及ヒ之ヲ訴ヘサル場合ニ就キ前段ニ區別シタル所ニ在ル可シ即チ此第一ノ場合ニ於テハ裁判所々在地ノ州長ヲ以テ出訴スルノ權アル者トナシ第二ノ場合ニ於テハ却テ其權ヲ失シ之ヲ控訴院所在地ノ州長ニ屬ス要スルニ所謂權限抵觸訴訟ナル者ハ泛稱ノ行政官ニ屬スル所ノ訴訟權ナリ故ニ凡ソ他ノ州長ニ損害スル所ナケレハ最モ行フニ便適ナル地ニ在ル州長ニ之ヲ執行スルノ權ヲ屬ス可シ千八百二十八年ノ王勅ニ定メタル出訴期限ノ極メテ短キヲ以テ之ヲ推セハ此ノ如ク論決セサラント欲スルモ得ス若シ或ハ之ニ反スルノ説ヲ立ルキハ遂ニ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得サルニ至ル可シ故ニ主義ニ據テ之ヲ論スルモ實際ニ就テ之ヲ考フルモ必ス此點ニ歸着センノミ

州長ニ與ヘタル出訴期限ヲ以テ僅ニ十五日トスルハ甚タ短カシ其故

何ソヤ曰ク甚タ裁判手續ヲ淹滞シテ兩造ノ利益ヲ害セシコトヲ恐レテ
ナリ是ニ由リ右ノ期限ヲ過レハ出訴權遂ニ無効ニ屬シ凡ソ十五日後
ニ起シタル權限抵觸訴訟ハ皆廢棄セラレ可シ更ニ千八百二十八年ノ
王勅第八條ノ期限中^下云ヘル語ヲ援キ以上ノ見解ノ據トナスヲ得可

シ千八百三十八年六月五日ロクレイマ案件千八百四十四年十二月三十日アルノ一件判決等

一十九百第

裁判所ニ於テ州長ノ訴ヘタル裁判轉移ヲ許認シテ自カラ裁判ヲ行フノ
權ナシト宣告シタルキハ復タ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ要セスト雖モ若
シ兩造ノ一方ニ於テ之ヲ控訴スルニ及ンテハ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ
必需スルヲ得テ其權乃チ行政官ニ在リ故ニ王勅第四第八ノ兩條ニ依
リ明白ニ該權ヲ認定セリ唯一ノ疑難ハ權限抵觸訴訟ヲ起スカ爲メニ
州長ニ與ヘタル期限ノ第一日ヲ定ムルト始審裁判官ニ訴ヘタル裁判
轉移ヲ更ニ控訴ノ時ニ至リ復タ起ス可キヤヲ知ルトニ在ルノミ該件

ニ關シ王勅第八條ニ言フ所如何ヲ左ニ見ル可シ曰ク州長ハ始メニ其
訴ヘタル裁判轉移ヲ許認セラレタル時ト雖モ兩造ノ一方之ヲ控訴ス
ルアレハ該控訴狀送達ヲ得ルノ後十五日^内ニ權限抵觸訴訟ヲ起ス
ヲ得可シト

右ノ成文ノミニ就テ決了スレハ州長ハ控訴院ニ對シ再ヒ裁判轉移ヲ
訴フヲ要セサルコト明白ナルカ如シ何トナレハ控訴狀送達後僅ニ十五
日ノ期限ハ以テ裁判轉移ヲ訴ヘテ之ヲ裁判セシメテ其宣告書ヲ州長
ニ送り而シテ後州長自カラ權限抵觸訴訟ヲ起スノ手續ヲ行フニ不充
分ナレハナリ蓋シ王勅ノ編者ハ既ニ始審ニ於テ訴ヘタル裁判轉移
ヲ復タ控訴ノ時ニ及ンテ行フヲ以テ無用ト思考シタルナル可ケレモ
參議院ハ千八百四十年ニ至ルマテ常ニ之ニ反對スル判決ヲ行ヒ控訴
ノ時ニ當リ州長ヨリ再ヒ裁判轉移ヲ訴ヘシムルニハ重緊ノ理由アリ

ト量定セリ其理由トハ何ソ曰ク始審裁判所ノ上ニ位スル裁判官ニ對シ行政官ハ固ク前説ヲ執テ動かサルヲ示スナリ曰ク該裁判官ヲシテ自カラ裁判スルノ權ナシト宣告セシメ之ト權限抵觸訴訟ヲ起スルヲ避クルヲ圖ル是ナリ

千八百三十五年一月二十日ド、モンコムリ一件同州長件千八百三十七年五月二十六日ビルマン件千八百四十年四月二十三日テプロス件判決

此ヨリ以降參議院ハ千八百四十年五月二十二日ド、ボーセー一件ニ係ル判決ヲ以テ舊來ノ判決ヲ修正シテ區別ヲ立ルヲ左ノ如シ曰ク始審裁判官ニ於テ州長ノ訴ヘタル裁判轉移ヲ許認スルノ後兩造ノ一方ヨリ之ヲ控訴シタル時ハ州長ヨリ更ニ裁判轉移ヲ訴フルヲナク千八百二十八

十八年六月十八日ノ王勅第八條ノ本文ニ依準シ控訴狀送達ヲ得ルノ後十五日内ニ直チニ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得ルト

千八百四十四年十二月三十一日マンセス件千八百四十七年八月三十日カールガノ會社件ノ判決モ亦同シ

夫レ兩造ノ一方ヨリ控訴シタル

ト同時ニ權限抵觸訴訟ヲ起サシメタルハ畢竟控訴院ヲシテ其控訴件ヲ調査セサラシメタル者ナリト判斷スレハ固ヨリ州長ニ第二回ノ裁判轉移ヲ訴フ可シト命ス可キノ理由ナシ此場合ニ關シテハ王勅第八條ノ明文アルヲ以テ又論辯スルヲ要セサルニ似タリ而シテ王勅ニ此特例ヲ設ケタル所以ハ控訴手續ヲ停止シテ同一事件ノ爲メニ再ヒ控訴院ヲ煩ハスヲ勿ラシメンカ爲メナリ千八百四十八年十二月三十日ノ政府ノ布令第八條第二節ニ説明スル所正ニ此ノ如シ

始審ノ時州長ヨリ裁判轉移ヲ訴ヘス或ハ之ヲ訴フト雖モ裁判所ニ於テ拒否セラレ

千八百五十三年六月二十三日カテアク邑件判決

或ハ其拒否セラレテ書類遞送ヲ得ルノ後十五日内ニ權限抵觸訴訟ヲ起サス

千八百四十六年三月六日カンカル件判決

或ハ治安裁判官若クハ商務裁判所ノ管轄ニ屬スル訴件ナルカ故ニ始審ニ於テ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得サル等ノ故アリテ控訴院ニ於テ其控

第二百九十二

訴ヲ受理シタル場合ニ當リテハ州長タル者更ニ裁判轉移ヲ訴ヘタル後ニ至ラサレハ控訴ニ於テ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得サル可シ州長ハ裁判轉移ヲ許認シタル始審裁判ノ控訴狀送達ヲ得ルノ後十五日内ニ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得必シモ再ヒ裁判轉移ヲ訴フヲ要セストスル參議院ノ新判決ヲ是認スル時ハ州長ニ於テ此十五日内ニ權限抵觸訴訟ヲ起スノ義務アルヤ將タ此期限後ニ至リテモ尙ホ之ヲ行フヲ得ルヤ凡ソ始審裁判所ニ對シ本案訴訟ヲ爲ス間ハ州長ニ於テ常ニ裁判轉移ヲ訴フヲ得爲メニ其期限ヲ定ムルヲナシ故ニ始審裁判宣告ナレハ何時ニテモ州長ヨリ裁判轉移ヲ訴フヲ得ヘシ但シ其權限抵觸訴訟ヲ起ス期限ヲ十五日内ニ畫ルハ裁判轉移ノ裁判宣告ノ後ニ在ルナリ千八百二十八年ノ王勅第六第七條ヲ看ヨ控訴中ニ權限抵觸訴訟權ヲ執行スルノ點ニ於テハ亦疑ヲ生スルヲナシ夫ノ王勅第八條ハ獨リ州長ニ於テ始審中

ニ○裁判轉移ヲ訴可キニ裁判所之ヲ許認セシニ因リ兩造ノ一方ヨリ之ヲ控訴シタル場合ヲ定メタルノミ此場合ニ於テ州長ハ權限抵觸訴訟ヲ起スノ權ヲ控訴狀送達後十五日内ニ限ラレタル者ノ如シ蓋シ州長ハ此期限内ニ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得ルノミナラス必ス之ヲ期限内ニ行ハサル可カラス之ヲ經過スレハ遂ニ其權ヲ失フ可シ此レ正サニ王勅第七第八條ノ明文アルニ由テ起レル所ニシテ其理由ハ極メテ明白ナリトス何ソヤ曰ク州長ハ先キニ裁判轉移ヲ訴ヘテ始審中既ニ一タヒ裁判手續ヲ沮止シタリ而シテ兩造ヨリ此裁判轉移ヲ許認シタル裁判宣告ヲ控訴スルニ及ンテヤ行政官ノ關係復タ發シ爲メニ其權限抵觸訴訟ヲ起スノ權更ニ生ス是ニ於テ其出訴期限ヲ控訴狀送達ノ後十五日内ト定メテ速カニ其滿盡セシヲ期シ以テ兩造ヲシテ常ニ現出セントスル權限抵觸訴訟ノ爲メニ數無用ノ訴訟手續ヲ行フノ煩難

ニ遇ハサラシム故ニ州長ハ十五日ノ期限後ニ至リ權限抵觸訴訟ヲ起
 ステ得可カラス
 トロレー氏ハ以上論述スル所ト反對ノ說ヲ唱ヘテ曰ク州長若シ控訴
 狀送達ヲ得ルノ後十五日ノ期限ヲ經過セシメテ權限抵觸訴訟ヲ起ス
 一ナキ時ハ遂ニ此起訴權ヲ失フタルヤ否ヤ然ラス此場合ニ於テ州長
 ハ王勅第八條ニ依リ之ニ與ヘタル權ヲ失フト雖モ猶ホ其第四條ニ依
 リテ有スル所ノ權アリト氏著書第五卷第二千二百〇六條ヲ看ヨ余ハ氏ノ說ヲ是認セス
 何トナレハ王勅第八條ハ始審中ニ裁判轉移ヲ訴ヘテ之ヲ許認セラレ
 タルキニ當リテヤ控訴中ト雖モ權限抵觸訴訟ヲ起スノ權ヲ十五日内
 ニ限リタリ又王勅第十一條ニ據レハ同一期限即チ十五日内ニ州長ノ
 訴狀ヲ裁判所書記局ニ出ス可キナリ此第八第十一ノ兩條ニ依リ州長
 ニ與ヘタル權限抵觸訴訟ヲ起シ及ヒ其訴狀ヲ出ス可シトスル十五日

ノ期限ヲ空ク經過セシメタルキハ裁判轉移ヲ拒否シタル控訴裁判ヲ
 以テ行政官ニ對シ控訴ス可カラサル裁判タルノ力アリトセサルヲ得
 ス故ニ曰ク此時行政官ノ起訴權ハ廢滅ニ屬シ再ヒ恢復ス可カラス
 州長若シ現ニ出訴スル者アルヲ知ラス或ハ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得
 サル商務裁判所若クハ治安裁判所ニ對シ出訴スル者アルノ故ヲ以テ
 始審中ニ裁判轉移ヲ訴ヘサル時ハ其始メヨリ本訴ニ關與セサルニ由
 リ未ダ曾テ裁判手續ヲ阻止セシマラサルナリ是ヨリ後兩造ノ一方
 ニ於テ商務裁判所若クハ治安裁判所ノ裁判ニ不服ナルヲ以テ之ヲ控
 訴スルトセヨ是ニ於テ州長ヲ以テ始メテ本訴ノ存在スルヲ知得シ
 タル者ト見做シ控訴中何時ニテモ其自カラ訴ヲ起スヲ須ク自由ナル
 可シ何トナレハ此時ニ至ルマテ何レノ書ヲモ未ダ曾テ州長ニ送リテ
 起訴ヲ促カセシマラス且始審ヲ爲シタル裁判所商務裁判所若クハ治安裁判所ヲ謂フ

ニ對シテハ其未タ曾テ本訴ニ就キ關係セシヲアテサレハナリ抑屢次
 發現ス可キ右ノ場合ニ於ル權限抵觸訴訟執行ノ方法及ヒ期限ハ王勅
 中之ヲ規定スルノ條アラズ唯第四條第二節ニ依リ此種ノ權限抵觸訴
 訟ヲ起スヲ得ルヲ見ルノミ故ニ爲メニ守ル可キノ規則ヲ定メント欲
 スレハ宜ク理ヲ推シテ之ヲ斷ス可キナリ理ヲ推シテ之ヲ斷スレハ則
 チ始審裁判所ニ對スル權限抵觸訴訟ニ係ル王勅第六七八ノ三條ニ定
 メタル程式ヲ履マサル可カラス現ニ此時ニ至ルマテ行政官ハ其主張
 セントスル所ヲ未タ曾テ司法官ニ知ラシメタルヲナキカ故ニ州長ハ
 直接ニ訴ヲ起スヨリモ寧ロ間接ニ裁判轉移ヲ要ムル覺書ヲ上等裁判
 所附屬檢事長ニ呈シ以テ尊敬ノ意ヲ司法官ニ致スヲ要ス而シテ該裁
 判所ハ裁判權限ニ係ル判決書ヲ州長ニ送致シ州長ハ此送致ヲ得ルノ
 日ヨリ十五日内ニ權限抵觸訴訟ヲ起ス可シ

第三百九十九

破毀裁判ノ後覆審ヲ命セラレタル控訴院ニ於テ州長ヨリ訴ヘタル裁
 判轉移ヲ拒否シテ本案裁判ヲ或ル始審裁判所ニ任シタル時ハ州長ニ
 於テ該控訴院判決書送達ノ後十五日内ニ權限抵觸訴訟ヲ起サ、ルモ
 其權ヲ失ハス故ニ該始審裁判所ニ於テ本案ノ確定裁判ヲ行ハサル間
 ハ何時ニテモ州長ヨリ該裁判所ニ對シ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得但シ
 更ニ裁判轉移ヲ該裁判所ニ訴フルハ此限ニアラス
千八百五十三年
 十二月十五日

子ロ
件判決

千八百二十八年ノ王勅第八條中[○]控訴狀送達ノ後十五日内[○]ト云ヘル句
 ノ意義ハ何如シ宜ク解シテ控訴者ヨリ始審裁判ノ勝訟者ニ送達スル
 トス可キヤ將テ州長ニ送達スルト爲ス可キヤ余ハ必ス州長ニ送達ス
 ルノ義ニ解ス可シト考察ス若シ夫レ然ラサレハ州長ハ曾テ自カラ關
 係知了セサル控訴狀ニ因リ裁判轉移ヲ申告セスシテ直チニ權限抵觸

訴訟ヲ起スノ權ヲ行フヲ促カサル、ハ甚ダ理ナシト謂フ可シ夫レ
 控訴者ヨリ州長ニ控訴狀ノ送達ヲ爲スハ最モ當然ノ事トス何トナレ
 ハ控訴者ノ意ヲ控訴スルニ決スルヤ必ス先ツ裁判轉移ヲ訴ヘテ其許
 認ヲ得タル州長ノ覺書ヲ讀知スレハナリ是故ニ王勅第八條ニ依リ州
 長ニ與ヘタル權限抵觸起訴ノ權執行ヲ促カサンカ爲メニハ必ス州長
 ニ控訴狀ヲ送達スルヲ要ス千八百四十七年八月三十日
 カートルカノ一會社件判決
 權限抵觸訴訟ハ王勅第八條ニ定メタル期限中ナレハ此期限滿盡前ニ
 裁判所ニ於テ本案裁判ヲ宣告シタリト雖モ之ヲ起スヲ得王勅第八條
 第二節州
 長ヨリ裁判轉移ヲ訴フニ拘ハラズ裁判所ニ於テ同一ノ裁判宣告書ヲ
 以テ權限ニ係ル豫審件本案ト併セ判決シタル時モ亦同シ其理由ハ
 行政官ノ始メニ訴ヘタル裁判轉移ノ主意ヲ貫ヌカントスルヲ抑フル
 ノ權ヲ以テ司法官ニ屬ス可カラサルニ在ルナリ千八百三十六年八月
 十七日テート一事件判

四十九百第

決

裁判所自カラ裁判スルノ權ナシト認メタル裁判宣告ヲ控訴スル者ア
 ルニ因テ權限抵觸訴訟ノ起リタルニ當リ控訴者該控訴ヲ取消サント
 セシニ其相手方ニ於テ之ヲ承諾シタル時ハ此權限抵觸訴訟ヲ起スヲ
 須ヒス隨テ亦該訴訟ヲ判決スルヲ要セサル可シ

五十九百第

權限抵觸訴訟書ノ程式ハ王勅第九條ニ定ム該書ニハ先ツ裁判轉移ノ
 訴ニ係ル裁判宣告書及ヒ其控訴書ヲ引キ次ニ本案裁判ノ權ヲ行政官
 ニ任スル法律上ノ條規ヲ成分ノ儘ニ掲録セサル可カラス此王勅第二
 第六第九ノ三條ニ用シスボシシテラテ非タル法律上ノ條規ト云ヘル語ハ如何ナル意味
 ニ解ス可キヤ抑、司法行政官ノ權限ヲ分畫スルハ立法權ノ職ニ屬シ苟
 モ王勅若クハ詔書ヲ以テ或ハ之ヲ侵佔スルヲ得サルハ宜ク明言スヘ
 キ所ナレ由テ以テ岡士政第一帝政千八百四十八年ノ假政府及ヒ千

八百五十一年十二月二日ヨリ千八百五十二年三月二十九日ニ至ルマ
 テノ共和政大統領ノ命令等ノ如キ法律ノ力ヲ有スル政府ノ布令ニ依
 リ行政官ニ與ヘタル職權執行ヲ要メンカ爲メニ權限抵觸訴訟ヲ起ス
 ナ許スヲ得スト論辯ス可カラス
 右ニ記列シタル政府ノ布令ハ皆法律全書ニ登錄シ法律ト同一ノ力ヲ
 占得セリ故ニ之ヲ以テ權限抵觸訴訟書ノ根據トスルヲ得ル所ノ法律
 上ノ條規ト同一視セサル可カラス千八百二十八年ノ王勅ノ條款中ニ
 「法律」ト直書セスシテ「法律」上ノ條規即チ法律ノ力ヲ有スル條規ト云ヘ
 ル語ヲ特用セリ元老院ニ於テ違國憲ト認メスシテ默許シタルニ因リ
 法律ノ力ヲ得タル帝政時ノ詔書條款モ亦其中ニ含蓄ス可シ
 王勅第九條ニ據レハ本案裁判ノ權ヲ行政官ニ任スル法律上ノ條規ハ
 成文ノ儘ニテ權限抵觸訴訟書中ニ掲録セサル可カラス此ノ如キ明確ナ

第六百九十九

ル語アルニ拘ハラズ參議院ハ該訴訟書ニ唯其起訴ノ根據トスル法律
 ナ引クノミニテ必シモ其全文ヲ掲ケサルモ王勅ノ命スル所ニ背クコ
 ナシト判決ヲ下シタリ 千八百三十五年二月三日シアント件千八百三十
 七日シウア
 ン件判決等
 凡ソ州長權限抵觸訴訟ヲ起セハ其訴狀ト訴狀ニ引キタル書憑ヲ裁判
 所ノ書記局ニ致ス可シ王勅第十條 若シ十五日内ニ此訴狀ヲ書記局ニ致サ
 ヲレハ現ニ本案訴訟ヲ受理シタル裁判所ニ對シ權限抵觸訴訟ヲ起ス
 ナ得可カラス 王勅第十條
 是故ニ十五日内ニ訴狀ヲ書記局ニ呈スル式ヲ行ハサルキハ權限抵觸
 訴訟ヲシテ無効ニ屬セシム可シ 千八百四十七年十二月七日ブリバ
 レ一件判決千八百五十年三月七日ブー一件千八百四十八年一月二十八日ナク
 リエ一件ニ係ル權限抵觸裁判所判決 之ヲ以テ權限抵觸裁判ニ於テ
 スル第一回ノ判決トス 千八百六十三年五月十六日
 ホルカルキエー邑件判決

千八百二十八年六月一日ノ王勅第十一條ハ特ニ權限抵觸訴狀ニ就キ
嚴ニ期限ヲ定ム故ニ訴狀中ニ引キタル書憑ハ縱令期限後ニ至ルモ權
限抵觸ノ裁判ヲ宣告スルマテ常ニ之ヲ致スヲ得千八百四十三年八月
七日スクウエナール

訴狀ヲ致ス可キ所ハ裁判轉移ヲ判決シタル控訴院ノ書記局トス該控
訴院ニ於テ始メ此裁判轉移ノ訴ヲ拒否シテ本案訴訟ヲ始審裁判所ニ

廻致シタル時ト雖モ亦同シ此場合ニ於テ該始審裁判所ニ對スル權限

抵觸訴訟ハ廢棄セラル可シ千八百五十八年四月二
十五日アイマル件判決

州長ヨリ權限抵觸訴訟書ヲ裁判所ノ書記局ニ致ス可キ十五日ノ期限

ハ權限抵觸訴訟ヲ起スカ爲メニ王勅第八條ニ依リ與ヘタル期限ト全

ク相同キナリ而シテ此期限ハ裁判轉移ニ係ル裁判宣告書ヲ州長ニ送

達シタル日ヨリ起算シ權限抵觸訴訟書ヲ作り之ヲ書記局ニ致スハ此

日ヨリ十五日内ニ於テス可キナリ是故ニ王勅第八條第二節ハ單ニ此

十五日ノ期限内ニ限リ裁判所ニ於テ本案裁判ヲ行フヲ禁ス千八百四十
一年七月二
十三日デレル件判決千八百五十年七月三日アマール件ニ係ル權限抵
觸裁判所判決千八百五十二年十一月十五日ベルタン件千八百五十三
年十二月一日ランボン件千八百六十年八月二日アイソン件千八百六
十一年十一月二十一日バンサン件千八百六十二年十二月二十六日マ
ルチニ

控訴院ニ對シテ權限抵觸訴訟ヲ起スルハ其訴狀ヲ本院ノ書記局ニ致
ス可キヲ固ヨリ論ヲ俟タス何トナレハ此場合ニ於テ本案訴訟裁判ヲ

延期ス可キ者ハ本院ナリ隨テ訴訟ヲ書記局ニ送達スルニ由テ本案訴

訟ノ裁判權ヲ要求セラレタル者モ亦本院ナレハナリ凡テ本案訴訟ノ

裁判權ヲ要求スルハ獨リ本案訴訟ヲ受理シタル司法官ニ對シテ爲

スヲ得ルノミ千八百四十二年四月二十二日メ子ストレル件
千八百四十四年十二月三十一日アルヌウ件判決

控訴院ノ書記局ニ訴狀ヲ致スハ亦裁判轉移ノ訴ヲ拒否シタル判決書

ナ州長ニ送達セシ日ヨリ十五日内ニ於テス可シ
千八百五十二年八月六日ブルータ件判決
 王勅第十一條ニ定メタル十五日ノ期限ハ全周ノ者ニアラス
判決書ノ送達ヲ得
 五タル日ト更ニ起訴スル日トノ外ニ其中間ノ滿十故ニ之ヲ送リタル日
 ナ數ヘスシテ之ヲ受取タル日ナ數フ是ニ由リ前年ノ十二月十六日ニ
 於テ判決書ナ州長ニ送達シタルキハ翌年一月一日ニ書記局ニ致セル
 權限抵觸訴訟ヲ以テ廢棄ニ屬セシム可シ
千八百五十八年三月十日レ
 クレルク件千八百六十年二
 月十六日タリ但シ判決書送達ノ日ヨリ第十五日ハ會祭日ナルモ亦同
エー件判決
 シキナリ
千八百五十七年一月二十一日カナル、ジメー會社
 件千八百五十八年三月十日レクレンク件判決
 裁判轉移ノ訴ヲ裁判シタル控訴院ニ於テ訴訟ノ本案ヲ受理セスシテ
 單ニ權限ニ係ル件ノミヲ判決ス可キ時若クハ判決シタル時ト雖モ權
 限抵觸訴訟書ハ該控訴院ノ書記局ニ致シ之ヲ本院ヨリ訴訟ノ本案ヲ
 廻送シタル裁判所書記局ニ致ス可カラス
千八百五十八年五月十
 五日シロンド州件判決

第七百九十七

權限抵觸訴訟書ノ數ハ裁判權恢復ヲ要ムルノ數ニ同シカラシムルヲ
 以テ成規ニ合ストスト雖モ若シ同一ノ裁判所ニ對シ二件ヲ並ヘ訴ヘ
 テ同一ノ法律ヲ根據トシテ同一ノ問題ヲ起シタル時ハ二件ニ就キ一
 箇ノ權限抵觸訴訟書ヲ出セルヲ以テ不法トシテ廢棄ス可カラス
千八百五十八年一月三日北
 部鐵道會社件判決
 裁判所ノ書記ハ本局ニ致セル權限抵觸訴訟書ヲ即時ニ檢事ニ遞致セ
 サル可カラス檢事ハ内會議ヲ開キタル裁判所ニ之ヲ通知シ共和曆第三
 年某月二十一日ノ法律ニ依準シテ凡テノ訴訟手續ヲ延期スルヲ求
 ムルヲ要ス
王勅第十二條但シ權限抵觸訴訟書ヲ十五日内ニ書記局ニ致サス
 シテ直チニ同期限内ニ之ヲ檢事ニ致シ其日子ヲ檢事局ヨリ交付スル
 收票若クハ本局ニ備フル簿冊ニ因テ據憑スレハ王勅第十二條ノ命ス
 ル所ニ背クナキナリ
千八百三十八年八月二日ガエタン、ト、ラ、ロ、シエフ、
 コール件千八百四十三年八月七日シユボン件判決

権限抵觸訴訟書ヲ十五日内ニ書記局若クハ檢事局ニ致サ、ルキハ其訴訟權ヲシテ廢棄ニ屬セシム可シ何トナレハ行政官ハ其裁判權ヲ要求スルカ爲メニ充タズ可キノ約款ヲ履マサレハナリ第三百八條且ツ王勅第十一條ニ権限抵觸訴訟ハ復タ本案訴訟ヲ受理シタル裁判所ニ對シテ起スヲ得ス下アルヲ見テ知ル可シ故ニ第一ノ権限抵觸訴訟書ハ無効ニ屬スル者ト觀察ス可キヲ論テ俟タズ千八百三十三年十二月十三日ビエンヌ州長件千八百四十五年十一月二十五日ユスカン件千八百四十六年九月五日ドビリエー件判決期限内ニ権限抵觸訴訟書ヲ致シタレハ書記之ヲ檢事ニ廻送スルヲ怠タリ或ハ檢事之ヲ裁判所ニ通照スルヲ遺却シタル時ハ此怠慢此遺却ノ爲メニ行政官ノ権限抵觸訴訟ノ裁判ヲ求ムル權及ヒ権限抵觸訴訟書アルヲ知ラスシテ裁判所ニ於テ行フタル宣告書ヲ取消サシムルノ權ヲ損害スルヲ得ス千八百三十五年八月二十六日ルブルトン件千八百四十二年十二月十日メチコトレル件千八百

百四十二年四月二十九日ブラン件千八百四十五年八月二十一日テーシ件千八百四十七年一月二十一日ゾーマ件判決 蓋シ司法官ハ其附屬官吏ノ錯誤ノ爲メニ行政官ノ正當權利ヲ侵奪スルヲ能ハス故ニ其義務トスル程式ヲ欠キタル者ヲ以テ権限抵觸訴訟ノ廢棄ヲ生ス可シト觀察スルヲ得ス第三百八項裁判所ハ現ニ裁判轉移ノ訴アルヲ知了スルニ拘ハラス苟モ本案訴訟ヲ直チニ判決シ恰モ該裁判轉移ノ訴アルヲ知ラサルカ如クニ處分セシ場合ニ於テ州長ハ該裁判轉移ノ訴ヲ拒否セラレタルト見做シ直チニ権限抵觸訴訟ヲ起スヲ得ヘシ千八百五十年四月三日テーリイホ同年六月三日又裁判所ニ於テ裁判轉移ノ訴ヲ判決セシテ其既ニ遅延スルカ故ニ受理ス可カラストシテ之ヲ拒否シタル場合ニ於テ亦州長ハ権限抵觸訴訟ヲ起スヲ得千八百五十年四月三日マレール権限抵觸訴訟ヲ起ス目的ヲ以テ州長ヨリ裁判轉移ヲ訴ヘ出テタル時

八十九百第

ニ當リ裁判所ハ該裁判轉移ノ訴ヲ拒否シタル裁判宣告書ヲ以テ並セテ本案訴訟ヲ判決スルトモ弄權ノ罪アリトス可カラス但シ其後ニ起シタル權限抵觸訴訟ヲ不當トセラレタル時ハ右ノ裁判宣告書ハ無効トナラサル可シ千八百五十九年六月二十一日破毀法院裁判千八百五十七年十二月十四日モセルマン件判決ノ論據

州長豫メ裁判轉移ノ訴ヲ爲サス若クハ期限後ニ權限抵觸訴訟書ヲ作リ若クハ期限後ニ之ヲ書記局ニ致シタルノ故ヲ以テ該訴訟書ヲ規則ニ違フ者トスル時ニ當リ裁判所ニ本案訴訟ノ裁判延期ヲ爲スノ義務アリヤ將タ然ラスシテ直チニ其裁判宣告書ヲ爲スヲ得ルヤ

右ノ問題ニ就キ裁判所ハ此ノ如キ規則ニ違ヘル權限抵觸訴訟書ヲ無効ニ屬スル者ト觀察シ得ルト主張スル論者ハ千八百二十八年六月一日ノ王勅ノ精神ト成文トヲ引キ以テ之ヲ證セリ曰ク該王勅ノ目的ハ權限抵觸訴訟ヲ起ス可キ期限ノ定メナキ時ニ當リ裁判ノ手續ヲ障礙

スルノ憂ヲ絶ツニ在リ然ルニ若シ期限ニ後レ若クハ制規ニ違フテ權限抵觸訴訟ヲ起スニ際シ裁判所ヲシテ本案訴訟ノ裁判延期ヲ爲スノ義務ヲ負ハシムルキハ遂ニ此目的ヲ達セサル可シ且ヤ王勅ノ成文ニ鑑ミテ宜ク此ノ如キノ説明ヲ下スヘキヲ知ル故ニ其第一條ニ云ク權限抵觸訴訟ハ決シテ重罪ニ於テ起スヘカラスト第二條ニ云ク權限抵觸訴訟ハ兩箇ノ場合ニ係ル外輕罪ニ於テ起スヲ得スト第五條ニ云ク權限抵觸訴訟ハ次ノ數條ニ定メタル程式及ヒ方法ニ於テスルノ外之ヲ起スヲ得スト又第十二條ニ云ク權限抵觸訴訟書ヲ必要トスル期限内ニ致スアレハ書記直チニ之ヲ檢事ニ遞送ス可シト此等ノ條款ヲ踐守セサル權限抵觸訴訟書ハ不法ノ訴書ナリ故ニ裁判所ハ之ヲ拒否スルヲ得夫レ宰相ニシテ立法權ノ三枝即チ國長及ヒ上下兩院ノ許認セサル文書ヲ法律ナリトシテ公布スルキハ裁判所ニ於テ決シテ之ヲ適

施ス可カラス違國憲ノ王勅ノ如キモ亦當ニ之ト同シカルヘキナリト
千八百二十八年六月一日ノ王勅ニ關スルシユベレルツエー氏論說フーカ
 ル氏著書第四版第三卷第千九百十九項ヲヘリエール氏著書第五版第
 二卷第五百七十八
 葉等ヲ看ヨ
 右ニ掲クル所ノ理由アルニ拘バラス余輩ハ却テ之ニ反對ノ論說ヲ以
 テ我邦法律ノ本義ニ合スト思量ス請フ先ツ兩權區別ノ大則ニ就テ之
 ナ論セン共和曆第三年菓月十六日ノ法律ニ云ク凡ソ裁判所ハ何レノ
 種類ニ論ナク行政官ノ所爲ヲ裁判スルヲ禁スト同年同月二十一日ノ
 法律ニ於テ更ニ之ニ附加シテ云ク司法行政兩官ノ權限抵觸訴訟ノ場
 合ニ於テハ行政理事官ノ認可シタル宰相ノ決定アルマテ本案訴訟ノ
 裁判ヲ延期ス可シ但シ行政理事官ハ更ニ之ヲ下議院ニ申告スルコト
 ル可シト此等ノ條款ニ據テ觀察スルキハ凡ソ權限抵觸訴訟ノ起ルマ
 直チニ本案訴訟ノ裁判延期ノ効果ヲ生シ該訴訟書ノ依法ト否サルト

ヲ調査スルヲ司法官ニ許ルスナキコト明白ナリ若シ或ハ然ラサレバ
 司法官ハ行政官ノ所爲ノ裁判人トナリ其司法官ノ裁判權ヲ奪テ行政
 官自カラ之ヲ有センコト目的トスル所爲ニ至ルマテ猶ホ且ツ司法官
 ノ調査ヲ受クルニ至ラン豈ニ其レ理ナランヤ抑行政官ノ所爲ニ干渉
 スルコトヲ裁判所ニ嚴禁ス可キ場合アリトセハ必ス當ニ行政官ヨリ司
 法官ニ對シ裁判權ヲ要ムル場合ナルヘキコト明々タリ然ラハ則チ之ニ
 反對スル論ヲ許スハ是レ自然ノ通理ヲ顛覆スルナリ
 千八百二十八年六月一日ノ王勅公布ノ前ハ人々以上ノ論理ヲ認メタ
 レ此王勅出テ、ヨリ遂ニ其主意ヲ顛倒セリト言フ者アリ然レモ微
 々タル王勅ヲ以テ如何ンソ堂々タル法律ノ明文ヲ摩消ス可ケンヤ且
 ツ千八百二十八年ノ王勅ハ會テ反對論者ノ述フル如キノ主意ナクシ
 テ却テ其本案訴訟ノ裁判延期ノ義務ヲ確認スルヲ見ン故ニ其第十二

條ニ云ク檢事ハ共和曆第三年葉月二十一日ノ法律第二十七條ニ準シ凡テノ訴訟手續ヲ延期ス可シト現ニ本條三權限抵觸訴訟書ヲ必要トスル期限内ニ致スアレハ書記直チニ之ヲ檢事ニ遞送ス可シト云ヘル句ヲ以テ始マルコトハ實ニ反對論者ノ言フ所ノ如シ蓋シ檢事ハ權限抵觸訴訟書ヲ書記局ニ致セル後ニ非サレハ書記ヨリ之ヲ領受シ得ス又之ヲ領受シタルノ後ニ非サレハ自カラ請牒ヲ作り得サルコトハ勿論ナレ由テ以テ權限抵觸訴訟書ノ程式ニ違ヒ若シハ之ヲ致スコト法ニ定ムル期限ニ後レタレハ共和曆第三年ノ法律ヲ以テ廢止ニ屬シ隨テ裁判所ニ行政官ノ所爲ヲ裁判スルノ權アリト臆斷スルヲ得ス

千八百四十八年十二月三十日ノ政府ノ布令第十二條ハ權限抵觸訴訟書ヲ書記局ニ致セシ後書記ハ之ヲ檢事ニ遞送ス可シ云々ト記シテ千八百二十八年ノ王勅ニ權限抵觸訴訟書ヲ必要トスル期限内ニ致シタ

ルハ書記云々トアルヲ改メタルヲ以テ反對論者ハ復タ舊王勅ノ此句ヲ引キテ其論據トスルヲ得ス抑此ノ如キ文字ノ修正アルヤ以テ王勅ノ文字ヨリ生ス可キ疑ヒヲ豫メ解釋セントスルノ主意タルコトヲ證ス可シ故ニ該件ニ關シ問題ヲ起スアラハ新布令ノ條款ヲ引證シテ以テ之ヲ開疏ス可シ

王勅第五條ヲ引援據證セル反對論ハ全ク取ルニ足ラス夫レ第五條ノ明文アルヲ以テ成規ノ程式及ヒ期限ヲ守ラサル權限抵觸訴訟書ハ宜ク廢棄ス可シト論斷スルヲ得レ由隨テ裁判所ニ其廢棄ヲ宣告スルノ權アリト臆定スルヲ得ス蓋シ問題ノ要ハ特ニ此一點ニ歸シ必スシモ權限抵觸訴訟書ノ制規ニ違フヤ否ヤニ非スシテ誰レカ其制規ニ違フヲ裁決スルノ權ヲ有スルヲ知ルニ在リ姑ク權限抵觸訴訟書ハ行政官ノ裁判權ヲ定ムル法律ノ成文ヲ全録セスシテ唯該法律ヲ引例トスル

ニ止マルト假想セヨ此時ニ當リ裁判所ハ該訴訟書ヲ以テ王勅第九條ニ違フトシテ權限抵觸訴訟ヲ廢棄シテ直チニ本案訴訟ノ裁判ニ着手スルヲ得ヘキヤ蓋シ權限抵觸訴訟ノ制規ニ合フト否ヤトニ係リ此ノ如キ無數ノ問題ヲ發シ裁判所ニ之ヲ判決スルノ權アルヤ否ヤヲ各自カラ講究スルヲ得ヘシ敢テ之ヲ判決スルノ權裁判所ニ在リト謂フ者アラシ歟是レ裁判所ヲ以テ權限抵觸訴訟ノ裁判人トナスナリ實ニ不當ノ說ト謂ハサル可カラス

三枝ノ立法權ノ議決セサル文書ト違國憲ノ王勅トハ裁判所ニ於テ之ヲ遵守スルノ義務ナシトスル論據モ亦力ナシト謂フ可シ夫レ立法官吏ノ議決セサル法律ハ實ハ法律ニ非ス然レモ州長ノ作リタル權限抵觸訴訟書ハ常ニ權限抵觸訴訟タルノ性格ヲ失ハス裁判所ニ於テ得テ裁判ス可カラサル行政文書ナリ抑裁判所ハ違國憲ノ王勅ヲ無効ト裁

判宣告スルノ任アルニ非ス唯、之ヲ執行セシメサルノミナレモ州長ヨリ出シタル權限抵觸訴訟書ノ如キ行政文書ニ至テハ裁判所ニ於テ敢テ之ヲ廢棄スルヲ得ス若シ敢テスレハ遂ニ司法行政兩官ノ間ニ爭鬪ヲ起スニ至ル可シ人或ハ言ハソ果シテ此說ノ如クスルモハ王勅ノ以テ消滅セント欲シタル弊害ヲシテ止ム勿ラシメン即チ裁判手續ヲ中斷スルノ不便ヲシテ絶ヘサラシメントスト亦愚論ト謂ハサルヲ得ス夫レ王勅第四第八ノ兩條ヲ并セ考フレハ凡ソ裁判所ハ裁判轉移ニ係ル裁判宣告書ヲ州長ニ送達スルノ後十五日ヲ經過スレハ亦權限抵觸訴訟書ノ出ルヲ待タス故ニ期限滿盡スレモ猶ホ權限抵觸訴訟書ヲ領受セサレハ裁判所ハ直チニ本案訴訟ノ裁判ヲ宣告スルヲ得其後ニ出ル所ノ權限抵觸訴訟書ハ復タ該裁判ヲ妨沮スルヲ能ハス然レモ裁判所若シ本案訴訟裁判宣告ノ前ニ權限抵觸訴訟書ヲ領受スルモハ參議

合ニ於テモ亦控訴ニ係リ同一ノ問題ヲ現出スルヲアル可シ
 裁判所ハ權限抵觸訴訟ノ起リタル後自カラ裁判スルノ權ナシト宣告
 シ得ルノ論ヲ主張セントスル者ノ言ニ曰ク州長其裁判權ヲ要ムルノ
 目的ハ司法官ノ行政官權限内ニ侵入セントスルヲ防クニ在リ夫レ裁
 判所自カラ裁判スルノ權ナシト宣告スレハ敢テ自カラ裁判ヲ行ハス
 シテ行政官ノ裁判權ヲ許認シ行政官ノ裁判權ヲ要ムル訴訟權ヲ承諾
 スルナリ而シテ權限抵觸訴訟ノ未タ起ラサル時既ニ自カラ裁判スル
 ノ權ナシトスル宣告ヲ爲セハ由テ以テ權限抵觸訴訟ノ起ルヲ防止ス
 可キヲ固ヨリ論ヲ俟タス然ラハ該訴訟ノ起リタル後ト雖モ亦當ニ右
 ノ宣告ヲ爲スヲ得ヘシト然レモ余ハ却テ權限抵觸訴訟ノ既ニ起リ
 タルノ後ハ復タ裁判所ニ於テ自カラ裁判スルノ權ナシト宣告シ得ル
 ナ信セス若シ敢テ之ヲ宣告シ得ルトスルキハ是レ共和曆第三年菓月

二十一日ノ法律第二十七條ニ依準シテ凡テノ裁判手續ヲ延期ス可シ
 ト命スル千八百二十八年ノ王勅第十二條ニ違フナリ且ツ裁判所ハ豫
 定ス可キ所ノ問題ニ關シ一方ニ向ツテハ自カラ裁判スルノ權アリト
 シ他ノ一方ニ向ツテハ却テ裁判スルノ權ナシト宣告スルヲ得ルヤ決
 シテ此ノ如キ不當ノ事ナカル可キナリ又反對論者ハ權限抵觸訴訟ノ
 起リタル後ニ自カラ裁判スルノ權ナシト宣告スルハ是レ裁判所ハ行
 政官ノ裁判權ヲ要メタルヲ承諾スルナリト主張スレモ實ハ不當ノ論
 ナリ何トナレハ夫ノ行政司法兩官ノ權限ヲ定ムルヲ公ケノ秩序ニ
 關スル大事ニ屬シ決シテ之ヲ和解スルヲ得ス凡ソ一タヒ兩官ノ間ニ
 爭論ヲ生スレハ參議院ヲ除クノ外之ヲ斷決スルヲ得ス然ルヲ若シ權
 限抵觸訴訟ノ起リタル後ニ於テ自カラ裁判スルノ權ナシト宣告スル
 ヲ裁判所ニ許スハ是レ間接ニ之ヲ權限抵觸訴訟ヲ判決スルヲ許

スナリ故ニ曰ク不當ノ論ナリト

右ト同一ノ主義ヲ推セハ州長ハ其既ニ書記局ニ致シタル權限抵觸訴訟書ヲ收復スルヲ得サル可シ是レ州長ハ其出セル文書ヲ收復スルヲ得ルトスル恒例ノ外ナリ蓋シ此場合ニ於テ州長ハ自カラ權限抵觸ノ爭ヲ判決スルヲ得ス且ツ之ヲ判決スルニ任スル官衙參議院ノ權ヲ苟モ損害スルヲ得サルナリ故ニ州長ニシテ公ケノ秩序ニ係ル訴訟ヲ起シタレハ縦マヽニ之ヲ取消シ若クハ一タヒ要求シタル權ヲ拋棄スルヲ能ハス千八百二十四年四月七日ルロソ一案件判決

兩造自カラ訴訟ノ本案ニ就キ和解ヲ爲シ或ハ之ヲ取消シ或ハ一方ノ者之ヲ承諾シタル時ハ既ニ起リタル權限抵觸訴訟ヲ如何ニス可キヤ蓋シ此場合ニ於テハ復タ訴訟ナキナリ之ヲ細説スレハ裁判ス可キ事件ナキヲ以テ裁判權ヲ要ム可キ者ナシ隨テ亦司法官ニ於テ行政官ノ

百二第

權ヲ侵估スルヲナシ故ニ權限抵觸訴訟ヲ繼續ス可キノ理ナシ千八百一

年二月二十七日バリニ一案件及ヒ同年十一月八日シボスト一案件ニ係ル

權限抵觸裁判所判決千八百五十四年七月二十日ランブール案件判決

權限抵觸訴訟既ニ起レハ則チ踐守ス可キノ手續ヲ制爲シ以テ之カ局ヲ結フヲ考ヘサル可カラス此手續ハ參議院ニ關スル法律執行ヲ命シタル千八百四十九年十月二十六日ノ規則ニ依リ之ヲ定ム但シ該法律ノ條款ハ舊來ノ諸法律ニ參互準用スルヲ要ス又該規則ハ千八百五十二年一月二十五日ノ詔書ヲ公布セシカ爲メニ廢止ニ屬シタルヲナキナリ詔書第七條ヲ看ヨ

千八百二十八年ノ王勅第十三條ニ云ク凡ソ權限抵觸訴訟書及ヒ引用書憑ハ更ニ書記局ニ還付シ十五日間本局ニ留メ置ク可シ檢事ハ其由ヲ兩造若クハ其代書師ニ通知ス可シ該兩造若クハ代書師ハ之ヲ通閱シテ同上ノ期限内ニ裁判權限論ニ關スル注意書ヲ檢事局ニ出スヲナ

得ヘシト又千八百二十一年十二月十二日ノ王勅第二條ニ云ク檢事ハ代書師若クハ兩造住地ノ邑長ノ領票ニ據リ通知書ヲ交付シタルヲテ證セシム可シト

右ノ第十三條ニ掲クル十五日ノ期限ハ何レノ日ヨリ起算ス可キヤ王勅中之ヲ明記スルナシ參議院ノ判決ニ據レハ檢事ヨリ兩造若クハ其代書師ニ書憑還付ヲ通知シタル日ヨリ之ヲ算計ス可キナリ千八百四十七年十月十七日

二月七日シアトリアン邑件判決千八百二十一年十二月十二日王勅第二條末節ノ論據ヲ看ヨ
王勅第十三條ニ掲クル十五日ノ期限ヲ伸縮スルトモ權限抵觸訴訟ノ上ニ影響ヲ及ホシ之ヲシテ或ハ不法ノ者ヲラシムルヲナカル可シ何トナレハ固ト之ヲ伸縮スルハ答司法官ノ怠慢ニ在レハナリ是故ニ此期限ハ王勅中ニ直接ノ裁制力ナキ輕易ノ命令タルニ過キス第百八十三項ヲ看ヨ十五日内ニ注意書ヲ檢事局ニ呈出スルカ爲メニ兩造ニ與ヘタル權モ

亦前文ノ場合ニ同シ故ニ兩造ハ此期限内ニ之ヲ行ハサルモ其呈出ノ權ヲ失ナハス尙ホ權限抵觸訴訟ノ確定裁判宣告ノ日マテハ兩造若クハ參議院附屬代言人ノ署名セル覺書ヲ直ニ參議院ニ呈スルヲ得且ツ公行訟廷ニ於テ其口頭辯論ヲ爲スモ可ナリ
注意書ハ訴者若クハ參議院附屬代言人ノ署名セル簡易ノ覺書ヲ以テ之ニ充ツ可シ但シ其訴者ノミ署名セル者ハ其住地ノ邑長ヲシテ其署名ヲ法ニ適スル者ト認メシム可シ千八百二十一年十二月十二日王勅第五條宜ク千八百四十九年十月二十六日ノ行政定規第四條ヲ參看スヘシ本條ニ云ク參議院及ヒ破毀法院附屬代言人ハ權限抵觸裁判所ヘ覺書及ヒ注意書ヲ呈スルヲ兩造ヨリ任セラルハ得ト其任セラルハ得ルトアルヲ以テ之ヲ推セハ正權限抵觸訴訟ニ於テ參議院附屬代言人ノ助功ヲ求ムルト求メサルトハ兩造ノ便宜ニ任シ之ヲ必要缺ク可カラサル者トセ

第一百二第

サルヲ知ル可シ是レ權限抵觸訴訟ト行政訴訟トノ差異ノ一ナリ
 十五日ノ期限満盡ニ及ヒ檢事ハ權限抵觸訴訟書及ヒ引用書憑ヲ其注
 意書及ヒ兩造ノ注意書ニ并セテ司法宰相ニ呈送ス此呈送ノ日子ハ爲
 メニ設ケタル簿冊ニ登記ス一千八百二十八年六月十四條但シ右ノ程
 式ヲ守ラサルモ權限抵觸訴訟ヲシテ無効ニ屬セシムルコトナカル可シ
 千八百四十二年七月七日レ
 二月七日レ
 七月七日レ
 權限抵觸訴訟ニ關スル報告書ヲ參議院ニ致シ得ルカ爲メニ必要ナル
 書類ハ招喚狀一ナリ兩造ノ請求書二ナリ州長ヨリ出シタル裁判轉移
 訴狀三ナリ權限抵觸訴訟書四ナリ司法宰相ハ此等書類ヲ領収セシヨ
 リ二十四時内ニ呈送書類ヲ明記シタル領票ヲ檢事ニ與フ可シ該領票
 ハ裁判所ノ書記局ニ藏ム而シテ司法宰相ハ右ノ書類ヲ即時ニ參議院
 ノ書記局ニ遞送ス可シ千八百三十一年三月
 十二日ノ王勅第六條

參議院訴訟部ハ書憑上ノ豫審ヲ指揮シ凡テノ行政訴訟及ヒ行政司法
 兩官ノ間ニ生スル權限抵觸訴訟ノ報告書編作ニ任ス千八百五十二年
 勅書第
 十七條

權限抵觸訴訟書及ヒ附屬書憑ハ其到着ノ日ヨリ五日内ニ權限抵觸訴
 訟擔任ノ宰相ニ照示ス照示ノ日子ハ爲メニ設ケタル簿冊ニ登記ス之
 ヲリ後十五日内ニ該宰相ハ權限論ニ關シ至當ト思量スル注意書及ヒ
 案據書ヲ具ス可シ何レノ場合ヲ論セス該書憑ハ前ニ援キタル期限内
 ニ參議院ノ書記局ニ還付ス可シ千八百四十九年十月二十六日兩造ノ
 代官人ハ書記局ニ於テ該書憑ヲ通閱スルヲ得レト之ヲ局外ニ持テ出
 スヲ許サス同上第三條又權限抵觸訴訟ノ報告者ハ參議院書記局ニ於テ書
 憑登簿ノ後即時ニ聽訟部長之ヲ指定ス同上第六條千八百五十二年
 但シ報告書ハ公行訟廷ニ於テ展讀ス展讀ノ後兩造ノ代官人ハ直チニ口

二百二第

頭ノ注意ヲ爲スヲ得次テ政府ノ目代ハ其求ムル所ヲ演述ス千八百四
 月二十六日ノ規則第八條千八百五十二年一
 訴訟ニ關係ナキ外人ハ參議院ニ出テ、權限抵觸訴訟ヲ法ニ適スル者
 ト辯言シテ自カラ干涉スルノ權ヲ有スルヤ之レヲ有セリト主張セン
 カ爲メニハ千八百六年七月二十二日ノ詔書第二十一條ニ依リ許シタ
 ル干涉ニ係ル規則ヲ引證スルヲ得ヘシ該規則ニ準スレハ凡ソ參議院
 ニ於テ着手スル行政訴訟ニ干涉ス可キ事由アレハ則チ之ニ干涉スル
 ヲ得ルナリ夫レ外人ハ現ニ權限抵觸訴訟ヲ生セシ訴件ニ就キ其裁判
 權ヲ司法省ニ付セスシテ行政官ニ與フ可シト判決セシムルニ於テ大
 ニ己レノ利益ニ關係スル場合アル可シ然レモ此ノ如キ論說アルニ拘
 ハラス外人ノ干涉ハ之ヲ許サス何トナレハ權限抵觸訴訟ニ係ル手續
 ハ該訴訟ノ性質混合スルノ故ヲ以テ其一種特別ノ者タルノミナラス

三百二第

千八百二十一年十二月二十二日ノ王勅第四條ニ依リ兩造ノ外權限抵
 觸訴訟ニ關シ注意書ヲ呈出スルヲ許サ、レハナリ千八百四十七年四月二十七日ドレノ
 判決フリス此見解ヲ支柱センカ爲メニ更ニ關係アル兩造ト記載スル千八百
 四十九年十月二十六日ノ規則第四條ヲ引證スルヲ得蓋シ兩造ト云ヘ
 ル語ハ外人ト云ヘル語ヲ含蓄セサルヲ通例トス故ニ此兩語ハ相反對
 スルノ意味ヲ示セリ千八百六十一年十二月十三日サ
 故障申述及ヒ千八百六年七月二十二日ノ規則ニ依リ創立シタル其他
 ノ訴訟手續ハ權限抵觸訴訟判決ノ詔書ニ就キ行フヲ得ルヤ蓋シ千八
 百三十一年ノ訟廷公行ノ制未ダ立タサル時及ヒ千八百四十五年七月
 十九日ノ法律及ヒ千八百五十二年一月二十五日ノ詔書ニ依リ參議院
 ノ構成改正前ハ之ヲ行フヲ得サルヲ固ヨリ論チ竣タス千八百二十一
 年十二月十二日ノ王勅第六條ニ凡ソ兩造ヨリ定期限内ニ其注意書及

ヒ憑證書類ヲ出サ、ルキハ直チニ權限抵觸訴訟ノ裁判ニ從事ス可シ
 但シ其王勅ニ關シ故障申述若クハ再調査ヲ爲ス可カラスト掲ケタル
 ハ則チ權限抵觸訴訟判決書ニ對シ故障申述等ヲ許サ、ルナリ千八百
 二十八年六月一日ノ王勅第十三條モ亦同上ノ精神ニ於テ認記セリ
 千八百三十二年十月十八日レクレンク件及モールド件千八百三
 十二年十二月十四日サンテチエンメ鐵道會社件判決ヲ看ヨ
 訟廷公行ノ規則ヲ守ラサレハ再調査ノ訴若クハ敬慎ノ訴ヲ起スヲ得
 ルノ制ヲ定メタル以後ト雖モ前段ト同一ノ觀察ヲ下ス可キヤ千八百
 九年九月十八日ノ王勅第三十四條千八百四十五年七月十九日ノ法
 律第二十五條千八百五十二年一月三十日ノ詔書第二十條ヲ看ヨ茲ニ
 第一ニ檢事タル者千八百二十八年六月一日ノ王勅第十三條ニ依リ違
 踐ス可キ制規ニ違ヒ兩造若クハ其代理タル代書師ニ州長ヨリ權限抵
 觸訴訟書ヲ書記局ニ出シタルヲ通知セサルニ由リ兩造ハ其注意書
 若クハ答辯書ヲ呈セサルト假想セヨ第二ニ報告公行若クハ口頭辯論

ニ關シ定メタル程式ヲ踐履セサルト假想セヨ此第一ノ場合ニ於テハ
 普通ノ故障申述若クハ外人ヨリスル故障申述ヲ爲ス可キヤ又第二ノ
 場合ニ於テハ敬慎ノ訴ヲ起ス可キヤ

既ニ引證シタル明文即チ此等ノ例規ヲ踐履セサル場合ニ於テハ判決
 詔書ニ對シ千八百六年七月二十二日ノ規則第三十三條ノ程式ニ屬ス
 ル再調査ノ訴ヲ起スヲ得可シト云ヘル條款アルニ因リ前段ノ場合
 ニ際シ假令他ノ訴訟手續ハ或ハ行フヲ得サルモ獨リ再調査ヲ要ムル
 ノ一事ハ行ヒ得ルニ似タリ

此ノ如キ論說アルニ拘ハラス余ハ上ニ擧ル故障申述再調査及ヒ敬慎
 ノ訴等ノ諸手續ヲ以テ都テ行フヲ許ス可カラスト信スルナリ蓋シ彼
 ノ普通故障申述ナル者ハ法ニ依リ喚招セラレタレモ法廷ニ出席セサ
 ル者ノ爲メニ許シタル手續ナリ然ルニ權限抵觸訴訟ノ場合ニ於テ兩

造ハ始メヨリ法廷ニ喚招セラレタルヲナク且ツ其代言師ヲ置カサルヲ以テ決シテ「欠席裁判ヲ受ケタルカ故ニ故障申述ヲ行フナリ」ト明言スルヲ得サルナリ是ニ由テ推論スレハ兩造ニ故障申述ノ權ナキヲ明白ナリト謂フ可シ又外人ヨリスル故障申述ナル者ハ獨リ原裁判ヲ宣告シタル裁判所ニ喚招セラル可キ者ノ爲メニ設ケタル手續ナリ然ラハ則チ權限抵觸訴訟ニ關シ此種ノ故障申述ヲ要セサルヲ論テ俟タス

千八百四十九年十月二十六日ノ規則第一章總則即チ正反權限抵觸訴訟ニ通用ス可キ例則第十條ニ依リ前段ノ問題ヲ斷定セリ本條ニ云ク凡ソ權限抵觸訴訟裁判所ノ判決ニ對シテ故障申述ヲ爲スヲ得スト權限抵觸訴訟ヲ裁判シ了ル可キ期限ハ至テ短シ此至短ナル期限ト敬慎ノ訴ト並ヒ行ハル、ヲ得ル者ナレハ余輩ハ自カラ好シテ敬慎ノ訴

ヲ起スヲ許ス可ケレト恐クハ之ヲ起スヲ得サラン其理由ハ權限抵觸訴訟ニ係ル判決ハ決シテ増加スルヲ得サル短期限内ニ宣告セサル可カラス若シ其期限ヲ増加シ得ルトスルキハ爲メニ久ク本案裁判執行ノ手續ヲ遅延シ頗ル弊害ヲ生ス可シ故ニ余輩ノ考案スル所ニ從ヘハ千八百二十一年十二月十二日ノ王勅第六條ヲ以テ常ニ存在スル者ト觀察セサル可カラス而シテ人若シ千八百四十五年七月十九日ノ法律第三十五條及ヒ千八百五十二年一月三十日ノ詔書第二十條ヲ援キテ論辯スルヲアラハ宜ク之ニ答ヘテ此等條款ハ眞ノ行政訴訟ニ限リ施行スルノミト謂フヘシ蓋シ權限抵觸訴訟ナル者ハ混合シタル性質ヲ有スルヲ以テ之ヲ眞ノ行政訴訟ノ部類ニ列置セス是故ニ上文ニ掲ケタル法律詔書ノ條款ニ依リ許シタル敬慎ノ訴ハ之ヲ權限抵觸訴訟ニ準用ス可カラス

此説ハ千八百四十九年十月二十六日ノ規則ニ依リ暗ニ之ヲ許認セリ
 該規則ハ權限抵觸裁判所ニ於テハ必要トセサレヒ參議院ニ於テ遵守
 ス可キ訴訟手續ノ程式ヲ掲ケタル千八百六年七月二十二日ノ詔書ヲ
 權限抵觸訴訟ニ準施セス故ニ權限抵觸裁判所ニ關スル者ノ爲メニハ
 千八百四十九年十月二十六日ノ規則ヲ施用スルヲ要ス而シテ該規則
 ナ通閱スルニ權限抵觸裁判所ノ判決ニ對シ敬慎ノ訴ヲ許スノ條ナシ
 是ニ由テ之ヲ觀レハ權限抵觸訴訟ノ如キ一種特異ノ訴件ニ關シテハ
 類ニ因テ論ヲ立テ他ノ裁判所ノ爲メニ定メタル起訴手續ヲ以テ之ニ
 擬定スルヲ得サルナリ
 權限抵觸裁判所ヲ廢止シタル後ト雖モ以上ノ余カ論説ハ猶ホ依然動
 カサルナリ何トナレハ千八百五十二年一月二十五日ノ詔書第二十七
 條アリト雖モ之ニ抵觸セサル舊規則ハ常ニ存シテ廢セサレハナリ夫

第四百二第

レ余輩カ茲ニ論スル所ノ問題ニ關シ千八百四十九年十月ノ規則ノ條
 款ハ一モ千八百五十二年ノ詔書ニ抵觸スル者アラヌ故ニ千八百五十
 二年一月三十日ノ詔書第二十條ニ掲グル場合ト雖モ正權限抵觸訴訟
 ニ關シ再調査若シクハ敬慎ノ訴ヲ許ルニ可カラス
 權限抵觸訴訟ヲ判決スヘキ期限ハ司法宰相ニ於テ訴訟書類ヲ領受シ
 タル日ヨリ二ヶ月間トス千八百三十一年三月七條蓋シ本案訴訟裁判ノ障
 碍トナル所ノ者權限抵觸訴訟ハ最モ速カニ除去スルヲ以テ兩造ノ爲メ
 ニ必要トスルニ由ル
 權限抵觸訴訟ハ千八百三十一年三月十二日ノ王勅第七條及ヒ千八百
 四十八年十二月三十日ノ布令第十五條ニ依リ定メタル期限内ニ抵觸
 裁判所ニ於テ之ヲ判決ス千八百四十九年十一月二條之ヲ詳説スレハ司法
 宰相ニ於テ訴訟書類ヲ領受シタル日ヨリシテ佛國內地ナレハ二ヶ月

内、アルジュリ藩屬地ナレハ三月内ニ於テ之ヲ行フ但シ千八百四十八年十二月三十日ノ布令ハ千八百五十年ノ法律全書第二百十六項ニ掲録ス

千八百四十年六月十九日ノ王勅第三十五條及ヒ千八百四十九年十月二十六日ノ規則第十五條ニ因レハ九十兩月ノ間々即チ參議院ノ休暇時間ハ右ノ期限ヲ停止ス何トナレハ參議院ノ休暇ヲ定ムル爲メ毎歲發布スル詔書ニハ休暇間權限抵觸訴訟裁判停止ノ條款ヲ掲記スレハナリ千八百六十二年七月二十一日及ヒ千八百六十二年七月二十三日ノ詔書等是ナリ第一回ノ時ニ當リ檢事ヨリ司法宰相ニ送呈シタル訴訟書類ノ完備セスシテ同上ノ王勅第六條ニ依リ命シタル總書類ノ中チ缺クル者アルニ由リ報告書ヲ編製スルコトヲ得サルキハ二ヶ月ノ期限ヲ第二回ノ書類送呈ノ日ヨリ起算ス八百三十九年七月二十日是故ニ訴訟書類ノ不完備ナルカ爲メニ權限抵觸訴訟

訟ノ裁判ヲ沮止シタル時ハ州長ヨリ該訴訟ヲ起シタル日ヨリ幾多ノ時月ヲ經ルニ之ヲ無効トスル訴訟ヲ起スヲ得ス千八百四十年十二月十八日アルグエ邑件判決

第五百二第

千八百二十八年六月一日ノ王勅第十六條ニ因レハ權限抵觸訴訟ヲ裁判スルコトナクシテ前項ニ定メタル期限ヲ空過スルキハ該訴訟證書ヲ以テ無効ト看做ス可シ而シテ司法裁判所ハ本案訴訟ノ裁判ニ着手スルコトヲ得可キナリ又千八百三十一年三月十二日ノ王勅ハ二ヶ月ノ裁判期限ヲ定メタル後ニ於テ更ニ左ノ一段ヲ加ヘタリ云ク此期限滿盡ノ後一ヶ月ヲ經レハ猶ホ權限抵觸訴訟ノ判決ニ係ル王勅ノ送達ヲ得サル裁判所ハ本案訴訟ノ裁判ニ着手スルヲ得ヘシト此等ノ條款ヲ參互考察スルニ由リ種々ノ疑惑ヲ生シタリ第一ニ凡ソ司法宰相ニ於テ訴訟書類領受ノ日ヨリ二ヶ月ノ後ニ判決シタレハ第

三月ノ期限満盡前ニ裁判所ニ送達シタル王勅ハ成規ニ適合スル者トシ且ツ該王勅ヲ以テ權限抵觸訴訟ヲ至當ト判決シタルキハ裁判所ニ本案訴訟裁判ノ權ヲ收取ス可キヤ千八百三十七年七月三十一日ノ破毀法院裁決ハ之ヲ爲シ得ルトセリ蓋シ此裁決ハ千八百三十一年三月十二日ノ王勅第七條中ニハ千八百二十八年六月一日ノ王勅第十六條ニ掲ケタル失權ノヲ載セサルト此第十六條ハ權限抵觸訴訟書ノ失權ニ係リ該訴訟ヲ判決スル王勅ノ失權ニ關カルナキトヲ以テ其論據トセリ

第二ニ司法宰相ニ於テ書類領受ノ日ヨリ二ヶ月内ニ權限抵觸訴訟ヲ判決シタリト雖モ其判決書ヲ第三月後ニ裁判所ニ送達シタル時ハ之ヲ失權ト看做シ裁判所ハ直チニ本案訴訟ノ裁判ニ着手ス可キヤ破毀法院ハ千八百三十五年六月三十日ノ裁決書ニ依リ之ヲ爲シ得スト

セリ其故ハ千八百三十一年三月十二日ノ王勅第七條ハ千八百二十八年六月一日ノ王勅第十六條ヲ修正シタルナリ且ツ此第七條ニ掲ケタル裁制力即チ裁判所ハ權限抵觸訴訟ヲ判決スル王勅ノ送達ヲ得サル時ハ本案訴訟ノ裁判ニ着手スルヲ得ヘシト云ヘル裁制力ノ外權限抵觸訴訟ヲ判決スル爲メ及ヒ該判決書ヲ裁判所ニ送達スル爲メノ期限ヲ遵守セサルニ由テ受ク可キ所ノ裁制力ナシトスル主意ニ基ク

破毀法院ノ裁決書考索家ハ此等ノ裁決書ニ非難シテ彼此相撞着ストセリフーカル氏モ亦之ヲ論セリ氏著書第三卷第千九百二十二條然レモ余輩ハ却テ破毀法院ノ裁決ヲ以テ最モ適當ノ者ト判斷ス夫レ千八百二十八年六月一日ノ王勅ハ權限抵觸訴訟判決ノ期限ヲ置キテ之レヲ遵守セサル時ノ裁制力ヲ定メタルナリ千八百三十一年三月十二日ノ王勅ハ其期限ト其裁制力トヲ變更シタルナリ此ヨリシテ生スル所ノ自然ノ結果

ハ舊王勅ハ新王勅ニ因テ廢止ニ屬スル是ノミ而シテ千八百二十八年ノ王勅ニ依リ定メタル裁判力ハ權限抵觸訴訟ヲ定期内ニ判決セサルキハ該訴訟書ヲ無効ト看做シ裁判所ハ直チニ本案訴訟ノ裁判ニ着手スルヲ得ルトスルニ在レモ千八百三十一年ノ王勅ノ裁判力ハ唯裁判所ハ本案訴訟ノ裁判ニ着手スルヲ得ルトスルノミ而シテ裁判手續ハ權限抵觸訴訟ノ起ルカ爲メニ久ク停止スルヲ得ル者ニ非ス故ニ司法宰相ニ於テ訴訟書類領受ノ日ヨリ三ヶ月内ニ權限抵觸訴訟判決書ノ送達ヲ得サル裁判所ハ本案訴訟ヲ裁判スルヲ得縱令該判決書ヲ以テ權限抵觸訴訟ヲ至當ト認タル時ト雖モ裁判所ノ裁判宣告書ヲ以テ法ニ合ストス

千八百四十八年十二月三十日ノ布令第十六條ニ同一ノ裁判力即チ司法官ハ本案訴訟ノ裁判ニ着手スルヲ得ルト重不記シタルハ則チ余カ前文ノ説明ヲ確認シタルナリ但シ該布令ニハ唯「司法官ハ云々着手スルヲ得ルトアルノミニテ千八百二十八年ノ王勅第十六條權限抵觸訴訟書ハ無効ト看做ス」ト云ヘル句ニ關シテ復タ論スル所ナシ

第三ニハ司法宰相ニ於テ訴訟書類ヲ領受シテ二ヶ月ノ後ニ權限抵觸訴訟判決書ヲ作り第二月後ニ裁判所ニ送達シタル時ハ如何カ之ヲ決ス可キヤ先キニ破毀法院ニ於テ許認シタル主義ヲ推セハ隨テ未ダ本案訴訟ノ裁判ヲ宣告セサル裁判所ハ其裁判ニ着手ス可カラスト論斷スルニ至ル可シ蓋シ所謂本案訴訟ノ裁判ニ着手スル權ノ外ハ一モ他ノ裁判力ナキヲ以テ之ヲ見レハ凡ソ未ダ本案訴訟ノ裁判ヲ爲サル間ハ權限抵觸訴訟ヲ至當ト認メタル判決書ニシテ裁判所ニ送達セシ者ヲ以テ其効アリトセサル可カラス抑夫レ此ノ如クスルキハ兩造ヲシテ空ク訴訟入費ヲ失ハシムルノ弊害ナキ能ハスト雖モ若シ此弊

害ヲ避ケント欲シテ當該官廳ノ認定申告シタル弄權司法官ニ於テ謂フヲ捨テ問ハサレハ更ニ重大ナル弊害ヲ生ス可シ是ニ由テ之ヲ觀レハ千八百三十一年ノ王勅ニ依リ確定裁判ノ後ニ至ルモ猶ホ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ許シタルハ頗ル舊制ノ短所ヲ改良セシ者ナリ千八百三十二年八月十八日ノシヨシヨシ裁判所判決ヲ看ヨ

六百二第

權限抵觸訴訟ニ關スル判決如何ニ論ナク其判決詔書ヲ以テ何レノ裁判入費ヲモ宣告スルヲナシ千八百二十一年十二月十二日ノ王勅第七條權限抵觸裁判所ニ出頭シタル兩造ニ對シテモ亦然リ千八百五十年五月二十日ラビシエリ件判決蓋シ是レ權限抵觸訴訟ナル者ハ直接ニ公ケノ秩序ニ關スル權ヲ州長ヨリ要求スルナリトスル主義ニ由テ生スル所ニシテ兩造ノ私利ノ如キハ實ハ間接ニ關係アルニ過キス此レ其權限抵觸訴訟ハ眞ノ行政訴訟ニ非サル所以ナリ

權限抵觸訴訟ノ判決ヲナシタル時ハ千八百三十一年三月十二日ノ王勅第七條及ヒ千八百四十八年十二月三十日ノ布令第十六條ニ定ムル所ニ依リ司法宰相ニ於テ其判決書ノ送達ニ從事ス千八百四十九年十月二十六日ノ規則第十之ヲ約言スレハ正權限抵觸訴訟ノ行政訴訟ニ異ナル件々左ノ如シ

- 第一 參議院附屬代言師ノ助力ヲ要セサル事
 - 第二 外人ノ關涉ヲ許サ、ル事
 - 第三 書類通照ノ命令ヲ下サ、ル事
 - 第四 是レニ由リ普通ノ故障申述及ヒ外人ノ故障申述及ヒ敬慎ノ訴ヲ許サ、ル事
 - 第五 私訴者ノ間ニ係ル者スラモ凡テ裁判入費ヲ宣告セサル事
- 是レニ由テ之ヲ觀レハ余輩今此ノ權限抵觸訴訟ナル者ヲ以テ混合訴

七百二第

認ノ部中ニ入レタルハ最モ其當ヲ得タルヲテ證スルニ足ル
 成規ノ程式ヲ缺キタルカ爲メニ參議院ニ於テ其權限抵觸訴訟書ヲ廢
 棄スルハ千八百二十八年六月一日ノ王勅第八條ニ定メタル期限ニ
 至リ同一裁判所ニ對シ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得ス千八百三十八年六月五日ロクレース
 件判 決 若シ又該訴訟書ヲ以テ不當ナリト認メテ之ヲ廢棄スルハ司法
 官ヲ以テ裁判ヲ行フノ權アル者トナシ當該裁判所ニ於テ本案訴訟ノ
 手續ヲ始ム之ニ反シテ權限抵觸訴訟ヲ確認シタルハ由テ以テ行政
 官ノ要求ノ至當ナルヲ判然タリ是故ニ此場合ニ際シ司法官ノ行フマ
 ル喚招及ヒ訴訟諸手續及ヒ裁判宣告ハ皆無効ト看做セリ
 程式ヲ缺キタル爲メニ廢棄セラレタル權限抵觸訴訟ハ兩造相争フ所
 ノ本案訴訟ノ裁判アラサル間ニ重テ之ヲ起スヲ得ルヤ余ノ特ニ程
 式ヲ缺キタル云々ト掲記シタル者ハ既ニ一タヒ參議院ニ於テ不當ト

八百二第

認メタル權限抵觸訴訟ハ重テ起スヲ得サルヲ明白ナルヲ以テナリ
 蓋シ方ニ參議院ニ於テ決了シタル者ニ關シ再タヒ問題ヲ開クハ甚タ
 控訴ス可カラサル裁判ノ主意ニ違フナリ千八百五十二年四月八日ラト邑件判決
 程式ヲ缺キタル爲メニ廢棄セラレタルハ正ニ權限抵觸訴訟ヲ重テ
 起スヲ許シタル千八百二十八年ノ王勅ニ掲クル場合ナリ即チ始審
 ノ時定期限後ニ至リ制規ニ違ヒ權限抵觸訴訟ヲ起シタル場合ニシテ
 此場合ニ際スレハ控訴ノ時更ニ該訴訟ヲ重テ起スヲ得可シ王勅第四條第
 節ニ然レト同一裁判所ニ對シテ權限抵觸訴訟ヲ重テ起サントスル場合
 ニ於テハ疑ヲ生スルナキ能ハス蓋シ此場合ニ於テハ同上ノ王勅第十
 一條ニ依リ之ヲ重テ起スヲ得スト斷了セサル可カラサルニ似タリ本
 條ニ云フ權限抵觸訴訟書ヲ十五日内ニ裁判所書記局ニ出サ、ルハ
 本案訴訟ヲ受理シタル裁判所ニ對シ復タ權限抵觸訴訟ヲ起スヲ得可

カラスト此成文ニ由テ考フレハ凡ソ十五日内ニ訴訟書ヲ出サ、ルキ即チ十五日後ニ之ヲ出スキハ權限抵觸訴訟ヲ以テ無効トナシ其重ヲ起スヲ許サス是故ニ程式ヲ缺キタル爲メニ訴訟ヲ無効ト宣告シタルキハ縱令本案訴訟ハ未タ落着セサルモ權限抵觸訴訟ヲ重テ起ス可カラサルナリ

凡ソ程式ヲ缺ク者ハ何レノ場合ヲ論セス權限抵觸訴訟ヲ重テ起ス可カラストス可キヤ將タ之カ制限ヲ立テ、重テ起スヲ禁スルヲ以テ特例ト看做ス可キヤ余カ考フル所ニ因レハ後説却テ採ル可キヲ覺ユ元來制規ニ違フテ訴訟權ヲ行ヒタルハ訴訟ノ本案ニ係ル權ヲ失フニ非スシテ唯不規則ナル訴訟手續ニ關スル權ヲ失フノミ況ヤ司法官ノ弄權ニ因テ擾亂セラレタル公ケノ秩序ヲ恢復スルヲ目的トスル大訴訟ニ於テテヤ以上ノ通則ヲ準適ス可キノ理由アルヲ萬々之ヲ保ス可

シ而シテ王勅第十一條ニ其制規ニ違フカ爲メニ訴訟權ヲ失フ可シト定メタルハ始メ裁判所ノ判決ニ因リ行政官ヨリ之ニ訴ヘタル裁判轉移ヲ拒否シタルニ行政官ハ自カラ怠リテ定期限ニ該判決ヲ參議院ニ控訴シテ其否決ヲ求メサル者ト假想スルニ由ルナリ故ニ此場合ニ於テ行政官ハ恰モ敗訟者ニシテ定期限内ニ依法ノ訴訟手續ヲ履行セサル者ノ地位ニ居リ長久ノ期限間敢テ怠リテ裁判期限ノ經過スルヲ沮止セサルカ爲メニ其訴訟ヲ無効トセラレタルナリ故ニ凡ソ行政官ニシテ上ニ言フ如キ地位ニ在ル時及ヒ王勅第十一條ヲ以テ之ヲ拒ミ得ル時ニ遇ヘハ復タ同一裁判所ニ對シ權限抵觸訴訟ヲ重テ起スヲ得サル可シ然レモ程式ヲ缺キタル爲メニ訴訟ヲ廢棄セラレタルモ王勅第十一條ヲ以テ之ニ擬シテ論ス可カラサル場合ナレハ余ハ反テ權限抵觸訴訟ヲ重テ起シ得ルト訴ス可シ是故ニ出訴ノ權ナキ州長ニ於テ權

限抵觸訴訟ヲ起シタルカ爲メニ之ヲ廢棄セラレタルハ出訴ノ權アル他ノ州長ニ於テ之ヲ重テ起スヲ得可シ千八百四十二年六月二十九日テフールニエール判決人或ハ曰ハシ果シテ此ノ如クナレハ行政官ヲシテ永遠ニ裁判ノ執行ヲ沮止スルヲ得セシメント余ハ之ニ答ヘテ言フ可シ行政官ハ此場合ニ於テ復々千八百二十八年ノ王勅第十一條ノ爲メニ檢束セラル、コナシ且ツ至當ノ理由アリト雖モ法令上ニ於テ之ヲ拒否スルノ明文ナケレハ訴訟權ヲ無効ニ屬スル場合ヲ造爲スルヲ得ス何トナレハ至當ノ理由モ亦司法官ニ訴ヘタル事件ニ係ル裁判權ヲ要求スルコト行政官ニ許シタル通則ニ循ハサル可カラサレハナリ

右ニ論スル所ト同一ノ理由アルヲ以テ余ハ州長ニ於テ始メニ裁判轉移ヲ訴ヘサルカ爲メニ廢棄セラレタル權限抵觸訴訟ヲ重テ起スコト許ス可シ蓋シ此場合ニ於テハ所謂王勅第十一條ヲ準施ス可カラサルコト

明ケシ何トナレハ權限抵觸訴訟ヲ起シテ其訴訟書ヲ裁判所書記局ニ出スカ爲メニ定メタル十五日間ノ期限ハ州長ノ訴ヘタル裁判轉移ニ係ル裁判宣告書ヲ檢事ヨリ州長ニ送達スル日ヨリ起算スヘキ者ナレハナリ王勅第八條夫レ既ニ裁判轉移ニ係ル裁判宣告ヲ爲スコトナケレハ行政官ニ對シ之ヲ控訴スルノ期限アルノ理ナシ果シテ其理ナケレハ王勅第十一條ニ定ムル出訴無効ヲ主張スルコト能ハサルコト固ヨリ論ヲ俟タス余案スルニ此ノ如クニ區別シ去レハ眞理ニ適シ且ツ王勅第四第十一條ノ成文ニ合シテ諸權限抵觸訴訟中其最モ困難ナル前段ノ問題ヲ分解スルニ足ン

右ノ區別ヲ適施スルニ由リ余ハ千八百二十八年六月一日ノ王勅第十一條ニ指定スル書記局ニ呈書ノ式ヲ行ハサルカ爲メニ廢棄セラレタル權限抵觸訴訟ヲ重テ起スコト許シタル千八百四十二年十二月十五

日ムチストレルル件及ヒ千八百四十三年一月九日チーシベルル件ノ判決
 チ許認セス余ハ此兩判決ヲ以テ明白ニ王勅第十一條ノ例規ヲ破リタ
 ル者ナリトナス果シテ若シ此判決ノ如クナレハ同一事件ニ於テ同一
 兩造ノ間及ヒ同一ノ裁判所ニ對シ永遠無窮ニ裁判轉移及ヒ權限抵觸
 訴訟ヲ重テ起スヲ得隨テ權限抵觸訴訟權ヲ執行スルヲ名トスル行政
 官ニ對シ控訴ス可ラサル裁判ノ力ヲ滅却スルニ至ルノミナラス且ツ
 數百年間ノ久キヲ經ルモ猶ホ裁判執行ノ手續ヲ沮止シ得ルヲ見ン故
 ニ曰ク上ニ掲クル兩判決ハ不當不理ニシテ王勅第十一條ヲ破レル者
 ナリト

九百二第

參議院ハ權限抵觸訴訟ヲ廢棄スルニ當リ本案訴訟ヲ裁判ス可キ特別
 ノ司法裁判所ヲ指定ス可カラズ又指定スルヲ得ス若シ敢テスレハ是
 レ其權限ヲ超ヘテ數司法裁判所中ニ就キ宜ク裁判スヘキ者ヲ指定ス

ルノ違則者タル可シ蓋シ參議院ハ兩權々限抵觸訴訟ヲ判決シ得ルノ
 ミ之ヲ同權々限抵觸訴訟ニ及ホス能ハス第百五十一項ヲ看ヨ然ルニ其本案訴
 訟ヲ裁判ス可キ裁判所ヲ指定スルハ是レ同權々限抵觸訴訟ヲ判決ス
 ルナリ故ニ本分ノ權限ヲ超ヘタリト謂ハサルヲ得ス千八百五十年十一月十八日ハレ
|| 件ニ係ル權限
 抵觸裁判所判決

參議院ニ於テ權限抵觸訴訟ヲ許認シタル時モ前段ト同一ナル可キヤ
 將々此場合ニ於テハ本院ニ於テ行政官中本案訴訟ヲ裁判ス可キ當該
 官衙ヲ指定セサル可カラサルヤ或ハ之ヲ指定スルヲ得ルヤ夫レ參議
 院ニ必ス之ヲ指定セサル可カラサルノ義務ナキコトハ所謂權限抵觸訴
 訟ナル者ノ性質蓋シ然ルナリ故ニ余輩既ニ曰ク權限抵觸訴訟トハ行
 政官ニ於テ自カラ訴件ヲ判決セント要ムル訴訟權ノ執行ナリト此權
 限抵觸訴訟ヲ許認スルハ是レ即チ行政官ヲ以テ勝訟者トシ司法官ヲ

敗訟者トスルナリ此ノ如クニシテ権限抵觸訴訟ハ全ク結了セリ故ニ復タ行政官中誰レカ本案訴訟ヲ裁判ス可キ者ナルヤヲ指定スルヲ要セス宜ク兩造自カラ至當ト思量スル官衙ニ之ヲ訴出スヘキノミ然レモ參議院若シ其自カラ爲ス可カラサル事ヲ爲シテ兩造ヲシテ特ニ指定シタル行政官衙例ヘハ參事院ニ出訴セシメタル時ニ當リ兩造ハ爲メニ檢束セラレテ必ス此特定官衙ニ訴ヘサルヲ得サルヤドコルムナン氏ハ兩造ニ此ノ如キノ義務ナシト曰ヘリ氏著書第五版第一卷第四百五十四葉ヲ看余ハ此問題ヲ以テ頗ル澁難トナス今請フ敢テ之カ區別ヲ示サン凡ソ兩造等権限抵觸訴訟裁判ノ時ニ際シ自カラ參議院ニ出頭シテ辯論請求シタルコトアルキハ司法官ニ本案訴訟裁判ノ權ヲ奪ヒタル判決ハ勿論本案訴訟ヲ裁判ス可キ行政官衙ヲ特定シタル判決ヲモ遵奉セサル可カラス之ニ反シ兩造中ノ一方在ラサル所ニ於テ権限抵觸訴訟裁

第二百十

判ヲ行フタルキハ該裁判ヲ以テ行政司法兩權ノ間ニ生スル爭訟ヲ判スル者トナシ兩造ハ出テ、之ニ關係スルコトヲ必要トセスト稱シテ之ヲ遵奉セシコトヲ兩造ニ命スルヲ得ヘシト雖モ行政官中宜ク本案訴訟ヲ裁判スヘキ者ヲ指定シ兩造ハ此権限抵觸訴訟ノ席ニ出頭ス可キ者ナリトシテ之ヲ遵奉スルコトヲ命スルヲ得サル可シ
 権限抵觸訴訟ノ判決書ニ因リ司法官ニ裁判ノ權ナシトシテ之ヲ行政官ニ與ヘタルキハ廢棄セラレタル司法上ノ訴訟手續ニ關シ既ニ仕拂ヒタル費用ハ宜ク之ヲ如何ニスヘキヤ例ヘハ行政官タル參事院ニ本案訴訟ヲ裁判セシメタルキハ該參事院ヲ以テ爾後ノ總訴訟入費ハ勿論始メニ司法裁判所ニ出訴中仕拂ヒタル費用ヲモ限定宣告スルノ權アリトスルヤ曰シ然リ千八百四十四年二月二十三日ウヰユフール判例余ハ此判決ヲ以テ至當ト思量ス何トナレハ行政官ノ裁判權ヲ要メタルヲ當然ト認メテ司

法官ヲ以テ全ク其權ナシトナシタルキハ訴訟ノ本案ハ勿論之ニ附スル訴訟入費ヲモ此司法官ニ於テ裁判スルヲ得サレハナリ

權限抵觸訴訟ヲ許認シタル參議院ノ判決ニ因リ裁判權ヲ奪ハレタル司法裁判所ハ權限抵觸訴訟ノ起リタル前ニ兩造中ヨリ出シタル覺書ノ廢止ヲ命スルノ權アリヤ曰ク有リ千八百五十六年十二月余ハ此見解ニ對シテ甚タ疑ヒヲ懷キ此控訴院判決ヲ以テモンテーグ氏カ言フ所ノプロ、ア、ミ、コ、（羅、匈、語）ノ判決ト云ヘル者ノ部類ニ入レリト思考セリ

第二條 反權限抵觸訴訟

（提要）第二百十一 反權限抵觸訴訟ノ解義○千八百二十八年ノ王勅

ハ反權限抵觸訴訟ニ論及セス

第二百十二 反同權々限抵觸訴訟ニ因テ中止セラレタル訴訟手續ヲ回復スル爲メニ開キタル兩様ノ方法

第二百十三 承行裁判官判定ノ訴ヲ起ス前ニ控訴手續ヲ履ミ

等級ヲ追フテ（裁判スルノ職ニ在ラストスル判決）ヲ直訴スル

ヲ必要トスルヤ

第二百十四 反權限抵觸訴訟ヲ決ス可キ官衙ヲ問フ

第二百十五 反權限抵觸訴訟ニ於ル承行裁判官判定ノ訴訟ハ

直接ニ兩造ニ關係ス

第二百十六 反權限抵觸訴訟ノ程式○豫審○行政訴訟ノ事

第二百十七 右ノ結果即チ普通ノ故障申述外人ノ故障申述及

ヒ敬慎ノ訴等ノ手續

第二百十八 出訴失權ニ關シ行政訴訟ト反權限抵觸訴訟トノ

區別

第二百十九 裁判權ヲ奪ニ準スル反權限抵觸訴訟ヲ許シタル

第一百一十

反権限抵觸訴訟トハ同一ノ兩造ニ係ル同一ノ訴件ニ就キ司法官行政官互ニ之ヲ裁判スルノ職ニ在ラスト主張スル者ナリ此ノ如クニ兩官互ニ其職ニ在ラスト宣述スルキハ其裁判ノ權ヲ相争フニ非スシテ却テ之ヲ相拒ムカ故ニ實ハ之ヲ權限抵觸訴訟ト謂フ可カラス是ヲ以テ千八百二十一年十二月ノ王勅ニハ「レノルンシエシニヤシ承行裁判官判定ノ訴訟ト謂フヲ以テ兩官ヲ觀察シ權限抵觸訴訟ヲ以テセス故ニ其第八條ニ云ク反權限抵觸訴訟ト名クル行政官ト司法官トノ間ニ承行裁判官判定ノ訴訟ニ關シテハ舊ニ仍リ從事ス可シト千八百二十八年六月一日ノ王勅ハ復タ反権限抵觸訴訟ノコニ論及セス抑反権限抵觸訴訟ニ就キ行政官ノ會テ之ニ注意セサルハ果シテ何故ナルヤトナレハ蓋シ夫ノ反権限抵觸訴訟ナル者ハ爲メニ社會ヲ紊亂スル者ニ非ス又相韻頑スル司法行

政兩權ノ間ニ争鬭ヲ開ケル者ニ非サルヲ以テ決シテ政府ノ活轉ヲ障礙スルノ恐レナケレハナリ獨リ反権限抵觸訴訟ニ因テ生スル所ノ不便ハ訴件ヲ審判ス可キ裁判官ヲ一時失ヒタル兩造ノ私利ニ直接ノ關係ヲ及ホスニ在リ夫レ此事タルヤ社會ノ秩序ニ於テ固ヨリ重大ナラサルニアラスト雖モ之ヲ兩權ノ間ニ争論ヲ生スル正権限抵觸訴訟ニ比スレハ極メテ輕易ノ事ナリ是故ニ反権限抵觸訴訟ニ因テ起ル所ノ故障ヲ避クルニハ尋常ノ訴訟手續ヲ用ヰテ乃チ足ル必シモ臨時ノ處分方法ヲ要セサルナリ

反権限抵觸訴訟ヲシテ成立セシムルニハ左ノ數件ヲ具スルコトヲ必要トス

第一 司法官及ヒ行政官ニ於テ裁判スルノ職ニ在ラストスルノ宣述ハ承行裁判官判定ヲ求ムル同一兩造ノ間ニ關スル事千八百五十八年二

第二 裁判スルノ職ニ在ラストスル宣述ニ就キ司法行政兩官ノ一方ニ誤リアル事○若シ商務裁判所及ヒ參事院ニ對シ同一ノ兩造ヨリ漸ク同一ノ訴訟ヲ起シタル時ニ當リ該裁判所該參事院各、裁判スルノ職ニ在ラスト宣述スルニ就キ其道理アルニ於テハ一時兩造ハ其裁判官ヲ得サルモ決シテ該裁判所及ヒ該參事院ノ僚員ノ誤リニアラス故ニ該裁判所該院ノ判決ヲ廢棄スルヲ要セス然ラハ其尤ハ果シテ誰レニ歸スルト問ヘハ訴フ可カラサル所ニ訴ヘタル兩造ニ在リト答ヘサルヲ得ス又參議院ハ此時宜ク兩造ノ裁判ヲ受クヘキ官衙ヲ指示スルノ任アラス唯兩造ヨリ承行裁判官ヲ定メント訴求スル者ヲ受理セスト宣告スルノミ而シテ別ニ承行ノ裁判應ヲ搜索スルハ兩造自カラ之ヲ爲ス可シ

千八百五十一年三月二十九

第二十百二第

日
シ
ユ
ブ
ー
ル
件
ニ
係
ル
權
限
抵
觸
裁
判
所
判
決
ヲ
看
ヨ

司法行政ノ兩官互ニ裁判スルノ職ニ在ラスト宣述スル時此障礙ヲ除去スルノ方法凡ソニアリ第一控訴若クハ其他ノ手續ヲ以テ等級ヲ追フテ裁判スルノ職ニ在ラスト宣述スル官衙ノ決定ヲ直訴スルナリ第二承行裁判官判定ノ訴ヲ起スナリ凡ソ行政官若クハ司法官互ニ自カラ裁判スルノ職ニ在ラスト宣述スルニ當リ直チニ兩造ニ命シテ承行裁判官判定ノ訴ヲ起サシメス故ニ余假リニ某ノ訴訟ヲ參事院ニ對シテ起ストセン本院會之ヲ裁判スルノ職ニ在ラスト宣述スルヲ以テ更ニ始審裁判所ニ出訴セシニ復々其否拒スル所ト爲ル是ニ於テ余ハ之ヲ控訴院ニ訴ヘ且ツ其破毀上告ヲ請フヲ得ルナリ而シテ余ノ此等ノ訴訟手續ニ由リ裁判ヲ請フヲ得サルヲ以テ承行裁判官判定ノ訴ヲ起スヲ必要トスルニ至ルハ獨リ行政司法ノ兩上長官ヨリ發シタル裁

判スルノ職ニ在ラストスル判決ノ控訴ス可カラサル力ヲ有スル者トナリタル後ニ在ルノミ

行政司法ノ兩官互ニ自カラ裁判スルノ職ニ在ラストスル宣述ヲ等級ヲ追ヒ控訴スルヲ兩造ニ許與シタル權利ハ兩箇ノ普通裁判所ヨリ裁判スルノ職ニ在ラストスル判決ヲ發出スル場合ニ於テモ亦之レアルナリ故ニ今余某ノ訴件ノ裁判ヲ商務裁判所ニ求メシモ其裁判スルノ職ニ在ラスト宣述スルニ由リ更ニ之ヲ民事裁判所ニ出訴セシニ亦却クル所トナレハ余ハ此民事裁判所ノ判定ヲ控訴シ其控訴裁判ニ不服ナレハ復タ破毀上告ヲ行フ而シテ余ノ裁判ヲ受ク可キ官衙全クナキニ至ルハ右ノ兩訴訟手續ヲ行ヘ共ニ受理セラレサルノ後ニ在ルナリ

第三十百二第

兩造ハ兩箇ノ普通裁判所若クハ行政司法ノ兩官衙ヨリ發出シタル裁

判スルノ職ニ在ラストスル宣述ヲ等級ヲ追フテ控訴シ得ルトスルルルハ其承行裁判官判定ノ訴ヲ起スノ前ニ必ス前項ニ述フル如クスルルル要スルヤ裁判權收奪及ヒ承行裁判官ノ判定ニ關スル千七百三十七年八月ノ王勅第二篇第二十一條ニハ明白ニ之ヲ必要トスルト掲記ス本條ニ云ク兩造ノ一方ヨリ裁判轉移ヲ訴フニ因テ原裁判官其本案訴訟裁判ノ權ヲ失フタル時裁判轉移訴訟ノ被告者ハ「コンセイムプリベール、デ、バルチー」ニ對シテ承行裁判官判定ノ訴ヲ訴スヲ得スト雖モ裁判轉移ニ關スル判決ヲ控訴シ若クハ該判決ヲ確認シタル控訴裁判ヲ「コンセイムプリベール、デ、バルチー」ニ上告スルヲ許ス凡ソ裁判轉移ニ係ル判決ノ控訴ハ各其所管裁判區ニ準シ直チニ之ヲ控訴院ニ致ス可シト此王勅ニ依レハ承行裁判官判定ノ訴ヲ爲スノ前ニ等級ヲ追フテ控訴スルノ手續ヲ履踐セサル可カラズ而シテ「コンセイムプリベール、デ、バルチー」(即

ナ今ノ破毀法院ニ出訴シテ承行裁判官判定ヲ請求シ得ルハ裁判スルノ職ニ在ラストスル宣述ヲシテ控訴ス可カラサル力ヲ有スル裁判トナラシメタル後ニ於テス可キナリ蓋シ承行裁判官判定ノ訴ヲ以テ別ニ出訴ス可キ普通手續アル間ハ敢テ起ス可キ得サル所ノ非常ノ出訴手續ト觀察セシナリ

然レモ破毀法院ハ千八百三十八年三月二十六日ノ裁決ニ依リ上ニ援キタル王勅ノ條款ハ既ニ消滅スト定メタリ故ニ其裁決文ニ云ク法理上ニ於テハ訴訟法ヲ以テ承行裁判官判定ニ關シ民事裁判所及ヒ控訴院ニ與ヘタル權ヲ行フ可キノ規例ヲ定メタリ訴訟法第千四十一條ハ民事訴訟ニ關スル凡テノ法律慣例規則ヲシテ廢止ニ屬セシメタリ是故ニ特ニ破毀法院ニ關スル法律タル千七百三十七年ノ王勅ノ條款ハ他ノ裁判所ニ於テ履踐ス可キ訴訟手續ニ適用スルヲ得スト

同上ノ破毀法院裁決ニハ訴訟法第三百六十三條ニ依リ正反權限抵觸訴訟共ニ承行裁判官判定ノ訴ヲ起スヲ得且ツ兩衙互ニ裁判轉移ヲ許容シテ共ニ裁判スルノ職ニ在ラスト宣述スル場合ニ於テ兩造ハ其ノ爭フ所ノ訴件ノ承行裁判官ヲ有セサルニ由リ之カ裁判ニ任ス可キ裁判所ヲ兩造ニ指示スルヲ必要トス又何レノ法律モ未ダ曾テ兩造ニ對シ特ニ控訴手續ニ由テ裁判權限ニ係ル判決ヲ申訴スルノ義務ヲ命セス云々ト明記セリ千八百四十一年一月二十日破毀法院裁決參看此裁決ハ當然ノ理ニ合ス夫レ千七百三十七年ノ王勅ハ兩造ヲシテ強テ無益ノ費用ヲ支ヘ無用ノ訴訟手續ヲ行ハシムル者ナリ故ニ今日ニ當リテハ反權限抵觸訴訟ノ起リタル場合ニ於テ直チニ承行裁判官判定ノ訴ヲ爲シテ一層簡短確的ナル手續ヲ行フヲ得又裁判スルノ職ニ在ラストスル判決ヲ控訴スルヲ得ルナリ是ニ由テ之ヲ觀レハ舊法律ニ於テ必要ニシテ履踐

セサルヲ得ストスル者ヲ以テ今日ハ之ヲ行フヲ得ルノ單一ナル權利ニ變セシナリ故ニ若シ兩造會等級ヲ追フテ控訴スルノ手續ヲ行ヒタレトモ遂ニ受理セラレスシテ畢竟承行裁判官判定ノ訴ヲ起サ、ルヲ得サルニ至リタルハ無益ノ手續ヲ行フタルノ咎ヲ全ク兩造自身ニ歸スルヲ得ヘシ

以上同權々限抵觸訴訟即チ兩箇ノ普通裁判所互ニ裁判スルノ職ニ在ラスト宣述スル場合ニ於テ余輩ノ言フ所ノ者ハ之ヲ兩權限抵觸訴訟即チ行政官司法官互ニ裁判轉移ヲ許容スル場合ニ移シテ適用ス而シテ之ヲ然リト斷定スルノ理由モ亦前ニ述フル所ニ同シ千八百三十九年六月二十日

第四百二第

反權限抵觸訴訟ニ關シテ承行裁判官判定ノ宣告ヲ爲ス可キ官衙ハ正權限抵觸訴訟ヲ判決スル爲メニ指定シタル規則ヲ履踐セサル可カラス判決ヲ看ヨ

第五百二第

第二百五項而シテ常ニ裁判スルノ職ニ在ラスト宣述シタル兩官衙ノ共ニ上長官トスル者ニ對シ訴ヲ起サ、ル可カラス夫レノ訴訟法第三百六十條ノ主義ハ正反ノ權限抵觸訴訟ニ通シテ適施スルヲ余輩ノ前述セシ所ノ如シ是故ニ行政官司法官互ニ裁判スルノ職ニ在ラスト宣述スルキハ承行裁判官判定ノ訴ヲ參議院ニ諮詢判決ス可キ國長ニ對シテ起スヲ要ス何トナレハ國長ハ行政司法兩官ノ共ニ上長官トスル者ナレハナリ但シ權限抵觸裁判所存立ノ間ハ之レヲシテ反正ノ權限抵觸訴訟ヲ裁判セシム可シト雖モ千八百四十九年十月二日其廢止ノ後ハ之ヲ參議院ニ訴フ可キナリ千八百五十二年一月二十五日

第六百二十六

ニ先カ對理裁判ノ程式ヲ踐行セサル可カラズ而シテ此時行政官ハ自
 カラ出訴者ノ地位ニ立テ訴求セス唯當ニ兩造自カラ國長ニ訴ヘテ以
 テ承行裁判官ヲ判定セシメテ訴求ム可キノミ千八百五十二年一月二
 十五日ノ詔書第一條
 承行裁判官判定ノ訴訟ハ關係ノ兩造ヨリ直接ニ之ヲ致シ參議院附
 屬代言師ノ署名シタル願書ヲ以テス千八百四十九年十月二
 十六日ノ規則第十七條其訴件ニ
 シテ直接ニ政府ニ關係スル所ノ者ハ當該宰相ヨリ之ヲ出訴ス規則上
第十又裁判スルノ職ニ在ラストスル宣述ニシテ一ハ行政官ヨリ發出
 シ一ハ違警若クハ輕罪裁判所ヨリ發出スルモ司法宰相ヨリ出訴ス
ルヲ得同上規則其理由ハ刑事裁判手續ヲ中止スルノ場合ニ於ルヤ大
 ニ公ケノ秩序ニ關係ヲ及ホスヲ以テナリ
 右ノ諸則ハ千八百四十九年十月二十六日ノ規則ニ依リ更ニ權限抵觸
 裁判所ニ於テ履踐ス可キ程式ヲ定メタル後ト雖モ猶ホ且ツ常ニ存在

セリト余ハ思惟スルナリ現ニ千八百五十二年一月二十五日ノ詔書ニ
 依リ構成シタル參議院ノ諸判決書ニ當時權限抵觸裁判所ナル者亦存
 セサルニ拘ラス右ノ規則ヲ引證スルヲ見レハ參議院ノ意見ニ於テハ
 上ニ引キタル所ノ規則ニ多少必需執行ノ力アリトシタルヲ知ルニ
 足レリ故ニ余ノ思察スル所ニ因レハ此規則中泛ク權限抵觸訴訟ノ性
 質ニ關スル條款ハ之ヲ其缺ヲ補フタル法律ニ參伍適用シ必需執行ノ
 力アレハ權限抵觸裁判所ナル者ヲ特設スルニ由テ生スル所ノ條款ノ
 如キハ却テ其力ナキナル可シ余ノ此ノ如キ判斷ヲ下セル所以ハ千八
 百五十二年一月二十五日ノ詔書第二十七條ニ於テ該詔書ニ抵觸セサ
 ル舊法律及ヒ規則ノ條款ハ悉ク舊ニ仍テ存ストスルニ由ル而シテ夫
 ノ千八百四十九年ノ規則第十七八九ノ三條ハ該詔書ニ抵觸セサル部
 類ニ入ルヲ至テ明白ナリ

書類通照ノ命令ハ千八百四十九年ノ規則第二十一條ニ定メタル如ク亦司法宰相ニ於テ爲ス可カラズ宜ク參議院聽訟部長之ヲ行フヘキナリ千八百五十二年十一月二十五日詔書第三條第十七條及ヒ同年一月三十日ノ詔書第三條ヲ看ス

書類通照ノ命令ノ送達及ヒ其答辯ハ千八百四十九年規則第二十一條三ノ三條ニ定メタル期限ニ於テスヘキヤ將タ千八百五十九年六月十一日ノ法律第一條ニ參伍シテ千八百六年七月二十二日ノ詔書ニ定メタル期限ヲ遵守ス可キヤ

千八百四十九年十月二十六日ノ規則ニ必需執行ノ力アルコトニ就キ前陳セシ所ニ據レハ宜ク反權限抵觸訴訟ニ關シ該規則ニ定メタル期限ヲ遵守スヘキニ似タリ何トナレハ此期限ハ權限抵觸裁判所ヲ特設スルニ由テ生スルノ條則ニ在ラサレハナリ抑之ヲ執行スレハ一ノ利益アリ何ソヤ蓋シ該規則ニ定ムル期限ハ千八百六年七月二十二日詔

書ニ定ムル期限ヨリモ短キカ故ニ中止セラレタル裁判手續ヲ回復シテ兩造ニ其承行裁判官ヲ附與スルコトニ一層速カニ到着スル是ナリ之ニ反對スル論者ハ純然タル行政訴訟ノ性質ヲ有スル反兩權々限抵觸訴訟ノ場合ト他ノ行政訴訟ノ場合トニ論ナク承行裁判官判定ノ訴訟ニ關シ畫一ノ程式ヲ定ムルノ利益アルノミナラス該件ニ就キテハ法律及ヒ千八百六年ノ詔書ニ掲グル規例ニテ既ニ完備スルカ故ニ必シモ今存在セサル權限抵觸裁判所ノ爲メニ定メタル規例ヲ假用スルヲ要セフト主張セリ余ハ此反對論者ノ見解ヲ採用シ「コルス」及ヒ「アルジエ」ニ關スル千八百五十九年六月十一日ノ法律ニ依リ修正シタル千八百六年ノ詔書ニ掲グル期限ヲ遵用セント欲スルナリ

普通ノ故障申述外人ノ故障申述及ヒ敬慎ノ訴ハ行政訴訟ニ關シ定メタル條款ニ循ヒ反權限抵觸訴訟ニ係ル參議院ノ判決ニ對シテ起スナ

得ルヤ蓋シ其疑問ノ點ハ權限抵觸裁判所ニ於テ此等ノ訴訟手續ヲ許
 サ、ルニ由テ生スル者ニシテ千八百四十九年十月二十六日ノ規則第
 二十條ニ依リ普通ノ故障申述及ヒ外人ノ故障申述ハ共ニ之ヲ起シ得
 サルヲ疑フ容レヌ又再調査若クハ敬慎ノ訴ハ千八百四十九年ノ規則
 中未ダ曾テ言ヒ及ホサ、ル所ナルヲ以テ之ヲ推セハ亦當ニ此非常訴
 訟手續ヲ行ヒ得スト解シ去ルヘシ而シテ此ノ如キノ非常訴訟手續ハ
 其執行方法及ヒ其程式ニ就キ確的ナル規則ナケレハ權限抵觸裁判所
 ノ如キノ非常ノ法術ニ對シテ爲サシムルヲ得サル可キナリ然レモ余カ
 思考スル所ニ從ヘハ唯權限抵觸裁判所ヲ廢シタル一事ヲ以テ此問題
 ナ決了ス可シ夫レ該裁判所既ニ廢止ニ屬スレハ隨テ之ニ關スル事實
 ナシテ該裁判所創設前ノ況情ニ復セシム可シ而シテ夫ノ反權限抵觸
 訴訟ナル者ハ畢竟行政訴訟ノ程式及ヒ規例ニ循ツテ決定スル所ノ承

行裁判官判定ノ訴訟ナルヲ以テ該訴訟ノ判決ハ普通ノ故障申述外人
 ノ故障申述及ヒ敬慎ノ訴等ノ訴訟手續ニ因リ之ニ反對スルヲ許スヲ
 得且ツ許サ、ル可カラヌ加之ナラス出訴失權ハ固ト便利ノ法ニ非ス
 其裁判權有無ノ宣述ニ關係シ且ツ公ケノ秩序ニ影響スル事項ニ於テ
 ハ殊ニ然リトス

是ニ由テ之ヲ觀レハ反兩權々限抵觸訴訟ノ場合ニ於ル承行裁判官判
 定ノ訴訟ハ千八百六十六年七月二十二日ノ規則ニ掲グル程式ニ準シ之ヲ
 通照シ之ヲ豫審シ之ヲ裁判セサル可カラヌ千七百三十七年八月ノ王
 勅第二篇第一條ノ論辯王
法第三百六十四條已下千八百二十一年
 訟法第三百六十二日ノ王勅第八條ヲ看ヨ是レ權限抵觸裁判所設立ノ前
 ニ於テ參議院ノ判決ニ依リ遵踐シタル程式タルヲ決シテ疑フ可カラヌ
 然レモ承行裁判官判定ニ係ル訴訟手續ハ普通行政訴訟ニ於テ遵守ス
 ル程式ニ違ヘルニ似タルノ點アリ何ソヤ曰ク被告者ハ期限ヲ遵守セ

サル事例へハ千八百六六年七月二十二日ノ詔書第十二條ニ掲クル期限内ニ書類通照ノ命令ノ送達ヲ得サルカ爲メニ定メタル出訴失權ヲ自カラ利用シ得サル是ナリ 千八百十九年六月二十三日カユイアン件千八百三十八年七月二十六日アラール件判決ヲ看何故ニ之ヲ利用シテ原告者ニ出訴權ヲ奪フヲ許サストナレハ若シ之ヲ許スキハ兩造ハ其争フ所ノ本案訴訟ノ裁判官ヲ得サルヲ猶ホ未タ承行裁判官判定ノ訴訟ヲ起サ、ル時ニ於ルカ如シ隨テ亦兩造ハ承行裁判官ヲ得ンカタメニ重テ訴訟ヲ起サ、ルヲ得サルニ至ル可シ故ニ縱令失權ヲ命スルモ全ク其効ナシ唯無用ノ經費ヲ爲シテ故ナク裁判執行ヲ遅延スルノミナル可シ

第九百二第

參議院ニ於テ反兩權々限抵觸訴訟ヲ判決スルカ爲メニハ常ニ先ツ司法裁判所及ヒ行政裁判所ヨリ發出シタル裁判スルノ職ニ在ラストスル判決アルヲ必要トセス是ニ由リ兩造會參議院ヨリ發出シタル確定

判決ノ故ヲ以テ其承行裁判官ヲ有セサルコ次ニ例擧スル場合ノ如キハ參議院ニ於テ直チニ反權限抵觸訴訟ヲ判決シ得ルナリ茲ニ一裁判所アリ自カラ裁判スルノ職ニ在ラスト宣述シ控訴ス可カラサル力ヲ有スル判決ニ因テ兩造ヲ行政裁判所タル參事院ニ廻致セシニ該院ハ裁判スルノ職ニ在リト自カラ許シタリ然レモ兩造ハ之ヲ不服ナリトシテ直チニ參議院ニ控訴スルニ因リ本院ハ反テ司法官ニ裁判ノ權アレモ參事院ニハ其權ナシト判決セリ是ニ於テ兩造ハ全ク其争フ所ノ本案訴訟ノ承行裁判官ヲ失フニ至リタリ此時ニ當リ參議院ハ重テ出訴スルアルヲ待タス直チニ承行裁判官ヲ判定スルヲ得ルヤ將タ兩造ノ更ニ反權限抵觸訴訟ノ定式ヲ履テ本院ニ出訴スルニ至ルマテ承行裁判官判定ヲ猶豫ス可キヤ千八百五十七年一月二十二日ノシルベル件ニ係ル參議院判決ハ直チニ承行裁判官ヲ判定シ得ルトセリ蓋シ參議院ハ此場

合ニ際シ他ノ請求ヲ待タズ固ヨリ自カラ裁判權ヲ收奪シテ承行裁判官ヲ判定スルヲ得テ以テ兩造ノ爲メニ煩雜無用ノ訴訟手續ヲ省キ且ツ其時ト金トヲ失フヲ無ラシム可シト自信シタルナリ此參議院判決ハ訴求外ノ事ヲ判決スルヲ禁スル例則ニ違フト雖モ得テ賞賛セサル可カラズ抑裁判上ノ程式ナル者ハ恐クハ此ノ如キ恰當處分ニ適セサルヲアル可シ竊ニ思フニ若シ破毀法院ヲシテ反同權々限抵觸訴訟ヲ裁判セシメハ必ス參議院ノ判決ヲ是認採用スルナル可シ而シテ參議院ハ衡平法術ノ一種ナルヲ以テ此ノ如キノ判決ヲ爲スヲ得ルナリ

第三條 行政訴訟裁判官タル各行政官ノ間ニ起レル權限論
（提要）第二百二十 行政訴訟裁判官タル各行政官ノ間ニ起レル權限論ニ關スル參議院ノ職權

第二百二十一 此參議院職權ノ立定

第二百二十二 此等ノ行政ニ屬スル權限抵觸訴訟ヲ起スノ程式

第二百二十三 此等ノ程式ハ行政訴訟件ニ係ル權限抵觸訴訟ニ限ル〇其故如何

第二百十二

參議院ハ行政訴訟裁判官タル各行政官ノ間ニ起レル權限論ノ判決詔書案ヲ起議ス千七百九十年四月二十七日議決十四日公布法律第三項千七百七十五年一月二十五日ノ國憲第五條千八百五十二年一月二十五日ノ詔書第一條

何レノ政體ヲ行フノ時ニ論ナク參議院ハ上ニ述ヘタル職ヲ行ヒタリシカ其理由ハ容易ニ之ヲ會得ス可シ蓋シ國長ヲ以テ司法行政兩官ノ間ニ生スル權限抵觸訴訟ノ判決者トスルキハ其行政官ト行政官トノ間ニ起レル權限抵觸訴訟ノ判決者タルヲ固ヨリ當ニ然ルヘキナリ何トナレハ國長ハ行政ノ全權ヲ握ルヲ以テ其相爭フ所ノ兩行政官ニ并

セ長タルヤ明白ナリ隨テ此相抗抵スル行政官ヲシテ各其本分ニ復ラシムルノ權利ヲ有ス可キナリ

一十二百二第

各行政官ノ間ニ起レル正反ノ權限抵觸訴訟ヲ名ケテ權限論ト謂ヒ權限抵觸訴訟ノ稱ヲ下サス何トナレハ權限抵觸訴訟ト云ヘル語ハ裁判所ト行政官トノ間タ若シハ裁判所ト裁判所トノ間ニ生スル權限ノ爭論ニ特用シ來レハナリ又行政官ノ間ニ起レル權限論ニ關シテハ承行裁判官判定ト云ヘル語ヲ用キス其故ハ立法者ノ眼ヨリ見ルキハ所謂眞ノ行政裁判官ナル者ナシ行政裁判官ナル者ナケレハ隨テ承行裁判官判定ノ事ナキ固ヨリ當然ノ理ナリ然レモ既ニ行政訴訟ヲ裁判ス可キ行政官ノ間ニ正反ノ權限抵觸訴訟ナル者起ルノ實アレハ之ヲ判決スルノ方法ヲ規定スルヲ適當トス法律上此裁判權ヲ參議院ニ諮詢判決スル國長ニ與ヘタリ十月七日議決

二十二百二第

十四日公布法律第三項千七百九十一年四月二十七日議決五月二十五日公布法律第十七條千八百五十二年ノ國憲第五十條千八百五十二年一月二十五日參議院ノ判決モ亦此說ニ符合ス千八百十八年二月二十ノ詔書第一條參議院ノ判決モ亦此說ニ符合ス五日エロ一事件千八百三十七年七月二十六日夫レ參議院ヲ以テ司法行政兩官ノ間ニ生スル正反日アラール事件判決權限抵觸訴訟ヲ判決スルノ權アリトスルキハ其行政裁判所ノ間ニ起レル權限論ヲ并セ判決ス可キ固ヨリ論ヲ俟タサル可シ何トナレハ其行法權ノ一支派タル可廢黜ノ代理者ニ因テ之ヲ行フヲ以テナリ行政訴訟裁判官タル兩行政官ノ間ニ起レル正反權限論ノ場合ニ於テ踐守ス可キ程式ニ係リ州長ハ所謂權限抵觸訴訟書ナル者ニ因テ裁判權ヲ要求シ得サルヲ遺却ス可カラス唯當ニ上長行政官ニ控訴スルト同一ノ手續ニ因テ之ヲ訴ヘ若シハ直チニ參議院ニ對シ承行裁判官判定ノ訴ヲ起スヘキノミ今茲ニ州長ト參事院ト同一ノ兩造ニ係ル同一ノ行政訴訟件ヲ裁判スルノ權アリト互ニ宣述シ若シハ互ニ裁判轉

第二百二十三

移ノ訴ヲ許認シテ共ニ裁判スルノ權ナシト宣述スルト假定セヨ此ノ
 兩箇ノ場合ニ於テ或ハ州長ノ宣述ヲ先ツ宰相ニ次テ參議院ニ訴フヲ
 得或ハ參事院ノ宣述ヲ參議院ニ訴フヲ得或ハ州長ト參事院トノ相反
 對スル兩判決ヲ檢閱シテ承行裁判官ノ判定ヲ求ムルヲ得ルナリ
 行政官ノ間ニ起レル權限論ニ係ル參議院ノ職權ハ之ヲ行政訴訟ノ件
 ニ限ル可シ是故ニ純然タル行政件ニ係リ權限論ヲ生シタル時例ハハ
 兩州長ノ間ニ權限論ヲ生シタル時ハ其共通ノ上長官タル宰相自カラ
 命令ヲ下シテ此爭論ヲ決スルヲ得而シテ該宰相ノ命令ハ次節ニ論ス
 ル如ク其弄權ノ者ニ係ル外之ヲ參議院ニ控訴スルヲ許サス

第二節 破毀法院タル參議院ノ事

參議院ハ破毀法院トシテ左ノ二件ヲ判決スル詔書ヲ起草ス

第一

越權若クハ弄權ナリトシテ行政上ノ決定ヲ申訴スル件
アンコンベタンス エクセドイボワル

第二 程式ヲ破リ若クハ法律ヲ侵ストシテ申訴スル件

第一條 越權若クハ弄權ノ申訴

(提要)第二百二十四 參議院ハ行政上ノ決定ヲ越權若クハ弄權トス
 ルノ申訴ヲ議決ス

第二百二十五 右ノ場合ト第一節ノ場合トノ別

第二百二十六 參議院ニ於テ同上ノ申訴議決ノ權ヲ行フハ其

直轄官衙ニ係ルヲ必要トセス

第二百二十七 參議院ハ弄權ヲ勘定スルカ爲メニ事實ノ調査
 着手スルヲ得

第二百二十八 越權ト弄權トノ區別ヲ問フ

第二百二十九 規則書ニ對スル弄權ノ申訴ハ如何

第二百三十 記録セサル事實ニ對スル者ハ如何

第二百三十一 純然タル行政上ノ決定ニ對シ越權若クハ弄權ノ申訴ヲ爲スヲ得

第二百三十二 特別ノ明文ナキ時ト雖モ凡テノ確定ノ決定ニ對シ同上ノ申訴ヲ爲スヲ許ス

第二百三十三 參議院ヲ以テ控訴裁判所トスル官衙ノ決定ニ對シ亦同上ノ申訴ヲ起スヲ得

第二百三十四 州會ノ議決ヲ越權若クハ弄權トシテ參議院ニ訴フヲ得ルヤ

參議院ハ凡テノ行政上ノ決定ヲ越權若クハ弄權トスル申訴ヲ判決スル詔書ヲ起草ス千七百九十年十月七日議決十四日公布ノ法律第三項ニ云ク凡ソ行政官ニ對スル越權ノ訴訟ハ何レノ場合ヲ論セス司法裁判所ノ管轄ニ屬セス故ニ之ヲ行政總管タル國長ニ申告ス可シト即チ

第四百二十二第

第五百二十二第

是ナリ千七百九十一年四月廿七日議決五月廿五日公布ノ法律第十七條ニハ此等訴訟ノ調査ヲ參議院ノ職掌中ニ置ケリ共和曆第八年霧月二十二日ノ國憲第五十二條千八百五十二年ノ國憲第五十條及ヒ千八百四十九年十月二十六日ノ規則第二十五條ノ如キモ亦參照ス可シ蓋シ皇帝ハ行法權ヲ有シテ一般行政ノ上長官タルカ故ニ必ス其附屬官吏ノ弄權ヲ防止スルノ權ヲ握ル可シ而シテ此ノ如キノ權ヲ行ハントスレハ其事理ニ明達ナル官衙參事院ノ討議ヲ必要トス此レ其國長ニ與フルニ越權及ヒ弄權ノ申訴判決ノ權ヲ以テシ之ヲシテ參議院ニ諮詢ス所アラシメタル所以ナリ

第一節ニ掲ケタル場合ト本節ノ場合トハ彼ハ兩行政官ノ間ニ生シタル爭論即チ正反ノ權限抵觸訴訟ニ係ルト此ハ一行政官或ハ自カラ其權ヲ弄シ或ハ其權ヲ越ユルニ係ルトノ差別アルナリ而シテ此弄權若

六十二百二第

少ハ越權ノ場合ニ於テハ時ノ景況ニ因リ關係ノ訴者若シハ宰相ヨリ
 行政官ノ決定ヲ參議院ニ申訴シテ其廢棄ヲ求ム可キナリ
 參議院ニ於テ同上ノ權ヲ行ハントスルニハ必スシモ之ニ申訴シ來ル
 所ノ決定書ノ控訴手續ニ由リ本院ニ直轄スヘキ官衙ヨリ發出セルヲ
 要セス是故ニ州長ニ弄權ノ所爲アルキハ其直上官タル宰相ニ該決定
 書ヲ致サス直チニ參議院ニ對シテ其越權若クハ弄權ノ訴ヲ起スヲ得ル
 百三十五年三月二十五日クリブ件千八百三十六年二月四日サンジ
 エー件千八百五十三年五月六日メラーシ件千八百五十四年五月十八
 日カチロン 此訴訟手續ヲ確認シタル參議院判決書ノ主意ハ務メテ速
 ニ公ケノ秩序ニ多少影響スル所ノ越權ノ所爲ヲ制止スルヲ緊要トス
 ルニ在リ此レ其破毀法院ノ職ヲ行ヘル參議院ニ對スル申訴ハ直接ニ
 之ヲ致ス可シト斷定シタル所以ナリ
 參議院ハ之ヲ申訴シ來レル行政文書ニ弄權ノ有無ヲ勘定スルカ爲メ

七十二百二第

ニ事實ノ調査ニ着手スルヲ得ルヤ蓋シ司法裁判所ハ之ニ出訴セル行
 政所爲ニ關シテ事實ノ調査ヲ爲スノ權ナカル可キハ行政司法兩權區
 別ノ大則ニ違フカ爲メナレトモ其參議院ニ訴フル者ハ之ト同一ニ看
 ス可カラス故ニ其果シテ弄權ナルヤ否ヤヲ穿鑿スルニハ參議院ニ於
 テ之ニ來リ訴ヘタル所爲如何ヲ勘定シ得ルヲ要ス又一方ヲ顧ミレハ
 夫ノ參議院ナル者ハ行政部ノ上位ニ居ルカ故ニ之ヲ斥シテ事實ノ調
 査ヲ爲スノ權ナキ者ト非難スルヲ得ス已上ノ論說ハ千八百六十年七
 月十九日ベルシー港ニ關スル參議院ノ判決ニ於テ政府目代ノ許認セ
 シ所ナリロビタル氏言ヘルアリ曰ク余輩ハ弄權ノ裁判官タル參議院
 ハ之ニ訴ヘタル所爲ヲ勘定スルヲ得及ヒ勘定セサル可カラサルニ由リ
 事實ノ調査ニ着手スルノ義務アリトスル一點ニ就キ原告者等ト其說
 ナ同フス蓋シ論說上ニ於テハ權威妄用ノ變シテ弄權トナル可キ確
 タ

ル點ヲ定ムルハ難事ナル可ケレト實際ニ於テハ若シ參議院ニシテ事實ノ調査ニ着手セサル時ハ行政事務上權威妄用ニ係ル者ヲ除キ凡テノ弄權ヲ本院ニ申訴スルヲ許セル各人ノ權利ハ有名無實ニ歸シ隨テ申訴スルモ遂ニ効ナキニ至ル可シト余輩ハ之ヲ認ムルナリト千八百五十九年十二月二十二日カウシヤン件千八百六十二年十二月二十六日百五件千八百六十三年一月二十九日コンベル件同年二月二十六日ノ二件同年十一月二十六日エーカエ件同年八月七日ゴケ件參議院ハ弄權ト云ヘル語ニ極メテ該博ナル説明ヲ下シ權威妄用ト云ヘル語ニ同義ナリト之ヲ解釋セントセリ果シテ此ノ如クナルキハ純然タル施政官ニ監督權ヲ擴張シテ其束縛發縱ノ權ヲ參議院ニ附與スル者ナレト本院ハ此大權ヲ濫生スル如キ不正不明ノ者ニ非スト自信ス

弄權ノ申訴ハ國長ノ布令ニ對シテ行フヲ得ルナリ夫ノ償ヲ給セスシ

テ不當ニニースノ公證人局ヲ廢シタル詔書ヲ取消ス所ノミロン件ニ係ル千八百六十三年一月二十二日ノ參議院判決ハ則チ之レヲ準施セル適例トスルヲ得ヘシ千八百六十三年五月二十七日ドリレ、ド、ラノ千七百九十年十月七日議決十四日公布ノ法律ハ獨リ越權ノ一語ヲ掲クルノミナレト參議院ノ判決ニ因テ更ニ弄權ノ語ヲ之ニ附添セリ千八百五十一年六月十三日ノ法律第三十條第一節ニモ亦越權弄權ノ二語ヲ見ル本條ニ云ク徵兵檢査法院ノ判決ハ其越權弄權及ヒ犯法ニ係ル者ノ外之ヲ參議院ニ申訴ス可カラスト抑此越權弄權ノ二語ヲ併セ舉クル者ハ獨リ右ノ一法律ノ本文ノミナラス公利上ノ收沒ニ係ル千八百四十一年五月三日ノ法律第二十條及ヒ治安裁判官若クハ軍事裁判所ノ終審裁判宣告ニ對シ破毀上告ヲ爲シ得ルトシテ裁判所構成ニ關スル共和曆第八年風月二十七日ノ法律第七十七條等ニ之ヲ用非タ

リ然レモ千八百三十八年五月二十五日ノ法律第十五條ハ越權ニ就キ
 破毀上告ヲ許サス獨リ之ヲ弄權ニ限リタリ
 現今ノ法制及ヒ千七百九十年十月七日議決十四日公布ノ法律ニ依リ
 參議院ハ弄權ニ係ル行政文書ヲ廢棄スルノ權ヲ有スルヲ殆ト疑ヒテ
 容レス故ニ此主意ニ基キタル判決ヲ爲ス陸續絶ヘサルナリ第三十
 二項ヲ
 蓋シ弄權ナル者ハ參議院ニ申訴スル行政文書ニ對シ本院附屬代官
 師ノ常ニ屢用ヒタル所ノ一手段ナリ凡ソ此等ノ場合ニ際シ疑難ノ點
 ハ獨リ行政文書ノ果シテ弄權ナルヤ否ヤヲ知ルニアルノミ故ニ參議院
 ニ對スル申訴ノ受理セラルト否ヤトノ點ニ關シテ越權ト弄權トノ
 間ニ存ス可キ區別ヲ穿鑿スルコトハ實際上全ク無益ニ屬ス何トナレハ
 參議院ニ對シテハ彼此ノ別ナク共ニ之ヲ上告スルヲ得レハナリ然ラ
 ハ則チ余ハ該件ニ關シ本書第一版ニ辯明シタル論說ヲ茲ニ重テ載ス

ルコト無用ト信スルナリ而シテダレスト氏ハ如何ニ起權弄權ノ區別
 ナ約說セシヤテ下文ニ見ヨ曰ク凡ソ裁判官其既ニ自カラ裁判シタル事
 項ヲ復タ自カラ裁判ス可キ權ナキ時ハ之ヲ稱シテ越權トナシ其權限内
 ノ事項ヲ訴ヘラレタル裁判官其法禁ノ處分ヲ爲ス時ハ之ヲ稱シテ弄
 權トナスコト今日ノ通論ナリト氏著行政裁判論第二
 百二十五葉ヲ看ヨ
 參議院ノ判決ニ解釋スル所ニ據レハ弄權ノ義更ニ之ヨリ廣ク重緊ノ
 程式ヲ破リタル者モ亦之ヲ弄權ノ部ヲ入レタリ故ニ徵兵ニ關シ該件
 規則ニ因リ命シタル重緊ノ程式ヲ破リタル徵兵檢査法院ノ所爲ヲ以
 テ弄權ナリト判決セリ千八百五十六年三月
 六日パリール件判決
 人民ハ其弄權ニ係ル者ト雖モ即時施行セサル一般處分ヲ命スル水流
 規則書ヲ參議院ニ申訴スルヲ得ス故ニ其之ヲ當該官廳ニ申訴センカ
 爲メニハ此一般規則ヲ申訴セントスル人民ニ對シ特ニ施行シタル時

ニ於テスルヲ要ス千八百五十三年十二月十五日右ノ判決ハ蓋シ人民
ニ與ヘスシテ行政官ノミニ附シタル主義即チ水流警察ノ法ニ參ヘ考
ヘテ訴訟權ヲ執行スルカ爲メニハ現ニ發生シタル關係アルヲ要ス
ト云ヘル大則ヲ適施シタルナリ

十三百二第

參議院ハ筆記シタル所爲ノ弄權ニ係ル者ニ限り本院ニ訴フルヲ得レ
ト唯行政官ノ所爲ニ關スル者ニ對シテ訴訟ヲ起ス能ハスト判決シタ
リ是故ニ所定ノ高度ニ超ル墻屏ノ取毀ヲ命シタル參事院ノ決定書
アルニ因リ行政官ハ之ヲ執行セシカ爲メニ全墻屏ノ取毀ヲ從事シ
タルニ當リ此不法ノ取毀ヲ所爲ニ對シテ弄權ノ訴ヲ起ス可カラスハ
百六十二年五月二十七日余ハ已上ノ見解ヲ以テ全ク據ル所ナキノ謬說
トナス果シテ此見解ノ如クナルトハ行政官ヲシテ其威權弄用ヲ彌縫
辯解スルニ因テ他ヨリ訴出セラル、ノ苦難ヲ免カル、ニ至ラシム可

一十三百二第

シ故ニ若シ行政官ハ敢テ其所爲ヲ筆記セサレハ則チ參議院ノ監督ヲ
回避スルヲ得ルトスルニ及ンテヤ行政官ノ弄權極メテ甚シク實ニ言
フニ堪ヘサル者アレントス而シテ人民ハ爲メニ參議院ニ申訴スルノ
最有益ナル良劑ヲ施スノ手段ヲ奪ハレ隨テ參議院モ亦其最モ緊重
ナル時權ノ一ヲ失フニ至ル可キナリ然レモ幸ニシテ以上ノ見解ニ反
對スル所ノアングラード件ニ係ル千八百六十四年一月二十八日ノ參
議院判決アリ之ヲ以テ前段ニ援キタル千八百六十三年五月二十五日
ノ判決ヲ駁スルヲ得加之ナラス千八百五十五年五月五日ノ法律第四
十五條ヲ見レハ僅ニ命令ニ從ハサルノ事由ヲ以テ參議院ニ申訴シ得
ルヲ證スルニ足レリ此法律ハ最モ正理ニ合スル者ナリ
越權若クハ弄權ニ關スル申訴ノ受理ヲ得ンカ爲メニハ必スシモ行政
訴訟件ノ判決書ニ係リ訴ヲ起スヲ要セス凡テノ行政上ノ決定書ニ就

第二百三十二

キ之ヲ爲スヲ得ルナリ之ヲ復説スレハ凡ソ純然タル行政上ニ係ル文書ニ對シ亦越權若クハ弄權ニ關スル申訴ヲ爲スヲ得ルナリ千七百九十年十月七日議決十四日公布ノ法律ニハ純然タル行政件ト行政訴訟件トノ間ニ苟モ區別ヲ立テス余案スルニ越權若クハ弄權ニ係ル文書ハ其純然タル行政件ニ關スルモ將タ行政訴訟件ニ屬スルモ決シテ其間ニ輕重スル所ナシ此兩箇ノ場合ニ於テ公ケノ秩序ヲ害スルハ則チ一ナリ故ニ常ニ速ニ之ヲ制止セサル可カラス且ツ夫レ人民ハ己レニ關係スル行政件ニ就キ法律ニ依リ裁判權ヲ與ヘタル特別官吏ノ判決ヲ受ク可キ真正ナル權利ヲ有セリ若シ此權利ヲ侵害セラレタルハ人民自カラ尋常ノ規例ニ準シテ申訴ヲ起ス可キナリ

參議院ハ越權若クハ弄權ニ關スル文書ヲ廢棄スルカ爲メニ破毀法院ノ職ヲ行フノ主義ヲ推セハ隨テ行政官ノ確定判決若クハ終審判決ニ

シテ越權若クハ弄權ニ係ル者ハ何レノ法令モ未ダ曾テ之ヲ上告シ得ルトスル明文ヲ特記セサレハ獨リ參議院ニ對シテハ之ヲ爲シ得ルト論斷スルヲ要ス

徵兵ニ關スル千八百三十二年三月二十一日ノ法律第二十五條ニ云ク下ノ第二六七ノ兩條ニ掲ケタル場合ヲ除ク外徵兵検査法院ノ判決ハ確定ノ者トス可シト此法律アルニ因リ徵兵検査法院ノ判決ハ越權若クハ弄權ニ係ル者ヲ參議院ニ申訴シ得ルヤノ問題ヲ生セシカ千八百三十八年六月五日ノビル件ニ係ル參議院判決ヲ以テ之ヲ爲シ得ルト定メタリ

同上ノ例則ハ亦會計法院ノ判決ニ適用ス夫レ會計法院ノ判決ハ終審ノ裁判ナリ千八百八十九年九月十六日而シテ該法院ハ一ノ行政裁判所ナルヲ以テ參議院ハ之ニ對シテ破毀法院ノ職ヲ行ヘリ同上ノ法律第十七條然テ

三十三百二第

ハ則テ會計法院ノ判決ニ對スル越權若クハ弄權ノ申訴ハ千七百九十年十月七日議決十四日公布ノ法律第三項ニ依準執行シ得ルヲ知ル可キナリ千八百四十九年十月二十六日ノ規則第二十五條

參議院ハ獨リ前項ニ引キタル如キ終審ノ行政判決ニシテ越權若クハ弄權ニ係ル者ノ申訴ヲ審理スルノミナラス又參議院ヲ以テ行政控訴裁判所トスル行政官衙即チ參事院等ノ始審ノ行政判決ニ係ル申訴ヲ受理ス但シ第一ノ場合ニ於テハ參議院ハ破毀法院ノ職ヲ行ヒ唯越權ノ判決ヲ廢止スルニ止メ訴訟ノ本案ハ當該ノ行政官衙ニ廻致裁判セシム又第二ノ場合ニ於テハ參議院ハ先ツ越權ノ判決ヲ廢棄シテ後チ控訴裁判所トシテ訴訟ノ本案ヲ自カラ判決ス

州會ノ議決ハ其越權若クハ弄權ニ係レル者ヲ行政訴訟ノ程式ニ準シテ參議院ニ申訴シ得ルヤ蓋シ州會ハ直接ニ或ル事項ヲ判定ス即チ各

四十三百二第

郡ニ直税ノ配當郡及ヒ邑ヨリスル減税ノ願法律ニ依リ許シタル附加税ノ投決千八百三十八年五月十日法律第一二二條 重大ナル鄉路ノ定級千八百三十六年五月二十一日ノ法律第七條 等はナリ

直税配當其減税願若クハ重大ナル鄉路定級ニ係ル州會ノ議決ハ確定不變ナルヲ以テ參議院ニ諮詢判決ス可キ皇帝ニ之ヲ控訴ス可カラス千八百三十七年六月十四日ビスピス件判決 但シ千八百三十三年六月及ヒ千八百三十八年五月十日法律ノ說明書

二十二日ノ法律第十四條ニハ凡ソ州會ノ文書若クハ議決ニシテ法律ニ依リ其權限内ニ置カサル事項ニ係ル者ハ皆無効ニ屬ス而シテ王勅ヲ以テ其廢棄ヲ宣告ス下掲記セリ

越權若クハ弄權ニ係ル場合ト雖ヒ州會ニ對シテ行政訴訟ヲ起スヲ非斥スルカ爲メニハ左ノ如クニ論辯スルヲ得曰ク州會ハ參議院ニ屬スル官衙ニ非ス其職權ヲ人民ノ公選ニ得テ中央政府ノ命ヲ受ケテ其

職ニ服セス故ニ州會ハ各州ニ於テ恰モ國會ト同一ノ權ヲ行ヒ立法權ノ代理者トシテ其職ニ服ス夫レ千八百三十三年六月二十二日ノ法律以テ州會議決ノ弄權ニ係レル場合ヲ掲載規定セリ然ルヲ別ニ申訴ノ手段ヲ開設スルハ是レ立法者ノ意ニ違フナリト然レモ此論辯ニ對シ左ノ答辭ヲ爲スヲ得ヘシ曰千八百三十三年ノ法律第十四條ニ定メタル廢棄ノ手段ト行政訴訟トヲ相混合セサルヲ要ス蓋シ廢棄ノ手段ハ全ク大政府ノ爲メニ設定ス故ニ國長ハ躬親カラ若クハ宰相ノ報告ニ因テ之ヲ行フテ定規ノ豫審ヲ行ハス參議院ノ議決ヲ待タズ唯、宰相責任ナル者ヲ除ク外社會ニ對シテ一モ保障ヲ爲ス所ナシ而シテ凡ソ人民タル者ハ皆請願若クハ哀訴ノ手段ヲ以テ法律ニ依リ國長ニ與ヘタル此權ノ執行ヲ求ムルヲ得ルナリ然レモ行政訴訟ノ手續ニ循フキハ州會ノ議決ヲ公ケニ參議院ノ調査ニ附スルヲチ人民ニ許スカ故ニ其

傷害セラレタル人民ノ私權ニ對シ一層鞏固ナル保障ヲ與ヘタリ夫レ千七百九十年十月七日議決十四日公布ノ法律ハ含蓄極メテ廣ク何レノ行政官ノ文書モ皆其中ニ包容セサルハナシ是ヲ以テ該法律ハ之ヲ今ノ州會ノ議決ニ適施セサル可カラズ况ヤ當時ノ州行政官ハ後來州會ニ與ヘタル職務ヲ行ヒシヲヤ千七百八十九年十二月二十二日議決第一款第一條千八百三十九年五月三日モンガル邑件千八百四十年二月十九日サンテチエンヌ府件千八百四十三年四月十二日コンビエー件千八百五十年三月十六日タノン邑件判決等ヲ看ヨ

第二條 程式若クハ法律破犯ノ申訴

(提要) 第二百三十五 會計法院ノ判決及ヒ其他ノ行政訴訟判決ニ

對シ程式若クハ法律破犯ノ申訴

第二百三十六 護郷兵検査法官ノ判決ニ對スル申訴

第二百三十七 僅ニ唯、法律ヲ破犯若クハ誤用スルカ爲メニ弄

權ノ申訴ヲ惹起スヘキ者ニ非ス○徴兵ノ件ニ適施スル事
破殿法院ノ職ニ服スル參議院ハ會計法院ノ判決及ヒ法律ニ揭ケル場
合ニ於ル行政訴訟ノ終審判決ニ對シ程式若クハ法律破犯ノ申訴ヲ判
決スル所ノ詔書ヲ創ス

參議院ニ諮詢判決スル皇帝ハ行政裁判ノ最上等法衙タルヲ千八百五
國憲第五十條千八百五十二年 猶ホ破殿法院ハ其下ニ在ル總司法裁判
一月二十五日ノ詔書第一條 所及ヒ軍事裁判所ヲ統轄スル所ノ最上等法衙タルカ如シ共和曆第十八
年風月二十八
第七日ノ法律是レ其前文ニ云々スル所以ナリ
千八百七年九月十六日ノ法律第十七條ニ於テ之ヲ施行スルノ方法ヲ
示セリ蓋シ本條ハ行政事件ニ關スル規則ニ準シ程式若クハ法律ヲ破
犯セリト思考スル行政判決ノ破毀ヲ參議院ニ申訴スルノ權ヲ主計吏
及ヒ大藏宰相ニ與ヘタルナリ

護郷兵ニ關スル千八百五十一年六月十三日ノ法律第三十條ニ依リ千
八百七年ノ法律ニ擧ケタル主義ヲ護郷兵検査法官ノ判決ニ通用シタ
リ右ノ第三十條ニ云ク検査法官ノ判決ハ其越權弄權若クハ法律破犯
ニ係ル者ノ外參議院ニ申訴ス可カラヌ又甲乙ノ兩徴兵調査會若クハ
兩検査法官ノ宣告シタル同一人ニ對スル終審判決互ニ相矛盾スル片
ハ之ヲ參事院ニ申訴スルヲ得ト

右ノ第三十條ニハ程式破犯ヲ以テ參議院ニ破毀上告ヲ爲シ得ル場合
ト明記セスト雖モ暗ニ之ヲ含蓄スルヲ固ヨリ論ヲ俟タヌ何トナレハ
所謂程式ナル者ハ法律ニ依リ命シタル者ナルカ故ニ程式ヲ破ルハ即
チ法律ヲ破ルニ異ナラス且ツ此程式ヲ必緊不可缺トスルキハ之ヲ破
ルニ因リ隨テ検査法官ノ判決ヲ廢棄セサル可カラサレハナリ加之ナ
ラス余輩ハ前ノ第二百二十八項ニ於テ擧示スル所アリ曰ク參議院ノ

判決ニ循ヘハ法律上特ニ明記スル條ナシト雖モ千七百九十年十月七日議決十四日公布法律ニ掲クル一般通用ノ主義ニ準シ凡ソ必緊ノ程式ヲ破レル者ヲ以テ參議院ニ申訴シ得ル所ノ弄權トナスト而ルヲ況ヤ護郷兵ニ關スル千八百五十一年六月十三日ノ法律第三十條ニ依リ檢査法官ノ判決ヲ參議院ニ申訴スルヲ許セル法律破犯ヲヤ蓋シ言ハスシテ知ル可キナリ

第七百三十七

僅ニ唯、法律ヲ破犯若クハ誤用シタルカ爲メニ確定終審ノ行政判決ヲ參議院ニ申訴シ得ルヲ以テ通則ト許認ス可カラス若シ或ハ之ヲ通則ト誤認スルキハ其施行上ニ於テ甚タ危險ナル惡結果ヲ生ス可シ即チ凡ソ僅ニ唯、法律ヲ破犯スルノ實アレハ陸軍宰相若クハ權利ヲ傷害セラレタル一私人ノ別ナシ皆容易ニ徵兵檢査會ノ判決ヲ申訴シ得ルニ至ル是ナリ果シテ此ノ如クナレハ國家ノ利益及ヒ徵募幼丁ノ利益

ニ戻リ且ツ千八百二十一年三月二十一日ノ徵兵ニ關スル法律ニ違フ可シ右ノ徵兵ニ關スル法律ヲ施行セントスルニ當リ免役及ヒ減役ノ原由ノ説明ニ就キ毎歲無數ノ法律上ノ問題ヲ惹起セリ而シテ免役及ヒ減役ノ件ハ徵兵檢査會ノ終審判決スル所ナリ徵兵ニ關スル法律第二十五條此檢査會タル者其權限内ノ點ナレハ偶、誤リテ法律ヲ適用スルアレハ僅ニ唯、法律ヲ破犯若クハ誤用スルニ止マリ爲メニ之ヲ參議院ニ申訴スルヲ得ス必ス之ヲ申訴セント欲スルナレハ其法律破犯ノ變シテ稍、之ヨリ重キ越權若クハ弄權トナルヲ要ス可シ千八百四十九年四月司法裁判上ニ於テモ亦此ノ如キノ區別ヲ立ツ即チ破毀法院ハ弄權ニ係ル者ノ外治安裁判官ノ裁判上告ヲ受理スルヲ得ス千八百三十八年五月二日ノ法律第十五條故ニ該裁判ノ僅ニ唯、法律破犯ニ係ル者ヲ上告ス可カラストスル是ナリ

第三節 終審ニ非サル行政訴訟判決ノ申訴

(提要) 第二百三十八 參議院ハ始審ノ行政訴訟判決ノ控訴ヲ議決ス

第二百三十九 自カラ判決シタル者ヲ參議院ニ控訴セラル可
キ官衙ノ名數

第二百四十 參議院ハ細大ヲ論セス都テ參事院ノ判決控訴ヲ
審理ス

第二百四十一 參議院ハ舊ノ州理事官ノ判決控訴ヲ審理ス

第二百四十二 參事院ハ不健康ナル家屋ノ訴件ニ關シ終審判
決ヲ行フヤ否ヤノ問題ニ關シ論議紛々

八十三百二第
參議院ハ終審ニアラサル行政訴訟判決ノ控訴ヲ判決スル詔書案ヲ議
決ス即チ共和曆第八年雪月五日岡士ノ頒布セル規則第十一條及ヒ千
八百五十二年一月二十五日ノ詔書第一條ニ依リ參議院ニ與ヘタル行
コンシニル

政訴訟ニ關スル職權是ナリ該件ニ關シ參議院ハ行政控訴裁判所ノ職
ニ服シ其下位ニ在テ行政訴訟ヲ裁判スル官衙ノ判決ヲ改正ス此場合
ニ於テ參議院ノ職掌ハ始審裁判所商務裁判所及ヒ輕罪裁判所ノ上ニ
位スル控訴院ノ職掌ニ同シキナリ是故ニ參議院ハ獨リ弄權若クハ程
式及ヒ法律破犯ヲ破毀スルノ權ヲ有スルノミナラス且ツ訴訟ノ本案
ヲ勘査シ時トシテ始審裁判官ノ自カラ爲ス可キ事ヲ爲スナリ
自カラ宣告シタル行政訴訟判決ヲ參議院ニ控訴セラル可キ官衙ハ左
ノ如シ

第一 參事院

第二 宰相但シ各宰相承行ノ行政訴件ニ限ル

第三 州長但シ法律ニ依リ控訴ヲ許シタル特別ノ場合ニ限ル

第四 千八百七年九月十六日ノ法律ニ依リ構成シタル特別委員

及ヒ控訴ヲ許シタル場合ニ於テ外交上ノ契約執行ノ爲メ
ニ詔書ヲ以テ設置スル委員

第五 藩屬地ノ内議會

第六 戰時ニ限リ設置スルヲ例トスル海上侵畧裁判所千八百五
年五月九日及ヒ千八百五十九但シ該裁判所ニ對スル控訴ハ
行政上ノ手續ニ循ヒ裁判スルヲ前ノ第三十六項ニ掲論ス
ルカ如シ

第十四百二第

參事院ノ判決ヲ常ニ參議院ニ控訴スルヲ得ヘシト確定明記シタル法
律ノ條款ナシト雖モ千七百九十年九月七日議決十四日公布ノ法律ヲ
共和曆第八年兩月二十八日ノ法律第四條ニ對照シ去レハ常ニ之ヲ控
訴シ得ルヲ會得セン抑、此共和曆第八年ノ法律ハ千七百九十年ノ法律ニ
擬倣シ始メニ州理事官ニ與ヘ次テ中央行政官ニ附シタル所ノ職掌ヲ

其新設スル所ノ參事院ニ與ヘタルナリ獨リ其千七百九十年ノ法律ト
少ク異ナル所ノ者ハ該法律第一三四條ノ三條ニハ終審裁判ノ權ヲ州
理事官ニ與フト明記シタレト共和曆第八年ノ法律ハ却テ之ニ言ヒ及
ホサ、ルノ一點ニ在ルナリ何故ニ共和曆第八年ノ法律ハ之ニ言ヒ及
ホサ、ルトナレハ蓋シ該法律ノ目的ハ終審ノ權ヲ參事院ニ奪ヒ以テ
中央政府ノ權力ヲ鞏固ニセントスルニ在ルヲ明々タレハナリ案スル
ニ此新制度ハ行政官ノ職掌及ヒ階級ニ關スル主義ニ適合ス夫レ共和
曆第八年以降ハ國長ヲ以テ行政ノ全權ヲ握リ千八百五十二年
國憲第六條且ツ行
政裁判ノ權ヲ專有ストセリ同上ノ國憲第五十條千八百五十年
國憲第一條是故ニ凡
テノ行政官ハ其行政訴訟ヲ判決スル者ト雖モ其權力ノ本源及ヒ其行
フ所ノ職任ニ關シ皆眞ノ裁判官ニ非ス隨テ其裁判宣告ノ文書ヲ發ス
ル行政官モ亦之ヲ行政官吏ノ部類ニ入ル是ニ由リ最上級ノ行政權ハ

法律ニ明文アリテ特ニ禁スル時ノ外常ニ凡テノ行政官ノ判決ヲ改正
スルノ權ヲ有スト謂ハサル可カラズ然ラハ則チ參議院ニ參事院判決
ノ控訴ヲ裁判スルノ權アルヲ確定セシメカ爲メニ之ヲ明記シタル法
律ノ條款アルヲ要セサル知ル可シ余竊ニ以爲テク參議院ニ參事院判
決ノ控訴ヲ裁判スルノ權ハ即チ國憲ノ主義ニ出ツルナリト
右ノ如クニ論斷スレハ隨テ左ノ結果ヲ生ス可シ

第一 參議院ハ邑會議員ヲ命スル選舉方法ノ認否ニ關スル參事
院判決ノ控訴ヲ裁判スルノ職ヲ有スルナリ此控訴ヲ認定セス
且ツ邑會議員ノ選任ヨリ生ス可キ諸問題ヲ駁速ニ決了セント
欲シタル千八百三十一年三月二十一日ノ法律ニ依リ參議院ニ
控訴裁判ノ權アルヲ疑ヒタル說ハ前ニ辯論シタル主義ニ勝
ツヲ得サリキ
千八百三十三年五月三日
ブーシナリク件判決等 但シ現今ニ至リテハ

該件ニ關シ確タル法律ノ明文アリ千八百五十五年五月五日
法律第四十五條ヲ看ヨ
第二 訴訟ニ因テ争フ所至テ瑣小ナリト雖モ參議院ハ亦其控訴
ヲ受理ス何トナレハ法律上未ダ曾テ參事院ニ定リタル終審裁
判權ヲ附セサルヲ以テ凡ソ該院ノ判決ハ通則ニ從ハサルヲ得
ス是故ニ争訴スル所僅ニ五「サンチム」ニ過キサル者ト雖モ其
判決ヲ不當トシテ參議院ニ控訴スルヲ得ヘシ
參事院ハ千七百八十九年十二月二十二日議決千七百九十年一月十日
公布ノ法律ニ依リ設置シタル州理事官及ヒ共和曆第三年葉月五日ノ
國憲ニ定立シタル中央行政官ト同一ノ者ト看做スヲ要ス此州理事官
及ヒ中央行政官ハ他ノ職掌ノ外ニ共和曆第八年兩月二十八日ノ法律
ニ依リ參事院ニ與ヘタル職掌ニ兼テ任セリ然レモ右ノ兩官ト今ノ參
事院トハ稍異ナル所アリ何ソヤ曰ク兩官ハ所定ノ場合ニ於テ行政訴

訟ノ終審裁判權ヲ法律ニ依テ有シタレハ 千七百九十年九月七日議決
三第四第五 條ヲ看ヨ 參事院ハ則チ此權ナキ是レナリ
參事院ノ判決ハ悉ク控訴シ得ルトスル例則ハ千八百四十八年ノ革命
已降左ノ三ノ場合ニ於テ適用ス可カラサル者トナリタリ蓋シ此革命
ノ主義トスル所ハ中央集權ヲ希ハサル者ナリ

第一 千八百四十八年五月二日ノ布令第五六條ハ森林開拓ヲ許
可スルカ爲メニ設ケタル租稅ヲ確[○]的ニ量定スルノ權ヲ參事院
ニ與ヘタリ

第二 千八百四十八年八月七日ノ布令第六條ハ民權ノ有無ニ係
ル問題ヲ除ク外陪審ノ一般名簿ニ關スル一切ノ訴訟ハ參事院
ニ致ス可ク而シテ本院ハ無費ニテ其確定ノ判決ヲ爲ス可シト
定メタリ

第三 不健康ナル家屋改良ニ關スル千八百五十年四月十三日ノ
法律ハ其第五第六條ニ掲ケタル場合ニ於テ參事院ノ判決スル
者ニ終[○]審ノ權ヲ與ヘタリ即チ該法律ニ關スルドリアンセー氏
ノ報告書及ヒ該法律第十條ヲ右ノ第五第六ノ兩條ニ參互シテ
知ル可キナリ

右ニ舉ケタル第一第二ノ場合ハ今存在セス何トナレハ千八百四十八
年五月二日ノ布令ハ千八百五十年七月二十二日ノ法律第二條ノ爲メ
ニ廢セラレ千八百四十八年八月七日ノ布令ハ千八百五十三年六月四
日ノ法律第二十條ノ爲メニ廢セラレタレハナリ
千八百五十年四月十三日ノ法律ニ基キタル第三ノ場合ハ猶ホ存スル
ヤ否ヤノ問題ニ關シテ論議兩派ニ分ル余ハ其通則ニ背クヲ顧ミス此
第三ノ場合ハ今猶ホ存スト思考ス若シ或ハ千八百五十一年十二月二

日已來定立シタル政府ハ中央集權ノ主義ニ復シタルカ故ニ何レノ場
 合ヲ論セズ參事院ハ終審判決ノ權ヲ有ス可カラズ故ニ千八百四十八
 年ノ國憲施行ノ時ノ法律ニ依リ參事院ニ此權ヲ特與セル場合ト雖モ
 亦然リト謂フ者アラハ余ハ之ヲ僻論ト評ス可キノミ夫レ此第三ノ場
 合ヲ廢セントスルニハ其法律ノ本文ト新政府ノ主義ト並ヒ行ハル可
 カラサル者アルヲ要ス然レモ其並ヒ行ハル可カラサルノ理由ナキハ
 明白ナリ故ニ第一第二ノ場合ニ於ル如ク立法者ノ之ヲ廢ス可シトセ
 サル間ハ第三ノ場合ヲ以テ猶ホ存スル者ト斷定セサル可カラズ千八百
 十九年七月十四日ホルソール
 件ニ係ル判決ノ論辯ヲ看ヨ

第四節 詔書ニ對スル故障申述及ヒ詔書ノ說明ヲ請求スル事

(提要) 第二百四十三 參議院ハ詔書ニ對スル故障申述及ヒ詔書說明
 ノ請求ヲ議決ス

第二百四十四 說明權ノ基礎

第二百四十五 此等ノ請求ハ舊政府ノ布令文書ニ適用ス

第二百四十六 法律ノ方ヲ有スル布令文書ニ關スル特例

第二百四十七 故障申述ハ行政訴訟ニ屬スル權ニ係ル者ノ外

之ヲ許サズ

第二百四十八 礦坑許與ニ關スル詔書ニ適施スルコト

第二百四十九 航行ス可キ水流上ニ設置スル水車及ヒ其他ノ

製造所ニ關スル詔書ニ適施スルコト

第二百五十 程式ヲ遵守セサレハ之ヲ申訴スルヲ得

第二百五十一 說明ハ一ノ爭訟ヲ生シ若クハ權限抵觸訴訟ヲ

起シタル時ノ外之ヲ請求スルヲ許サズ

第二百五十二 右ノ請求ハ行政訴訟ノ程式ニ準シテ之ヲ豫審

シ之ヲ規定ス

第二百五十三 參事院ハ行政訴訟判決書ヲ説明スルヲ得〇該件ニ關シ論議紛々

第二百五十四 宰相ハ同上ノ權ヲ有スルヤ

第二百五十五 參議院ニ附シタル政府布令文書説明權ノ適施

第二百五十六 債ヲ要セサル許與ニ關スル詔書ニ係リ同上ノ

説明權アルハ疑ヲ容レズ

第二百五十七 買賣契約交易契約其他之ニ類似ノ契約ニシテ

政府ト人民トノ間ニ締結シタル者ニ關シテハ如何

第二百五十八 參議院ノ權限ニ左袒シタル公判

第二百五十九 特別法律ニ依リ施爲シタル許與ニ關シテハ如何

第二百六十 間稅表ニ關スル詔書ニ係ル特例

第二百四十三

參議院ハ詔書ニ對スル故障申述及ヒ該詔書説明ノ請求ヲ議決ス千八百五十二年ノ國憲第五十條千八百五十二年一月二十五日ノ詔書第一條千八百九十年五月四日ノ詔書第四條第五條千八百五十二年三月五日ノ

件判決書

參議院ニ諮詢判決スル國長ハ行政訴訟件ニ關シ行政官ノ失錯ヲ匡正

ス可キ最上等法術ナリ若シ國長ニシテ誤リテ人民ノ權利ヲ害スル詔

書或ハ王勅ヲ署名發布シタル時ハ該人民タル者相當ノ手續ニ準シテ

其取消ヲ請求シ得ルヲ固ヨリ當ニ然ルヘシ而シテ所謂控訴ナル者ヲ

其手續トスルヲ得ス何トナレハ行政官中皇帝ノ上ニ位スルノ官衙ナ

リ且ツ皇帝ハ行法ト行政裁判トノ全權ヲ有スル者ナレハナリ故ニ詔

書ニ對シテハ唯普通ノ故障申述若シハ外人ノ故障申述ヲ爲スノ手段

アルノミ此故障申述ハ他ニ比スレハ一層能ク事情ヲ詳悉シ且ツ參議

院ノ議決ヲ聽キテ自カラ辨識スル所アル國長ニ致ス可キナリ是ニ由

テ之ヲ觀レハ前ノ第三節ニ於テ參議院ニ與ヘタル職掌ト此第四節ニ依リ參議院ニ附スル職掌トノ間ニハ彼ハ控訴即チ改正ノ手續ヲ用非此ハ故障申述即チ取消ノ手續ヲ用ユルノ差異アリ抑此差異アル所以ハ申訴セラレタル文書ニ差異アルニ因ル即チ彼ハ皇帝ニ隸屬セシ官衙ヨリ發布シタル文書ナレト此レハ親シク皇帝ノ行下シタル文書タル是ナリ

第四百四十四

詔書説明ノ請求ハ故障申述若クハ外人ノ故障申述ト同一ノ主義ニ基ク者ナリ夫ノ法ヲ爲ス者ハ亦之ヲ説明スト云ヘル格言ハ均ク政府ヨリ發布スル文書ニ適施ス是故ニ立法行政ノ兩權ヲ兼有セシ國民會ハ左ノ如クニ令シタリ曰ク布令説明ノ權ハ專ラ國民ニ屬ス故ニ布令ノ説明ヲ請ハント欲スル者ハ獨リ之ヲ國民會ニ請フヲ得ルノミト
共和曆第二年霜月十四日法律第二款第十一條 側ラニ監臨提督スル者ナクシテ行フ所ノ説明

權ハ殆ト改正ノ權ニ近シ蓋シ文書説明ノ權ヲ有スル者ハ常ニ己レニ便適スル意義ヲ以テ之ヲ解説スルヲ得ヘシ然ラハ則チ法律ニ依リ政府ノ布令文書ヲ説明スルノ權ヲ某ノ官衙ニ有セシムルキハ行法ト行政裁判トノ全權ヲ皇帝ニ與ヘタル我國憲ノ主義ニ背戾スルニ至ル可シ是故ニ此説明權ナル者ハ必ス政府ノミノ特權中ニ置クヲ要ス
行政訴訟ノ程式ニ準シ參議院ノ執行シタル説明權ハ更ニ一層確的ナル主意即チ行政司法兩權ノ區別ニ關スル大則ニ基ケリ蓋シ參議院ノ爲ス所ノ説明ハ特別ノ説明ニシテ一般定則ニ關スル者ニ非ス即チ主トシテ特ニ行政管理上ニ係ル詔書ニ屬ス抑此詔書ナル語ニハ全ク異ナリタル二種ノ文書ヲ含有スルコトハ人々皆知ル所ナリ即チ一ハ國憲第六條ニ依リ法律ヲ執行スル爲メ國民ノ守ル可キ通則ヲ定メ一ハ一事ヲ規定シ若シハ一ノ特別處分ヲ命スル是ナリ第一種ニ屬スル文書

ノ説明權及ヒ第二種ニ屬スル文書ノ説明權ハ共ニ之ヲ行下スル國長ニ屬スト雖モ行政訴訟ノ手續ニ準スル説明ハ獨リ其第二種ノ文書ニ適施ス是レ蓋シ行政司法兩權區別ノ大則ヨリ出ル所ノ結果ニシテ以テ司法裁判所ノ行政官ノ職ヲ侵佔スルヲ防キタルナリ但シ此侵佔ヤ法律執行ノ爲メニ一般處分ヲ命スル定期ノ詔書ヲ特ニ施用スル場合ニ於テハ殆ト患フルニ足ラス何トナレハ裁判所ニ法律ヲ適施及ヒ説明スルノ權アリトスレハ隨テ亦法律ノ執行ヲ命スル一般處分ニ因テ法律ノ主意ヲ申明スル詔書ヲ施行説明スルノ權アレハナリ余著行

題第十五葉
下ヲ看ヨ

吾輩ハ詔書ノミヲ以テ參議院ニ對シ其故障申述ヲ爲シ若クハ其説明ヲ請求シ得ヘキ文書ナリト論シタレト云ヘル語ヲ狹隘ノ意義ニ解シ去ル可カラズ蓋シ行法權ナル者ハ本來一ニシテ變セス故ニ

第二四五十四

其權域ノ廣狹如何ニ論ナク行法權ハ常ニ其性ヲ同フシテ成立シ決シテ滅絕スルコアルナシ唯時ノ國憲如何ニ因テ稍其體制ヲ異ニスルノミ千七百八十九年ノ革命前ヨリ今日ニ至ルマテ續テ興レル政府ニ於テ所謂行法權ナル者ハ依然存立シテ已マス然ラハ則チ此第四節ニ定メタル主義ハ之ヲ古來ノ君主政府及ヒ千七百八十九年ノ第一革命以降佛國ニ存立シタル諸政府ノ發布スル凡テノ文書ニ適施セサル可カラズ千八百二十八年四月十五日レノ一ノ件千八百四十三年七月十九日ユードベル件同年十二月三十日アンザン礦坑會社件千八百五十二年十二月九日ロ現今佛蘭西ニ屬スル舊縣主ノ發布シタル文書ニ關スル件判決等フレンス千八百四十一年一月二十九日ハルセー件

ル説明ニ就キ亦當ニ同一ノ見解ヲ下スヘキナリ

國民會政ノ時ニ委員タル代議士ノ發布シタル文書ノ説明ニ關シテハ

宜ク千七百九十三年七月十七日ノ布令共和曆第四年風月二十五日ノ

第六十四百二第

法律及ヒ共和曆第九年暖月九日ノ法律及ヒテヘルテ一併ニ係ル千八百二十四年四月七日ノ參議院判決ヲ參看スヘシ
「法ヲ爲ス者ハ亦之ヲ説明ス」ト云ヘル格言ニ循ヒ及ヒ法律ハ之ヲ立定スルノ權ヲ有スル官衙ニ依ルノ外敢テ廢止スルヲ得ス」ト云ヘル國憲ノ大則ニ準シ參議院ハ故障申述若クハ説明ノ手段ニ藉リテ立法上ニ關スル王勅及ヒ法律ノ力ヲ有スル詔書ヲ廢止スルヲ得サルハ固ヨリ論辯ヲ俟タス第八項

第七十四百二第

普通ノ故障申述若クハ外人ノ故障申述ハ其訴者ノ爲メニ行政訴訟ニ屬スル權利ニ係ル者ノ外之ヲ參議院ニ致スヲ許サス而シテ故障申述ノ手續ヲ用ヅル申訴ノ受理不受理ハ必ス常ニ申訴セラレタル文書ノ性質ニ屬スル者ニ非ス故ニ純然タル某ノ行政事項ヲ規定スル詔書ニ對シテ故障申述ヲ許サ、ルヲ通例トスレヒ其實施上ノ或ル場合例ヘ

第八十四百二第

ハ程式ヲ破リタル等ノ場合ニ於テハ却テ之ヲ許スヲ得ルナリ且ツ之ヲ行政事目ニ照考スレハ一層明白ニ其受理セラル、ト否ヤトナ覺知スルニ足レリ
千八百十年四月二十一日ノ法律ニ依リ凡ソ礦坑ハ該法律第四篇ニ定メタル程式ニ循ヒ參議院ニ諮詢議決シタル許與詔書ニ由ルニ非サレハ之ヲ開掘スルヲ得ス法律第五條 右ノ程式ヲ遵守シタル許與詔書ニ對シ礦坑地表ノ所有者若クハ其他ノ關係者ヨリ故障申述ヲ爲ス能ハス法律第十七條 及ヒ千八百四十八年十一月七日ノ王勅第十一條 而シテ許與件判決等及ヒ千八百四十八年十一月七日ノ王勅第十一條 而シテ許與詔書ヲ下スニ先タテ其下調ヲ爲スノ際ニ故障申述ヲ爲シタル者ト之ヲ爲サ、ル者トノ區別ヲ立テス千八百十一年八月四日 其故如何トナレハ礦坑地表所有者若クハ其他ノ關係者ヨリ許與詔勅發布前ノ下調ニ對シ故障申述ヲ爲シタル場合ニ於テハ爾時既ニ其申訴スル所ノ者

ヲ勘査裁決シタルカ故ニ重テ復タ許與詔勅ニ對シ普通ノ故障申述
 若クハ外人ノ故障申述ヲ爲スヲ得ス蓋シ其下調ノ時ニ當リ榜示及ヒ
 公告ノ手段ヲ以テ地表ノ所有者等ヲシテ既ニ各其意見ヲ述ヘシメテ
 官之ヲ聽キタレハナリ且ツ許與詔勅ハ行政官ニ委託シタル隨便權ノ
 範域内ニ於テ爲シタルヲ以テ純然タル行政文書ナリ又地表ノ所有者
 等下調ノ時ニ際シテ故障申述ヲ爲サス許與詔勅行下ノ後ニ至リ却テ
 之ヲ爲セル場合ニ於テハ其外人ノ故障申述ヲ爲セルヲ受理ス可カラ
 ス何トナレハ所謂外人ノ故障申述ハ自カラ敗訴セル裁判宣告ノ時ニ
 代理スル者ナク又ハ招喚セラレサル者ノ爲メニ設クルノ手續ナレハ
 ナリ訴訟法第四百七十四條抑千八百十年ノ法律ニ依リ定メタル程式トハ何等ノ
 事トヤ即チ榜示及ヒ公布ニ因リ許與詔勅行下ノ前ニ故障申述ヲ公衆
 ニ爲サシム可シトスル是ナリ而シテ許與ノ請願者ト相知ラサル關係

者ハ特別ニ其名氏ヲ指シテ故障申述ヲ爲ス可シト招喚セラレサルハ
 勿論ナレトモ元來特別ニ其名ヲ指シテ招喚スルノ方法ハ今論スル所ノ
 事目ニ適當セス故ニ法律ニ依リ行政上ノ程式ヲ以テ一般ニ廣告スル
 延期方法ヲ公衆ニ指示スレトモ指名招喚ノ方法ヲ命セス否之ヲ命スル
 ヲ得サルナリ而シテ既ニ一タヒ公告ヲ爲セハ外人ニシテ故障申述ヲ
 爲サントスル者ニ左ノ如ク應答シテ其請ヲ却クルヲ得ン曰ク汝ハ
 宜シク招喚セラレヘキカ爲メニ招喚セラレタリ然ルニ汝ハ許與詔
 勅行下ノ前ニ故障申述ヲ爲サ、リシハ即チ汝ノ罪ナリ故ニ汝ハ宜
 シク主張スヘキノ好手段ヲ有セサル者ト想定セラレ政府ハ汝ノ爲
 メニ曾テ故障セラレ、トナク重大ナル行政文書ヲ作りテ其隨便權
 ヲ資用シタリ今ニ至リ汝ハ復タ之ヲ非難スルト受理セラレ可カラ
 スト然レトモ已上言フ所ニ反シ礦坑許與ノ前ニ法律ニ依リ定メタル程

式ヲ遵守セサル場合ニ於テハ固ヨリ該訴與詔勅ニ對スル故障申述ヲ受理セラル可シ千八百十年四月二十一日ノ法律第十七條第二十八條ノ論辯千八百十八年五月十三日リヲタル件判決千八百四十二年三月十八日フアブル件判決此時故障申述ヲ爲ス可キ外人ハ正ニ訴訟法第四百七十四條ノ場合ニ遭逢スル者ナルヲ以テ自カラ出テ、吾ハ我カ權利ヲ傷害スル詔勅ノ下調ニ於テ法ニ依リ招喚セラレス又代理セラレスト道説スルヲ得ルナリ凡ソ外人ノ利益ヲ保護センカ爲メニスル程式ヲ破犯スル時ハ此外人ノ爲メニ故障申述ヲ正當トスルニ足ル可キ權利ヲ生ス可シ

九十四百二第

航行ス可キ河上ニ設置スル水車及ヒ其他ノ製造所ハ政府ノ許可ナクシテ營作スルヲ得ス共和曆第六年風月十九日凡ソ此等營作ノ許可ニ係ル布令ヲ發セントスルキハ必ス先ツ共和曆第六年暖月十九日ノ宰相諭達書ニ依リ規定シタル程式即チ外人ヲシテ故障ヲ申訴セシメテ

政府ニ啓沃スルヲ目的トスル所ノ程式ヲ履踐セサル可カラス而シテ水上製造所ノ設置許可ノ布令ニ因テ己レノ權利ヲ害セラレタリト主張スル外人ハ之ヲ參議院ニ出訴スルヲ得ルヤ蓋シ此問題ハ前項ノ問題ト全ク同一ナリト雖モ論者等ノ之ニ見解ヲ下ス一様ナラス參議院ノ判決ハ漸ク其說ヲ變セリ其トルカ一件ニ係ル千八百二十一年五月三十一日ノ判決ニハ水車設置ヲ許セル王勅ノ被害者タル外人ハ該王勅ノ送達ヲ得タル後三ヶ月間行政訴訟ノ手續ニ依リ之ヲ故障スルヲ得但シ水車設置ニ係ル下調ノ際ニ外人ヨリ州長ニ告訴セシマアル場合ト雖モ亦同シトセリダビユル氏ハ其著ハス所ノ水流論第一卷第三百六十三項及ヒ第二卷第六百四十項ニ於テ右ノ見解ヲ是認セリ

ドコロムナン氏著書第五版第一卷第五百二十葉第四項ヲ看ヨ

已上ノ論說ハ當然ノ主義ニ悖リ且ツ設置許可ヲ得タル者ノ利益ヲ害

ス夫レ行政官ニ於テ水車若クハ其他ノ製造所ノ設置ヲ許セル布令ハ其隨便權ニ依リテ發出スル者ナリ何故ニ其隨便權ニ出ツルトナレハ蓋シ法律ハ何レノ場合ニ於テ許可ヲ與ヘ若クハ拒ム可シト豫言スルヲ得サルヲ以テ勢ヒ法律ニ依リ指定信任シタル官衙ノ判定ニ之ヲ委セサル可カラズ是故ニ此官衙ハ申訴ヲ爲ス者ニ向ヒ左ノ如クニ對フルヲ得曰ク今汝カ非難申訴スル所ノ文書ハ或ハ汝ノ利益ヲ害スルアルモ汝ノ權利ヲ傷ハス何トナレハ吾カ之ヲ許可スルアルニ非サレハ汝之ヲ行フノ權利ナケレハナリ抑、設置ノ許可ヲ與フルモ與ヘサルモ吾ハ我ニ屬スル所ノ權ヲ費用スルノミ決シテ他人ニ干カルナシ是ヲ以テ汝ハ行政訴訟ノ手續ヲ以テ吾カ許可シタル文書ヲ故障スルヲ得スト又一方ヲ顧ミレハ水車若クハ其他ノ製造所ノ設置ヲ許可セシ政令ヲ送達スル日ヨリ三ヶ月間ハ此ノ許可ノ布令ヲ故障

スルヲ外人ニ許スヨリ危キハナシ即チ設置許可ヲ得タル者ハ其設置ヲ欲セサル外人ヲ識知セサル是ナリ夫レ此等ノ外人ハ公衆ニ告知スル普通ノ手續即チ榜示若クハ其他ノ公布方法ニ由リ既ニ其告知ヲ得タリ外人之ヲ見テ己レニ害アリト爲サハ當ニ未ダ許可ヲ行ハサル下調ノ時ニ於テ故障ヲ申述スヘキノミ此時之ヲ爲サレハ是レ己レノ咎ナリ是レヨリ後ニ至リテ曾テ招喚セラレサルニ因テ今外人ノ故障申述ヲ爲ス者ナリトスルヲ得ス何トナレハ該外人ハ茲ニ論スル如キ場合ニ於テ常ニ用ユル所ノ方法ニ循ヒ實際上現ニ自カラ招喚セラレタレハナリ若シ其人自カラ出テ故障ヲ申述スルアルモ未ダ曾テ設置ノ事ヲ聞知セサル外人トスルヲ得ス然ラハ則チ官府ノ許可ヲ信シ大ニ費用ヲ出シテ營作シタル製造所ノ取崩ヲ其許可ノ後ニ命令スルハ不正ノ處分ト謂ハサル可カラズ蓋シ早ク自カラ訴ヘスシテ漫然時

第一五二五

少參議院ニ起訴シテ可ナルヤ否ヤノ點ニ就キ疑ヲ起シ得ヘケレトモ此
 問題ハ既ニ千八百五十二年三月二十五日ノ詔書第四條ニ依リ暗ニ起
 訴シ得ルト斷了セリ該詔書ハ所謂宰相ノ諭達書ナル者ニ頗ル權力ヲ
 與ヘ其第四條中ニ掲ケタル事項ニ關シテ州長ニ任シタル分權ニ就キ
 該事項ハ宜ク宰相ノ諭達書ニ依準制定スヘシトセリ
 人民其意ニ欲スルアレハ何レノ場合ヲ論セス常ニ詔勅ノ說明ヲ參議
 院ニ請フヲ得ルト信ス可カラス抑吾輩カ前段ニ掲論セシ所ノ者ハ
 唯、說明ニ關シテ參議院ノ職權ニ屬スル主義ヲ擧ケタルノミニシテ未
 タ此主義ヲ適施ス可キ特殊ノ場合ニ論及セス曾テ參議院ノ判決スル
 所ニ循ヘハ凡ソ詔勅ヲ以テ今爭訟スル所ノ目的トナサ、ル時及ヒ詔
 勅ニ關シ正反ノ權限抵觸訴訟若クハ裁判所ノ廻致等ノ事ナキ時ハ參
 議院ニ於テ其詔勅ノ說明ヲ爲スヲ要セス
 千八百二十三年十一月五日
 フラマン、クレトリ、件千八

百二十五年十月二十六日ドコスノ件千八百四十年七月八日ユセ
 件千八百四十年一月二十九日ビリエノ件千八百四十二年五月二十
 日ラツル件千八百四十五年十二月二十三日カバリエノ件千八百
 十七年七月二十四日シベラノ件千八百五十五年八月一日ユセ
 百五十三年十二月二日シベラノ件千八百五十五年六月十四日モ
 プール、エ、邑、件千八百六十年二月二日ロバンノ件千八百五十八年六月
 二十四日巴里府 此參議院判決ノ主意ハ之ヲ上ニ註記シタル諸判決中
 件判決ヲ看ヨ
 ニ明言セスト雖モ參議院ハ行政訴訟件ニ於テ一種ノ司法裁判所ニ屬
 スル職ヲ行フノ性質ヲ有セリトスル考案ニ就テ之ヲ發見ス可シ蓋シ
 裁判所ナル者ハ必要トスルコトナクシテ來リ求ムル者ノ爲メニ助言ヲ
 爲サス唯、既ニ發スル所ノ爭訟ヲ裁判スルノミ故ニ姑ク之ヲ例スレハ
 擴坑ノ受許與者ハ其意欲ニ反對スル官ノ判定アルヲ待タスシテ擴坑
 許與詔書ノ說明ヲ請求スルヲ得ス 千八百三十九年五月是故ニ製造所
 ノ持主ハ曾テ司法若クハ行政ノ裁判ナキニ拘ハラス行政訴訟手續ニ
 因リ該製造所ノ規則說明ヲ請求スルヲ得ス

第二百五二第

兩造ノ間ニ争訟ノ起レルノミヲ以テ其一方ノ者ニ公有地販賣ノ件ニ
 係ル説明ヲ參議院ニ請求スルヲ許サス故ニ之ヲ請求スルニハ先ツ司
 法官ノ判決ニ依リ之ヲ命スルアルヲ要ス 千八百三十八年六月
 二十三日ヲテテ判例
 舊政府ノ詔勅布令ニ關スル説明ノ請求ヲ受理セラル可キ時ハ縱令其
 説明ス可キ文書ノ行政訴件ニ係ラサル者ナルモ猶ホ行政訴訟ノ程式
 ニ準シテ之ヲ豫審シ之ヲ執行シ純然タル行政上ノ程式ニ循ハス 千八
 百四
 十一年一月二十九日ハ一七一七件千八百四十一年八月十六
 日ルニラビタリ一事件千八百四十九年六月一日ビオン判例蓋シ此説明
 ハ獨リ争訟ノ起レル場合ニ於テノミ之ヲ行フカ故ニ裁判宣告ノ性格
 ナ有ス加之ナラス該説明ハ往々兩造ノ權利ヲ傷害シ得ル所ノ裁判ノ
 基礎トナル可シ然ラハ則チ吾輩カ此説明ニ係ル參議院ノ職掌ヲ行政
 訴訟務中ニ列置シタルハ頗ル其當ヲ得タリ
 司法裁判所ノ廻致スル行政文書ヲ説明スル州長ノ決定書ヲ確認シタ

三十五百二第

ル宰相決定書ニ對シ行政訴訟ヲ起シ得ルハ前文ノ主意ニ因ル 千八百
 五十四
 年二月九日ア
 ナリヨ一判例
 是ニ由テ考フレハ一般ノ定規トナル可キ説明ヲ下シ或ハ一ノ争訟ニ
 關シテ參議院ノ宣告シタル判決ヲ以テ之ニ關係セサル外人ニ至ルマ
 テ守ル可キノ義務アリトスルコトハ行政訴訟ヲ判決スル參議院ノ權ニ
 屬セスト斷言セサル可カラス 千八百五十一年三月八
 日ユスカン會社判例
 行政訴訟件ニ係ル參議院ノ判決ヲ説明スルノ權ハ參事院ニ屬セスシ
 テ獨リ參議院ニ在ルヤノ問題ニ對シベナシ一ニ係ル千八百五十一年
 八月九日ノ判決ハ然リト裁斷シタリ此判決ハ直稅徵収者ニ對シ不當
 ニ拂ヒタル費用還償ノ請求ニ關シ參事院ニ於テ參議院ノ判決ヲ説明
 シタルヲ以テ越權ナリトシテ其判決ヲ取消シタル者ナリ 千八百五十
 三年三月二十
 十四日テニ判例
 權限抵觸裁判所判決

余ハ此參議院判決ヲ以テ其適度ヲ超過スト思量ス何トナレハ則チ既ニ參事院ヲ以テ之ニ出訴シタル費用還償ノ請求ヲ判決スルノ權アリトスルキハ何故ニ其判決ノ理由書中ニ行政訴訟ニ係ル參議院ノ舊判決ヲ勘査説明スルノ權ナキヤヲ知ルヲ能ハサレハナリ蓋シ此場合ハ恰モ控訴院ノ或ル判決ニ基キタル請求ヲ始審裁判所ニ致セル場合ト相同キナリ若シ此時ニ際シ被告ニ於テ控訴院判決ノ意義ニ就キ異論アレハ始審裁判所ハ原告ノ現ニ請求スル所ニ着眼シテ該判決ヲ説明スルノ權ヲ有ス然ラハ則チ參事院ニ對シ起シタル參議院判決ニ關シテモ亦之ト相異ナルノ理ナキナリ凡ソ此等ノ場合ニ於テハ宜ク本案訴訟ノ裁判官ハ併セテ附帶訴訟ノ裁判官タリト云ヘル格言ヲ適施スヘシ余案スルニ政府ヨリ發出スル文書ヲ説明ス可キ參議院ノ特權ハ獨リ之ヲ純然タル行政上ノ文書ニ限り眞ノ裁判宣告タル行政訴訟ノ判

決ニ推シ及ホス可カラサルナリ
余カ説ノ支柱タル千八百四十八年一月二十八日モナル件及千八百五十五年三月十五日ブロー事件判決ヲ看ヨ

余カ説ニ依レハ參議院ハシヨミノ一件ニ係ル千八百五十六年四月二十四日ノ判決ヲ以テ參事院ノ職權ニ屬スル爭訟ニ就キ「トロワ、ゼベシ」ニ於テ共有財産ノ分派ニ關スル千七百六十九年六月ノ王勅ヲ説明スルノ權ハ參事院ニ屬セスシテ特ニ參議院ニ諮詢決定ス可キ政府ニ在リト宣告シタルハ亦眞ノ主義ヲ蕪棄セリ蓋シ千七百六十九年ノ王勅ハ法律ニ代用スル規則ナリ故ニ余ノ考フル所ヲ以テスレハ之ヲ適施ス可キ參事院ハ亦當ニ之ヲ説明スルノ權ヲ有スヘキヲ猶ホ立法官會該件ヲ定メテ法律トナシタルキハ參事院ニ於テ其法律ヲ説明スルノ權ヲ有スヘキカコトシ

然レモ宰相ハ行政訴訟判決ニ係ル詔書ノ意義ヲ明定スルヲ得ス唯之

五十五百二第

ヲ執行スルニ止マル可シトスル參議院ノ判決ハ至當ノ裁判ト謂フ可
 キナリ千八百六十二年五月二蓋シ宰相ハ現ニ此行政訴訟判決ニ關係
 アルヲ以テ之ヲ説明スルノ權ナキヲ猶ホ私訴者ニ於テ其相手方ノ意
 ニ反シテ裁判宣告ヲ説明スルノ權ナキカコトシ故ニ上ニ註記シタル
 參議院判決ノ見解ハ明白ニシテ苟モ疑フ可キ所ナシ
 參議院ニ説明ノ權アリト認メタルキハ隨テ左ノ文書ノ意義ヲ明定ス
 ルノ權モ亦特ニ參議院ニ屬スト了解セサル可カラズ

第一 固有トナリタル僧寺ヲ邑若クハ寺務局ニ附與シタル政府ノ
 文書隨テ參議院ハ政府ニ於テ舊僧寺ヲ其所在地ノ邑ニ附與シタ
 ルヤ將タ寺務局ニ附與シタルヤヲ定ム千八百三十八年一月三十
 十八年二月十七日アルツァントン邑件千八百四十九年十一月二十
 三日ロナン邑件判決等但シ千八百三十六年十二月六日破毀法院
 裁判ノ反對説
 ナ參看ス可シ

第二 行政官及ヒ裁判所及ヒ教育上ノ所用ニ供シタル建物ヲ州郡
 邑ニ惠與スルコトニ關スル千八百十一年四月九日ノ詔書及ヒ諸許

與ニ關スル特別詔書 千八百三十五年三月六日大藏省件千八百三
 十九年二月六日ラ州件千八百四十四年六月二十日モセル州
 件千八百四十八年二月七日シラニ府件千八百五十二年十二月
 一日アンドンル、エー、ロアル州件千八百五十二年四月九日ノ詔
 年六月二十四日參事院及ヒ大藏宰相ハ千八百十年四月九日ノ詔
 破毀法院判決 是故ニ民事裁判所五千八百
 書及ヒ特別詔書ニ依リ不動産ヲ州ニ與ヘタル旨ヲ述ヘテ州ヨリ
 政府ニ對スル不動産請求ノ訴ヲ審理スルノ權ナシ諸判決ヲ看ヨ

第三 舊中央行政官ノ布令凡ソ此等ノ布令ハ參事院ニ於テ改正ス
 可カラサル文書ナリ隨テ本院ニ於テ之ヲ説明スルノ權ナシ曆第

第四 舊政府ヨリ發出シタル擴坑許與ノ文書 千八百四十三年七月
 十一年雨月八日ノ布令及ヒ千八百四十
 年二月二十七日クラ、件判決ヲ看ヨ

同年十二月三十日アン
ザン礦坑會社件判決

礦坑ニ關スル千八百十年四月二十一日ノ
法律發布ノ後ニ制定シタル許與ノ文書ノ意義ニ就キ受許與者ト

外人トノ間ニ爭訟ヲ生ズル時此許與文書ハ前ノ礦坑許與文書ニ

同一ナル可シ千八百四十八年九月十五日
アンザン礦坑會社件判決

第五 航行ス可キ水流上ニ設置スル水車若クハ製造所營造ノ許可

ニ關スル帝王ノ命令若クハ文書千八百四十年七月四日
セルスパーク件判決

第六 今佛蘭西國ニ併合シタル州ヲ領有スル外國君主ヨリ發出ス

ル文書ニシテ航行ス可カラサル水流ヲ邑民ニ賣與セシ者千八百
四十四

年十二月三十一日
ギイユアブ一件判決

第七 航行權并ニ運河ノ所有主若クハ受許與者ニ屬シ得ル其他ノ

權利ヲ明定ス可キ所ノ舊參議院判決書及ヒ國王ノ特許狀及ヒ王

勅等千八百四十五年七月三
十一日ドグラブ件判決

第八 沼澤乾涸ニ關スル舊參議院ノ判決書及ヒ王勅千八百四十五
年八月十二日

ルウチ一件及ヒ
モ子一件判決

第九 官職ノ價ニ相應ノ金額ヲ物品預ケ局ニ注納シ且ツ其官職ニ

屬スル貸與權ノ入額ヲ右ノ金額中ニ合算ス可キヲ特定スルノ

義務ヲ廢黜セラレタル公證人ノ嗣者ニ命シタル王勅千八百四十
五年八月三

十日シユクル
エ一件判決

第十 共和曆第九年兩月二十日ルニヒルニ於テ締結シタル和睦條

約ノ執行ニ因リ佛蘭西國ニ讓リタル土地ノ一部ナレド日耳曼帝

國ノ公家ニ屬セシ土地ヲ政府ノ所領ニ併合シ且ツ佛蘭西國ノ舊

領地ニ所在ノ財產ヲ此併合中ニ合メルヤ否ヤノ點ヲ決定シタル

共和曆第十二年花月二十一日ノ政令千八百四十七年七月十四
日ゴンドメーツ件判決

第十一 海岸ノ土地許與ニ關スル特許狀及ヒ此特許狀ニ掲クル約

款ノ履行ト此等約款ノ執行ヲ怠ラリタルカ爲メニ受許與者ノ失

權トニ關スル争訟千八百五十年七月一日ドグーベロ 權限抵觸裁判所判決

第十二 争訟ノ起レル場合ニ於テノ舊縣廳ヨリ發出シタル文書ノ

性格ヲ勘查明定スルノ權ハ特ニ參議院ニ屬ス千八百四十一年五月三日ドガリフエー

件判決

第十三 沼澤乾涸ヲ許與シタル王勅若クハ沼澤乾涸ニ關係スル所

有主等ノ支配人構成ノ方法ヲ定メタル王勅千八百五十二年十一月二十五日アロノ

件千八百五十三年一月十二日アロノ 件同年

水流上ノ製造所設置ノ許可若クハ政府ノ所領ニ屬スル土地ノ恩與等

ノ如キ行法官ニ於テ償ヲ要セスシテ許與ヲ爲シタル詔勅等ヲ説明ス

ルノ特權ニ就キテハ決シテ疑團ノ生ス可キナシ蓋シ規則ヲ變更スル

ノ權ハ行法權ニ固有ノ者ナルヲ以テ之ヲ説明スルノ權アルハ固ヨリ

六十五百二第

論證ヲ俟タス又公領ニ屬スル物件費用ノ許可及ヒ政府ノ所領若クハ
舊皇室ノ所領ニ屬スル物件ノ許與ノ如キハ警察上ノ處分若クハ行政
上ノ施設ニ係ル之ヲ發出シタル官廳ノ意思ニ違フテ其義ヲ推廣スル
ヲ得ス千八百二十年八月二十三日サグイエー 件千八百三十六年五月
六日バードカレ 州件同年十月十四日シカンシアン 件千八百
四十年七月四日セル スパルク件判決等

七十五百二第

然レモ舊新政府ノ發出シタル文書若クハ政府ノ認許シタル文書ニ因
リ政府ト人民トノ間ニ結ヒタル眞ノ交換契約トナレル所ノ賣買若ク
ハ交易其他之ニ類似ノ文書ニ關シテハ如何カ之ヲ斷定ス可キヤ參
議院ニ之ヲ説明スルノ權ナシト論セント欲スル者ハ曰ク賣買若クハ
交易ノ契約ハ政府ト人民トノ別ナク皆必ス履行セサル可カラスト謂
フヲ得夫レ政府自カラ契約ヲ結フキハ是レ所有主トシテ之ヲ行ヒ行
政者トシテ之ヲ爲スニ非サルナリ故ニ此時ニ當リ政府ハ其固有ノ主

權ヲ失ヒ法律ニ明記スル所用品供給契約若クハ土木請負契約ノ特例ヲ除ク外普通裁判所ノ裁判ヲ受ケサル可カラズ若シ夫レ然ラサレハ何人モ政府ト契約スルヲ欲セザル可シ其敢テ結約スルキハ政府ノ金庫ニ對シテ甚タ厭フ可キノ約款ヲ要ム可シ何トナレハ則チ此ノ如クシテ契約書ニ疑ヒチ生スル時ニ當リ政府ノ自カラ之レヲ説明スルノ權アルキハ一政府ニシテ併セテ結約者ト其結約ヨリ生スル訴訟ノ裁判官ノ地位ヲ占ム可ケレハナリト

右ノ論說ノ助ケトシテ諸法律ノ條項ヲ引證スルヲ得故ニ官ノ賣地ニ關スル共和曆第七年風月十四日ノ法律第二十七條ニ云ク證書ノ送達ヲ得タル後一ヶ月内ニ土地ノ占有者ニ於テ該證書ヲ以テ適施ス可カラストスル歟將タ不充○分○トスル時若シハ該占有者ニ於テ現時施行スル法律ニ掲クル特例ヲ享受ス可キ地位ニ在リト主張スル時若シハ

其他ノ如何ノ方法ヲ論セス所有權ニ關シテ爭論ノ起レル時ハ裁判所ニ於テ之ヲ斷定ス可シト本條中ニ言フ所ノ證書トハ賣買交易官地買入等ノ如キ賣與契約ノ文書ナリ之ヲ詳說スレハ國長ト官ノ賣地ノ占有者若シハ舊占有者トノ間ニ締結シタル眞ノ契約書ナリ其果シテ然ルコトヲ據證セントスルカ爲メニ上ニ引キタル第二十七條ハ何レノ場合ニ論ナシ國王ノ爲シタル土地賣與ノ證書ヨリ生シタル凡テノ爭訟ヲ斷定スルノ權ヲ裁判所ニ歸セシナリ

森林法第五十八條第三節ハ舊政府發布文書ノ説明ヨリ生シタル紛論アルニ拘ハラス消滅ス可カラサル權利ヲ以テ己レニ與ヘラレタリト受許與者ニ於テ主張スル所ノ政府所領森林ニ於テスル採樵權ニ係ル判決權ヲ裁判所ニ與ヘタリ又千八百二十九年四月十五日ノ法律第四條ハ更ニ司法官ノ權限ヲ明示ス云ク賃貸契約及ヒ入札契約ニ係ル約款

ノ説明及ヒ執行ニ關シ行政官ト契約者トノ間ニ生スル争訟及ヒ其權利其所有權ニ關シ行政官若クハ其代權者ト關係ノ人民トノ間ニ起レル凡テノ争訟ハ裁判所ニ致ス可シト是ニ由テ考フレハ凡ソ行政官ノ爲シタル漁魚權契約ニ關スル争訟若クハ所有權其他ノ名義ヲ以テ外人ヨリ要求シタル漁魚權ニ係ル争訟ハ裁判所ノ權限ニ屬スルナリ舊佛蘭西國王ノ爲シタル契約若クハ文書ニ頼リ漁魚權アリト人民ノ主張スル場合モ亦同ク裁判所ノ管轄スル所ナリ

是故ニ法律ハ所有權ノ賣與採樵權漁魚權ノ許可賃貸契約等ヨリ生スル凡テノ争訟判決ノ權ヲ裁判所ニ與ヘ其争訟ノ或ハ財産ニ關シ或ハ所有權ニ關スルト其契約ノ行政官ト爲シタルトハ固ヨリ論スル所ニアラス而シテ此ノ時ニ當リ參議院ニハ此等ノ契約證書ノ法ニ適スルト否ヤトヨリ起リタル争訟若シクハ該證書ノ説明ヨリ生シタル

第八百五十八

争論ヲ審理スルノ權ナシ

此等ノ道理アルニ拘ハラス參議院ノ判決ハ説明ノ權即チ新舊政府ヨリ發出シタル賣買及ヒ交易ノ契約書若クハ官地賣與契約書ノ意義ヲ分解シテ其程式ノ適否ヲ斷定スルノ權ハ獨リ國長ノミニ屬スルコトヲ許セリ此意味ニ循ヒ官ノ賣地ニ關スル千八百十二年七月三十一日デコト件千八百二十年十二月二十七日ブレトニエール件千八百三十八年八月十四日ロビノ一件千八百三十六年八月六日クエグレイ件等ノ判決政府ノ新所領地ニ關スル千八百三十六年五月六日バードカレ一件同年七月十二日ウラグラム公件千八百三十七年四月二十三日プルタン邑件等ノ參議院判決及ヒ千八百五十年七月一日ドグーベロ件千八百五十一年五月三十一日ジュアメル件ニ係ル權限抵觸裁判所判決等ヲ參看ス可シ

前項ニ掲ケタル論辯ニ反對スル者ノ言ニ曰ク共和曆第七年風月十四日ノ法律ハ官地買主ノ占有スル土地ハ賣與ノ名義ニ於テ之ヲ占有セサルヲ主張スル爲メ即チ土地ノ官有タルヤ將タ私有タル可キヤヲ裁判スル爲メニ官地買主ノ引證スル文書ノ性質ニ關スル問題判決ノ權ノミヲ裁判所ニ與ヘタルナリ千八百三十七年八月二十七日ドフエリーズ件判決然レモ官地賣與契約書ノ意義若クハ其不法ト否ヤトニ關シ爭論ヲ生スルルキハ法律ヲ作ル者ハ亦之ヲ説明スト云ヘル格言ニ循ハサル可カラズ隨テ共和曆第三年葉月十六日ノ法律ニ依リ行政官ノ文書ニ干涉スルヲ裁判所ニ禁スルヲ要スト此反對論者ハ森林法第五十八條ヲ根據トシタル論辯ニ對シテモ亦同一ノ答辯ヲ爲シテ曰ク本條ハ行政官ノ文書説明ノ權ナキヲ明言スルヲナクシテ司法官權限ノ主義ヲ定メタルニ外ナラス何トナレハ司法官ニ行政文書説明ノ權ナキヲハ之ヲ明言セストモ

自カラ其義ヲ含蓄スレハナリト又千八百二十九年四月十五日ノ法律第四條ニ關シテハ反對論者曰ク漁魚權ニ關スル契約書説明ノ權ハ之ヲ政府ノ文書ニ擬ス可カラス是レ此等ノ契約書ハ國長ニ於テ之ヲ作爲セサルニ由ル而シテ漁魚權若クハ所有權ニ關スル爭訟ヲ判決スル爲メ裁判所ニ與ヘタル權ハ之ヲ適施スルニ當リ裁判所ニ呈出セル勅詔若クハ政府發布ノ文書ニ就キ參議院ニ附シタル説明權ト相抵觸セサラシム可シト

共和曆第八年兩月二十日ノ法律第四條末節ハ國領ノ土地ニ關スル訴訟裁判ノ權ヲ參事院ニ與ヘ隨テ賣買契約書ノ説明及ヒ其適否ニ關スル問題判定ノ權モ亦之ニ附シタリ此條例ハ政府ト入札者トノ間ニ今尙ホ施行スルヲ吾輩カ後段ニ論スルカ如シ然レモ右ノ條則ハ一ニ其運命ヲ千七百九十二年ノ革命ニ委シタル國

領ノ土地購買者ヲ保護スルヲ目的トシタル者ニシテ今日ハ決シテ此
 ノ如キ條則アル可キノ理由ナシ何トナレハ現今ハ政府會人ノ土地ヲ
 賣却スルハ爲メニ外人ノ所有權ヲ剝奪セス且ツ土地購買者ハ司法裁
 判所ニ訴出シテ充分ノ保障ヲ獲ヘケレハナリ余カ著行政法
問題ヲ看ヨ
 特別法律ニ依リ土地ヲ許與シ其玉勅若クハ詔書ヲ以テセサルハ之
 カ説明ヲ爲スノ權ヲ裁判所ニ屬スルヤ將タ行政官ニ與フルヤ其權司
 法官ニ在リトスル論者ハ左ノ如ク叙陳スルヲ得曰ク「法ヲ爲ス者ハ亦
 之ヲ説明ス」ト云ヘル格言ハ今之ヲ適施スルヲ得ス裁判所ハ學士ノ說
 ニ頼テ法律ヲ説明シ及ヒ法律ヲ適施スルニ因テ生スル所ノ爭訟ヲ裁
 判スルノ權ヲ有ス何レノ法律モ未タ曾テ今論スル場合ニ於テ行政官
 ニ説明權ヲ有セシメタルコトアラス且ツ司法行政兩權區別ノ大則ハ此
 場合ニ用ナシ何トナレハ此時ニ當リ裁判所ニ於テ行政官ノ職權ヲ侵

九十五百二第

估スルノ恐レナケレハナリト此等ノ道理アルニ拘ハラズ參議院ハ今
 論スル種類ノ許與法律ヲ説明スルノ權ハ行政官ニ屬シテ裁判所ニ在
 ラスト判決シタリ千八百四十五年十二月二
十四日下ナセル件判決抑此判決ノ基ク所ヲ究ム
 レハ此法律ハ單ニ政府ト邑トノ間ニ結ヘル契約ヲ認可スル爲メニ爲
 シタル特別ノ性質ヲ有スル者ナルヲ以テ之ヲ純然タル行政文書トナ
 スト謂フニ在ルナリ上ニ引キタル判決ニハ説明權ヲ參議院ニ與フ可
 キヤ將タ參事院ニ附ス可キヤヲ斷定セス某ノ論者ハ共和曆第八年兩
 月二十八日ノ法律第四條ニ依リ國領ノ土地賣買ノ場合ニ於ル如ク其
 權ヲ參事院ニ與フ可シト言ヒタレハ是レ謬見ノミ蓋シ共和曆第八年
 ノ法律ハ州廳ニ於テ舉行シタル國領ノ土地賣買ニ限ル可シ今論スル
 場合ニ於ル説明ノ權ハ參議院ニ屬ス故ニ該法律ハ中央政府ヨリ發出
 シタル直接ノ許與ニ適施スルコトナシ殊ニ賣買ノ性質ヲ有セスシテ許

與ノ性質ヲ有スル文書ニ於テ然リトス
 參議院ニ政府ノ文書ヲ説明スル權ヲ附スル通則ハ元來司法官ノ權限
 ニ屬スル事項ニ關スル王勅若シハ詔書ニ適施ス可カラズ就中間稅ニ
 關スル者ノ如キ是ナリ但シ間稅徵收ニ係ル爭訟判決ヲ裁判所ニ附ス
 ルハ法ニ依テ納稅者ノ爲メニ定立シタル保障タルハ之ヲ後章ニ論
 ス可シ果シテ然ラハ今論スル如キ事項ニ勅詔ヲ適施シ學士ノ說ニ依
 テ該勅詔ヲ説明スルノ權ハ該事項ニ關スル爭訟ヲ裁判スルノ權アル
 ニ由テ生スル者ナリト謂ハサル可カラズ万一之ニ異ナリタル見解ヲ
 下スナ許スハ是レ立法者ノ代理タル名義ヲ以テ爲シタル王勅若シハ
 詔書ニ眞ノ法律ヨリモ一層重大ナル力ヲ與フルナリ是レ昔時ノ「レス
 クリー」ノ惡習ヲ採用シテ君主ノ私意ヲ裁判所ノ公判ニ代ヘ法律上司
 法官ノ權限内ニ置キタル事項ニ就キ人民ニ確授シタル保障ヲ之ニ奪

フナリ加之ナラス此等稅額ヲ定メタル勅詔ハ特別法律ノ用ヲ爲スカ
 故ニ一般定規ノ性質ヲ有セリ請フ一例之ヲ辯セン今渡橋稅若クハ渡
 船稅ヲ定メタル王勅ヲ適施スルニ當リ收稅者ト納稅者タル人民トノ
 間ニ爭訟ヲ生シタリト保定セヨ此時之ヲ訴出セラレタル裁判官ハ行
 政官ノ此定稅表ヲ説明シ了ルマテ爭訟ノ裁判宣告ヲ延期ス可キヤ曰
 ク否稅額ヲ定ムル王勅ハ原ト立法權ヲ代理スルニ由テ發出スル者ナ
 ルカ故ニ法律ノ性質ヲ具有セリ而シテ法律ヲ説明スルノ權ハ裁判所
 ニ屬スルヲ以テ法律ノ性質ヲ具有スル王勅ヲ説明スルモ亦裁判所ノ
 職掌タルハ固ヨリ論ヲ俟タサルナリ千八百四十二年七月十二日千八
 四十七年八月二十八日破毀法院裁決千八百四十二年三月十日シアル
 ニ一件ニ係ル參議院判決及ヒ千八百四十年七月三十日大藏宰相件ニ
 關スル權限抵觸裁
 判所判決ヲ看ヨ

第五節 直接ニ參議院ニ致セル行政訴件

（提要第二百六十一）直接ニ參議院ニ致セル行政訴件〇佛蘭西銀

行及ヒ「マシナラ」ニ屬スル財産ヲ可キ不可ニ關スル訴訟

一十六百二第

參議院ハ法律若クハ行政法規ニ依リ直接ニ其調査ニ附ス可キ凡テノ行政訴件ヲ判定スル詔書案ヲ議決起草ス千八百五十二年一月二日詔書第一條論辯右ノ條則ハ參議院ニ於テ或ル行政訴件ニ關シ始審及ヒ終審裁判所ノ職ヲ行ヘル場合アルコト豫定セシナリ千八百六十六年四月二十二日ノ法律ハ之カ一例ヲ示ス故ニ其第二十一條ニ云ク參議院ハ大藏宰相ノ申報ニ依リ銀行ノ法律及ヒ定規ニ係ル違犯及ヒ銀行ノ内部取締及ヒ管理ニ關スル争訟ヲ裁判ス可シ又參議院ハ銀行ト其會議員若クハ役員トノ間ニ係ル要償ノ訴ハ勿論凡テノ民事上ノ處斷及ヒ免職廢職ニ關シ確定終審ノ裁判ヲ爲ス可シ但シ其他ノ争訴ハ都テ當該ノ裁判所ニ申告ス可シト

參議院ハ「マシナラ」ニ係ル行政訴訟裁判權ヲ有ス是故ニ本院ハ左ノ二項ニ就キ其取消ヲ宣告スルヲ得

第一 「マシナラ」ニ屬スル財産所有者ノ締結シタル賣與贈與等若クハ書入質ノ契約ヲ適法ノ者トシタル凡テノ裁判千八百八十四年三月一日ノ詔書第一條

第二 必要ノ程式ヲ履踐セサル「マシナラ」財産ノ賣與若クハ交易契約同上ノ詔書第六條

吾輩ハ「マシナラ」ニ關シテ長ク之ヲ論セサル可シ何トナレハ「マシナラ」ノ制度ハ之ヲ後來ニ行フヲ禁シ且ツ平民ノ財産ニ負ハセタル「マシナラ」ノ期限ハ之ヲ二等ニ止メタレハナリ甲者ノ財産ヲ漸ク乙丙ヲ得ルヲ謂フ（原註）千八百三十五年五月十日ノ法律第一條然レモ政府ニ收復權ヲ屬シタル財産ノ贈與ハ封狀ニ依準シテ仍ホ存在スルノ故ヲ以テ同上ノ法律第四條

參議院ハ尙ホ久シク之ヲ適施スルヲ得^{マシナラシ}及^ヒシユ^グス^チチ^ユン^ニ關スル千八百四十九年^ノ法律

恩與スルヲ得ル財産ノ過分ヲ以テ「マシナラシ」ニ屬スル財産ヲ組成シタルニ由リ此「マシナラシ」ノ取消ヲ要メントシテ行政訴訟手續ニ從ヒ直接ニ之ヲ參議院ニ出訴スルヲ得ス此ノ如キ訴件ハ司法宰相ノ起議ニ依リテ作りタル參議院ノ特別詔書ヲ以テスルノ外得テ判定ス可カラス 千八百五十四年三月十日マビール判例決

第六節 行政訴件ニ關スル參議院ノ職掌上ニ於ケル一般ノ注意

(提要)第二百六十二 普通裁判上ノ問題及ヒ純粹ノ行政上ノ問題ニ關シ參議院ニ其判決權ナキ事
第二百六十三 行政訴件ニ關シ參議院ヨリ發出スル判決ノ性

質

第二百六十四 結果○第一、參議院ハ後來ノ規則トナル可キ方法ニ因テ裁判宣告ヲ行ヒ及ヒ他ノ請願ヲ待タスシテ判決ヲ行フヲ得ス

第二百六十五 第二、參議院ノ判決ハ控訴ス可カラサル裁判宣告ノ力ヲ有ス

第二百六十六 第三、始審裁判ヲ經サル訴訟ヲ直チニ參議院ニ致スヲ得ス

第二百六十七 第四、參議院ノ判決ハ隨テ書入質權ト必需執行權トヲ生ス

第二百六十八 參議院判決ノ執行裁判ノ權ハ固ト普通裁判所ニ屬ス

第二百六十九 上ニ舉ケタル例則ノ限界

第二百七十 豫審ノ判決ニ係ル他ノ特例

第二百七十一 參議院ハ罰金ヲ減免スルヲ得

第二百七十二 參議院ニ於テ被告トナル外國人ニ命スルヲ得

ル所ノ保證

第二百七十三 參議院ハ下等法衙ニ代リテ自カラ本案ノ判決

ニ從事スルヲ得ルヤ○其區別

第二百七十四 訴訟法第四百七十二條ハ參議院ニ因テ適施セ

ス

第二百六十二

茲ニ行政訴件ニ係ル參議院ノ職掌上ニ就キ必ス注意セサル可カラサ
ル者アリ何ソヤ曰ク參議院ノ判決權ハ畢竟行政裁判ヲ行ヘル國長ノ
判決權ニ外ナラサルカ故ニ參議院ハ所有民生國人タル事四年八月十

日ク¹¹件判決¹¹ニ國民ノ自由權及ヒ司法裁判所ニ於テ保障ス可キ其他ノ事
項ニ係ル訴件ヲ判決スルノ權ナキナリ曰ク參議院ハ權限抵觸訴訟裁
判ノ方法ニ於テ行政司法兩權ノ分界ヲ定ムルノ權ノミチ有スルナリ
曰ク參議院ハ真ノ司法權限内ニ於テ苟モ裁判權ヲ有セサル是ナリ
行政權ノ境界極メテ廣大ナレハ萬般ノ事悉ク皆行政訴訟ノ最上等法
衙タル參議院ニ歸着セス故ニ既ニ司法訴件ヲ行政訴件ト分テタルノ
後ハ更ニ第二ノ界線ヲ定メサル可カラス即チ純然タル行政務ト行政
訴訟務トノ區別ヲ立テサル可カラス此純然タル行政務ト行政訴訟務
トノ大界線ヲ畫スルハ參議院ノ職ナリ故ニ本院ハ各官廳ノ權限ヲ定
ム加之ナラス參議院ハ司法行政兩權ノ裁判權ヲ規定監督シテ凡テノ
行政司法裁判廳ノ上ニ臨ミ之ヲシテ各其職域内ニ在ラシム而シテ何
レノ官衙モ敢テ參議院ノ判決ヲ改正スルノ權ナシ然レモ法律ニ依リ

行政裁判所タル參議院ヲシテ純然タル行政務ヲ執ラシメズ是レ裁判官タル皇帝ノ利益ト行政ノ上長官タル其利益ト並ヒ行ハレテ行政ト行政裁判トノ間ニ調和ヲ保持シタルニ由ル若シ然セスシテ參議院ヲ以テ行政訴訟ヲ裁判ス可キ獨立不羈ノ終身官トナストセヨ必ス忽チ拮抗スル兩權ノ間ニ相疾惡スルノ情ヲ生スルヲ疑フ容レズ而シテ此兩權ノ職ヲ分テテ爾境界ヲ定ムルハ頗ル難事ナルヲ以テ隨テ生スル所ノ疾惡ノ情モ殊ニ危險ナリトス千八百四十八年ノ國憲及ヒ共和政參議院ニ關スル千八百四十九年三月三日ノ法律施行ノ時ニ實驗スル所ヲ以テ極メテ其然ルヲ知ル

行政事件ニ係リ參議院ヨリ發出スル判決ノ性質ハ該判決書ニ就キ皇帝若クハ參議官等ノ關係ヲ姑ク舍キテ觀察シ去レハ如何ナル者ソヤ宜シク稱シテ行政上ノ文書ト爲ス可キヤ將テ裁判宣告書ト爲ス可キ

第三十六百二第

ヤ吾輩ノ思考スルニ依レハ首トシテ司法上ノ判決ノ性質ヲ有スルヲ覺ユ即チ參議院ノ判決ハ命令ト云フヨリモ寧ロ裁判宣告ト云フヘキナリ故ニ其判決前ニ司法上ノ普通裁判ノ程式ニ依倣スル所ノ外部ノ準備如何ニ拘ハラス參議院ノ判決ハ裁判宣告ニ關スル凡テノ效果ヲ生出シ且ツ普通ノ故障申述外人ノ故障申述若クハ敬慎ノ訴ノ手續ニ由リ之ニ對シテ出訴スルヲ得ヘシ是ヲ以テ吾輩ハ參議院ノ判決ヲ名ケテ「アレー、ジ、コンセイ」ノ判決ノ義ト稱セリ蓋シ此稱呼ハ舊時ノ法律ニ借用シ政府ヨリ發出セル諸文書ニ冠ラセタル者ナリ殊ニ千八百九九年二月七日ノ證書及ヒ千八百十四年六月二十抑夫レ法律上ニ於テハ國長ヲ以テ參議院ノ判決ヲ下セル者トスルカ故ニ參議院ヲ以テ判決ヲ爲セル者ト思察セシム可キ「アレー、ジ、コンセイ」ナル稱呼ハ固ヨリ不適當ナレトモ理論上及ヒ實際上ニ於テハ行政法規若クハ其他ノ詔書ト參議院ノ判

四十六百二第

決トナシテ相混合セサラシムル爲メニ此ノ如キ稱呼ヲ用ユルヲ便トス
 是レ吾輩カ「アレ」シ「コンセイ」ト云ヘル稱呼ヲ取リタル所以ナリ但シ
 法律若クハ政府ノ文書等官用ノ言語ニ關シテハ此稱呼ヲ避ク可シ
 行政訴件ニ關シ參議院ハ行政裁判所ノ職務ヲ行ヒ隨テ其發出スル文
 書ハ裁判宣告書ノ性質ヲ有スルカ故ニ左ノ如ク論定セサル可カラズ
 第一 參議院ハ行政訴件判決書ノ程式ニ於テ一般ノ定規トナル可
 キ方法ニ依リ裁判スルヲ得ス民法第五條第此ハ是レ命令ヲ下シ若クハ
 規則ヲ定メテ其職ニ服スル行政權ト他ヨリ請願スルノ後ニ非カ
 レハ裁判スルヲ得サル特殊ノ爭訟ニ關シテ判決ヲ下セル所ノ普
 通裁判所若クハ行政裁判所ノ行ヘル司法權トチ區別スル要點ノ
 一ナリ

五十六百二第

第二 參議院ノ判決ハ控訴ス可カラサル裁判ノ力ト權トチ有ス故

六十六百二第

ニ上等裁判所ノ裁判ニ於ル如ク普通ノ故障申述外人ノ故障申述
 若クハ敬慎ノ訴ニ依ルノ外敢テ之ヲ代フルヲ得ス千八百二十六年
日ノ詔書第二十九年第三十二日第三十七條及ヒ
千八百五十二年一月三十日ノ詔書第二十條

第三 參議院ハ上等裁判所ノ職ニ服スル時ニ當リ未タ下等裁判所

ニ訴出セサル事項ノ本案裁判ニ着手スルヲ得ス千八百三十九年
一月千八百四十三年三月三十一日エゾイアン件千八百四十七年
一月五日アラ件千八百四十八年十二月二十日クレンモン件千
八百五十二年八月二日ア件千八百五十三年一月六日ボンセ一件
二月二十二日テ件千八百五十三年一月六日ボンセ一件
同年八月二十二日メ件千八百五十三年一月六日ボンセ一件
十六年一月九日メ件千八百五十三年一月六日ボンセ一件
 ノ訴件ヲ附加スルヲ禁スル訴訟法第四百六十四條モ亦移シテ
 參議院ニ適施ス可シ千八百三十九年一月二十五日テ件千八百三十九年
一月千八百五十年一月十九日ド件千八百四十一年一月二十八日シ件千八百四十一年
一月千八百五十一年五月十七日アル件千八百五十一年五月十七日アル件千八百五十一年
 セハ某ノ邑アリ鐵道會社ニ於テ其供用スル通路ヲ回復シタル方法ニ